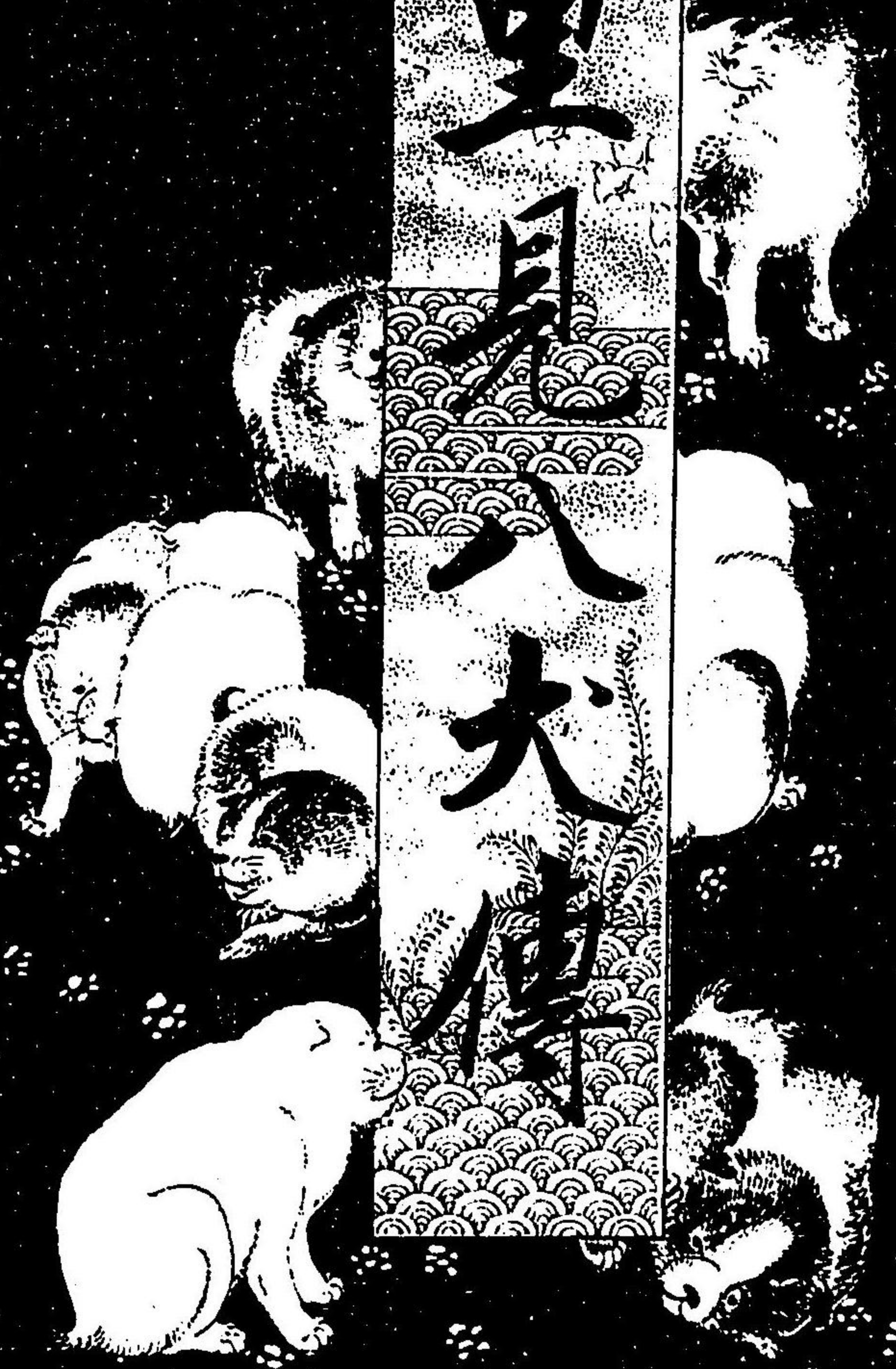
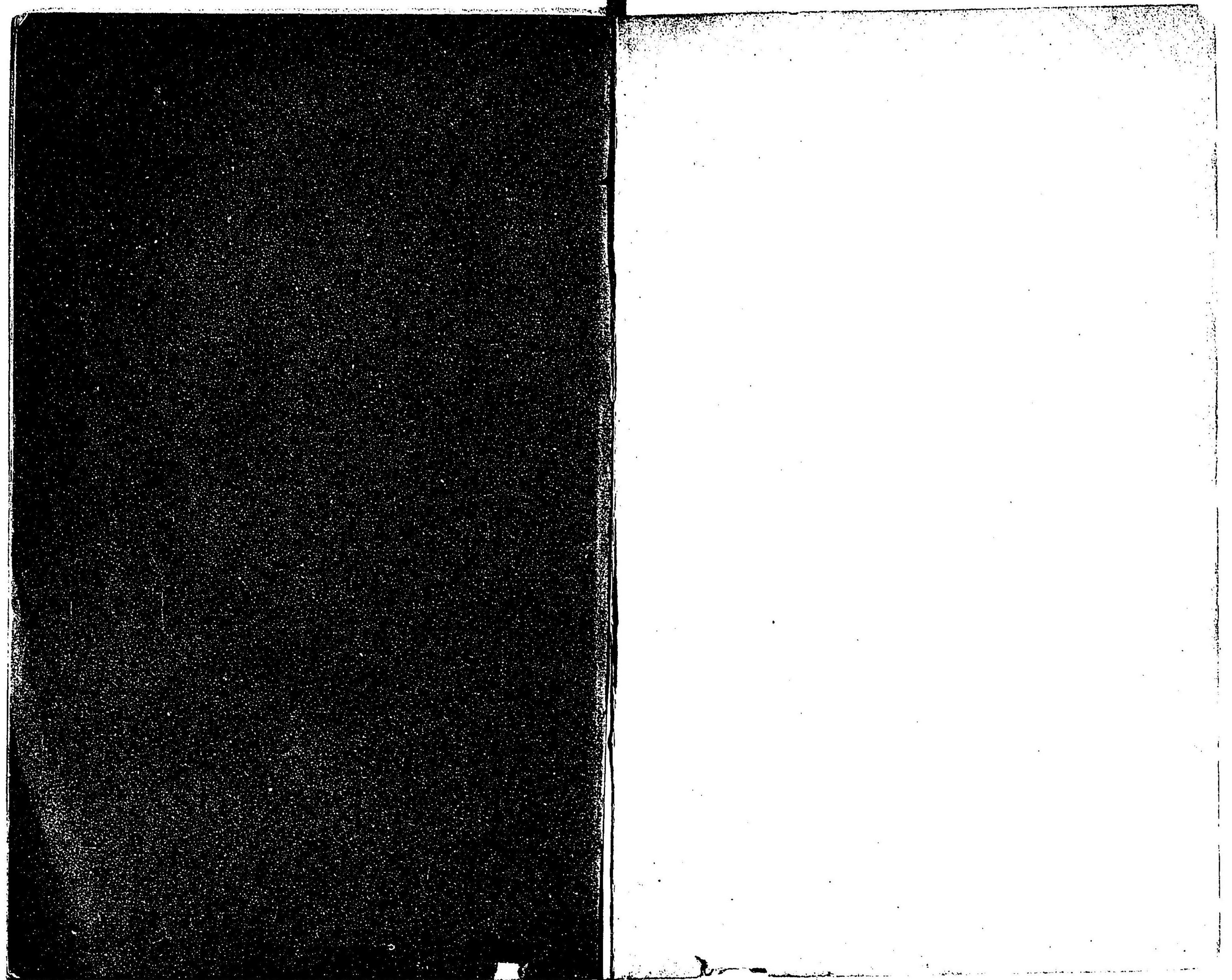


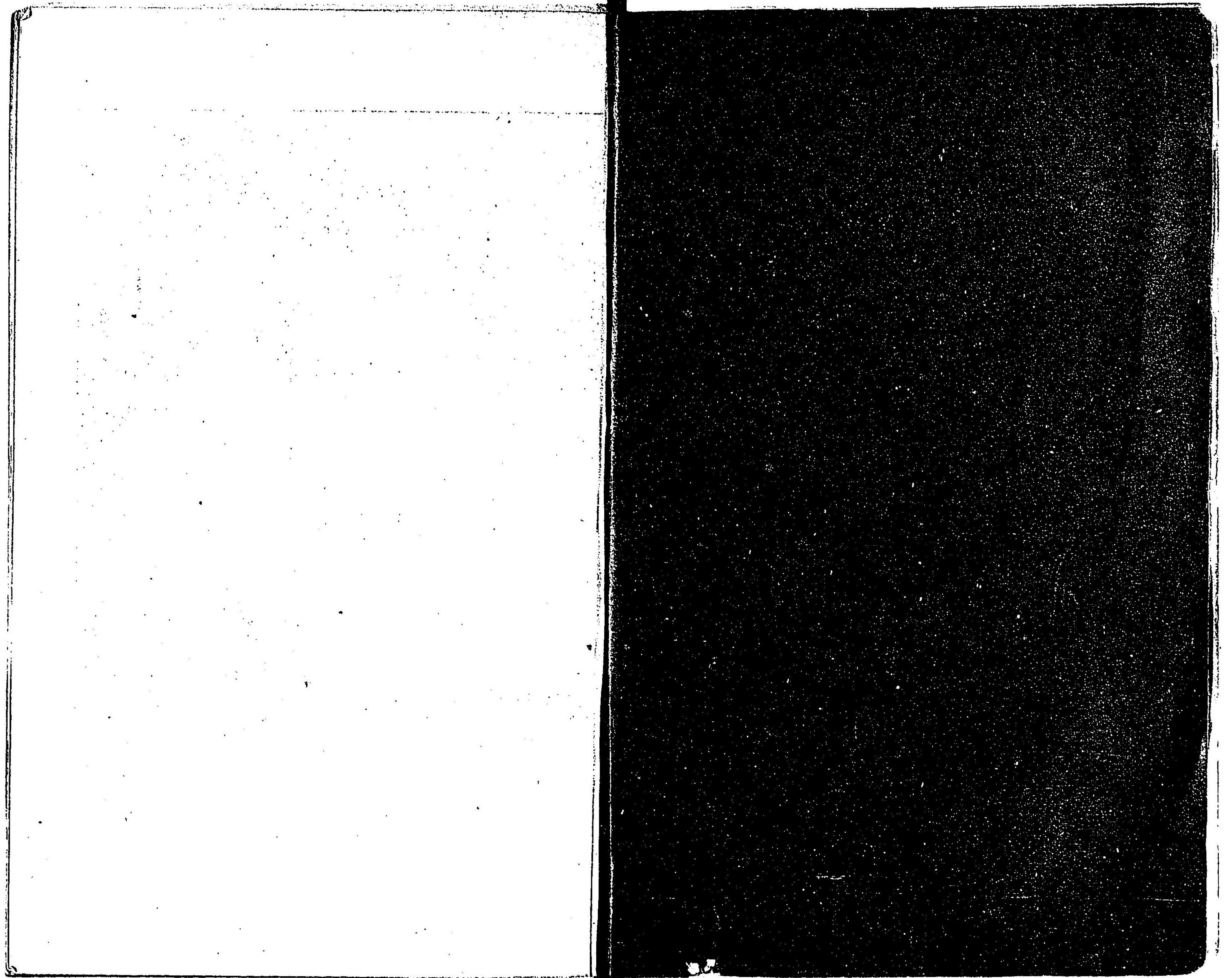
167
3

奥月大津



牛







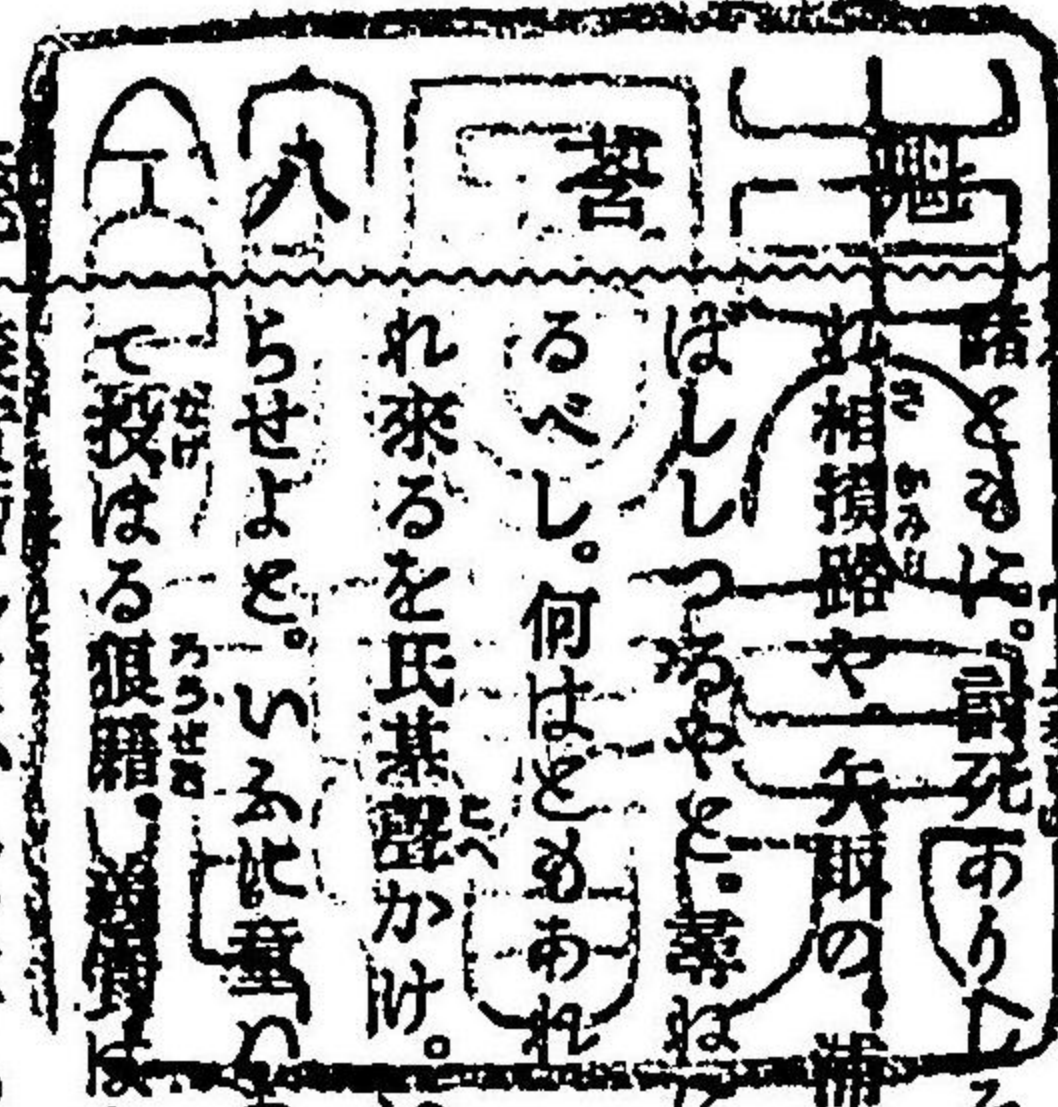
校訂 里見八犬傳 第一回

山田案山子 著

矢取の浦

花

犬の夜を守るや性なり主を敬ひ主をしるや又性なり。臣子のその職を守りて。私なきも又斯の如し。かの
の世定まつて曇りなき。天津日嗣百つぎあまひ。後花園院のチロシ統御ある。民の榮へぞ類ひなき。頃ハ嘉吉二年
の春結城の城主朝氏と聞へしは。武威を頼みて京家を叛き。籠城三年よよべ共。終に弓折矢種つぎ。里見季基



結

諸とるに。討死あり。その中。里見又太郎義實は。おもき父の遺言に任せ。杉倉堀内両士を従へ。虎口をのが
相損路を。矢取の浦に着到ある。義實仰出さる。いかに氏基。堀内貞行の見へさる。もし引かへし討死
はし。つぎ。義實は。氏基兩手をつぎ。イヤ。藏人御供におくれ候は。安房の方へ渡るべき船を求めん爲さ
るべし。何はともあれ。君にハ無敵に臨ませ給ふらん。なよかなと打みやる。磯邊づたひよ海士の子が。打つ
れ来るを氏基。いかに童見。是におりする御主人の。餓にのぞませ給ふぞよ。何にてもあれ食物あらハ参
らせよ。いふに。童見のさわらひ。軍に負て逃て来た。弱みそにやる物はな。ひだるくハ是やると。よく取
て授はる狼藉。義實は。やく手を受給へは。氏基ハ腹にすゑかね。ヤア憎さ磯虫と。目に物みせんと上るを。
義實暫しとおしとぐめ。ア。さなせそ氏基。いにしへ晋の文公は。民のわたへし地をいたゞき。覇業を開きし例
もあり。今童が授たる塊。思はず我手に受とめし。天より我に國土を賜はる。吉瑞とこそ思ふなれ。アラ有がた
やと押いたゞき。荒瀬と笑ふ寛仁大度。さてこそ思ひ安房上總。手に握るべき前表と。後よご思ひしられたり。
童おもは手を叩き。いかひたわけとよめきて歸るを見捨。基は。感じ入たる折しむあれ。俄に沙風吹かれて潮
逆まく海原より。現れ出たる希代の白龍。雲に飛のり火龍を吐。雲井はるかに登り行。義

實きつと打守り。あれを見よ氏基。今海中より白龍めらはれ。南の空へとびさりし。彌もつて目出度瑞相。白さは源氏の旗の色。是より南は安房上總。己が手に入べき天の告。ハハ悦ばしや嬉しやと。勇み給へば氏基も。ともに浮々小踊の。時しも磯邊へこさくる早船。堀内藏人御馳に参上と。呼はる聲に主従の。はや乗うつる海士小舟。みなみを。さしてそ。

其一 落葉圖

出役の安房の國瀧田の城主に神與長門の介といふ者あり。色と酒とに政事を忘れ。けふは落葉が岡部なる山狩せんと乗鞍に。民のなげさむしら月毛。口取同勢勢子の者。那古の七郎に先を拂はせ。駒をす、めて歩ませけり。那古の七郎すくみ寄。是より先の岡へか、れば。歩行ながら落葉の詠め。しかるべからんといはせむ立ま。ア、イヤ、馬上のなかめも一興と。手綱かいくり進ますれど。馬は嘶き身ふるひし。先へ行ぬぞ不思議ある。那古の七郎轡をひかへ。コハ心得ぬ御有さま。俄に馬のす、まぬは凶事あるとをしらすやらん。イヤ、くはより御歸館と。云せも果す何さく。予が馬の城内を出しとさ。俄もやみて倒れし處。山下貞兼が勸めによつて。彼は秘藏の此白馬子に奉りし。貞兼が忠義。され共馬は我くら味をしらざれば。進まぬも不思議にあらす。武士の狩倉は出陣同然。半途より引かへさば。諸人の嘲りわらひの種。只いそふれと一徹の。主命是非も那古の七郎。さらばと勢子を勵まして。登る茂みに矢壁の絃音。聞ゆる程も荒氣の大將。胸板のぶかに真逆さま。あへなく息の絶にけり。那古の七郎仰天し。扱こそく。馬の嘶しは。かゝる凶事のしらせならん。何にもせよ主人の歎。尋ね出して討て捨ん。者どもつゞけと先よたち。山路をさして。走行。こなたの茂みみし分て。ぬつと出たる杣木杣平。傍り見廻したち寄て。主ハ金輪八郎どのを譏言し。國家を亂す貞包め。恨の十矢覺へしかと。いひつ、立寄陣笠

花魁八蒼總

かあぐり。頭うち詠め。ヤア貞包めと思ひの外。コリヤコン大殿光弘殿。南無三寶しなしたり。ハアはつと計よ果れ果暫し。詞もあかりしが轟く崩をおししづめ。ハテ合点の行ぬ。此馬の見覺へある貞包が乗馬。毛色を目當に射留しに。扱の山下めが奸計にて。己が馬に主君を乗。わが謀の裏をかきしか。ヤエ、口惜や無念やと。拳をにぎり身をふるひし。悔み涙にくれ居たる。や、有て突たち上り。此上は貞包が宿所へかけ付。一太刀なりと恨みんと。いさはひ込で欠行とるに。胸板どろどろニツ玉。鳩尾を打れ七頭八倒。其ま、そこに倒れ伏。澤邊に生ふる若原より。頭われ出たる山下貞包。鐵炮引さげひとり笑。ハハ、ハハ。テ心魂よやな。我計略の的のはづれぞ。白馬を目當めわれと思ひ。長門の介を討たる大馬鹿。コリヤイヤ下司下郎の分際で。此貞包を討んと。蟻螂が并及のぬ。光弘落命いたせし上は。神與の家督の最早わが物。日頃の大望いまこそ成就と。始めて明す謀叛の杖ざし不敵といふもあるか也。いつの間にかの七郎が。取てかへして始終のやうす。聞よりせき立抜刀。貞包覺期と切込亦さき。引はづして援打よばつさり血煙。見向もやらすかしこむかひ呼子の笛。相圖とみへて麓より。ひそく出来る忍の大勢。夫とみるより貞包機。コリヤこへが高い。力事の館でいひ聞せん。長門の介が死骸を片付。跡より來れと先に立。心は雲に羽をのす思ひ。うへ見ぬ鷲の。空頼み瀧田。をさしてぞ

其二 景連館

「行水の。流れの末の。定めなき。人のよるべや白書院。晝夜をわかぬ身の者。けふ客來と掃さうち。庭の掃目。打水も。事嚴重にみへにけり。館の主安西景連。出迎ふ間もあく入來る。平館の城主問呂の信時。互に會釋し上座に付。是ハハ景連殿。相替らす御五調。先以て祝着至極したが。つて今日推参いたす事余の義にあらす。瀧田の城主神與光弘。落葉が岡にて横死の。ち。山下貞包家國を押し。貴殿や某にも幕下よ付よと。日毎の催促貴殿の

花魁八蒼總

所存はいかゞやらん承らんため参つたりと。いふに景運聲をひそめ、貞包主家を押領すれば、家中の者は心々其座に乗て瀧田の城。攻落さん我所有、成ほど某逆も其心。しかし邪智深き貞包。うかつよ攻か、らば毛を吹て疵、とく謀を廻らすにしくのなしと。密談なかばへ取次の侍能出。只今里見義實と名乗。主従三人、景運公に御頼の筋ありと。玄關まで推参仕る。通し候はんやと伺へば、結城の落武者義實王従。頼みとは台力無心ならん。早追立よと荒立の。詞を信時暫しと制し。義實が心はしらねと。もしばつかへし山下が。幕下につかば。まさかのときおの妨け。まつ呼入て對面し。かふくと耳に口。景運はくく打うなづき。實尤しからば其者はへ通せ、心しれざる落武者なれば、弓矢をもつて取圍み。油斷をく巡來れと。下知の詞に家來をも。表をさして走り行。待間程なく里見義實、前後を圍む鎧袂に。ちつとも應せず大勇の。主におとらぬ氏基貞行。眼を配りのつしく。おめす臆せず出來る。景運見るより聲をかけ、結城の落武者里見義實と、御邊よな。頼みありとは何事やらん。仔細聞んと緩言。仰の如く。里見又太郎義實、いまだ初對面の安西氏武勇の家と聞及ひ。推参せしに當家の長久を思ふが故。然るに聞しとは雲泥の相違。存の外ある柔弱未練、ものや直談申もひやく。イヤ歸らんと立上る。けしさに堪へぬ短慮の信時。ヤアめくちも切ぬ分際で。柔弱未練との過言至極。かくいふは平館の城主小五郎信時。主にかはつて其譯聞ん。サア返答いかにと居丈高。義實莞爾と打笑給ひ。ハ、ハ、お尋ならば相演ん。安西氏は一城の主。某主従わづか三人。もしもの事も在んかと。仰々しく大勢に。弓矢をもたせ取巻しは義實が武勇を恐る、柔弱未練、なんとそふの思さぬかと。烈しき詞に信時の。言句に詰るまじめ、景運巡わざと面を和らげ。イヤなう義實殿、道理の一言感心いたす。シテ我家の長久とはいかある事と。探る間に威嚇を正し。山下貞包主を殺し。其家國を押領すれ共。征伐の沙汰ある。惡事をさしをく政道の怠り。もし鎌倉の間に達せり。

花魁茗八總

當家も同じ惡逆の罪。攻むられん家のうち。去によつて貴殿をす、と。山下征伐を催ふさんため。身不肖なれ共推参いたすと。一言よとせぬ辨舌に。邪智の景運横手を打。三拜するぞおかしけれ。ア、ある程。御邊の詞に夢さめて。山下を伐亡さん。それにつき頼み入たき一義あり。我家の住例よ。旗祭に鯉を備ふる事は吉例。けふより三日のうちに。鯉を釣上持参せられよ。ハ、こはいと安き御頼み。三日はさて置今日中に。鯉を釣上御目にかけん。ハ、しかと詞をつがひしぞ。いふにやあよ早お暇と立上り。是や其身の出世鯉直なる針の釣たれし。滑浪の例ひく糸や別れを。告て主従は魚ある淵へぞ。

其三 白箸川の段

出て行、千早ふる神代のひかし幸がへせし。彦火の神子の夫あらでたる。釣竿景運が。底意は夫と白箸川里見又太郎義實公。心あらざる釣糸の。長さ。日脚も三日の氣も夕陽と傾ひけり。此方の方より怪しの非人。飄然として歩みより。や、打ながめ傍に立より。イヤあふ人々は鮎や蝦のか、るは打すて。何を釣んどこりづまよ釣る、事のおかしきよと。手を叩いてぞ笑ひける。物にこらへぬ堀内藏人。ヤア慮外ある非人め。忝くも里見義實公。安西が頼によつて。旗祭りの鯉を釣給ふを。妨あさば手は見せぬと。さつば廻せば猶打更らひ。ソレくそれが大きな間ちがひ事。此國には鯉にせうと思ふても鯉の無い。夫を釣との景運が奸計。罪を拵へ殺さんとの。工みに心付ざるや。笑止くといひすて。行んとするを義實公まつ暫らくと呼留たまひ。非人に似合ひその一言。見れ愚にも景運は欺かれ。三日が間方々と釣をあるせと。小鯉一足釣ぬも道理。此國よなき鯉を釣とは。我を罪せん巧よ。もしをのがる、術あらば。聞まはしやとのたまへば。非人はこもを脱すて。某の金助八郎と申者。山下貞包に主家を奪はれ。其無念やみがたく。力と頼む人もがなと思ふ折から。君此國へ渡り給ふと聞、何

花魁茗八總

とぞ拜顔せんもの。此所へしたひ参つたり。君はより義兵を上。貞包を誅伐をし給ひ。家の榮万民の幸ひならんと金鞠が。事もなげなる一言に。義實悦喜の眉をひらき。我此所へきたる道にて。白鳩のまた飛出で。瀧田の方へ飛行し。思ひを神の導引あらん。併兵糧軍勢も。乏しき此身に本望を。達する時の有にこそ。孤獨の身こそ力をあれど。悔み給へば。コハいひ申斐なき御詞。暴悪無道の山下貞包。君義兵上給ひ。神與恩顧の涙人ども。とくく味方せん。尙も某手段をめぐらし。軍勢さいそく仕らん。ホ、天晴あり汝か心底。頼母し、く。密に軍の手筈せんと。浮立給ふ義實公。いさや味方をあつめんと打つれてこそ。

其四 貞包館のぞん

「行空や。浮る空に譬たる。不義の富貴に山下貞包。女小姓に酌せさせ酒池の遊びの。もつれ舌。ヤア女ども。先王光弘が愛妾。此程より口説さる。今に色よき返事せぬと。思の外なるとふばり女也。それ故牢へおち込置た。けふは是非共口説落し。闇の伽をいたさせよと。權柄おしの横車。さ、へんやうもなみぬる也。返事にあぐみし折こそ有。遙まひく貝鐘よ。貞包耳をそはだて。マ、マ、いふかしゃ。俄に聞ゆる攻太鼓。なにもの成をと怪しむ所へ。かけ来る猪熊鈍平が。跡についで妻立戸五郎。御注進と呼りつて。庭先に大息つく。貞包せき立いかしに。兩人。やうすは何と。サン、くよせ手の里地義實主従。金鞠八郎始めとして。數多の軍卒ひたくと押よせしに。不意の軍は味方のはいもふ。風よ木の葉の散ごとく。皆ちりくぐに逃夫たり。最早のがれぬ御運命早く生害あるべしと。いふ間もあらせす両方より。切込刀をはつしと誦とめ。マ、扱はうぬらもうらがへりしな。マ、云にや。およぶ。國家を奪ひし逆賊貞包。觀念せよと切込強勢。貞包ひるます左右へ蹴飛ばし。有合太刀を抜手も見せず。ばつさり嗣切戸五郎が倒る。隙に付入鈍平。一太刀あふせる間もなく。引はつしてから竹あり。折し飛くる

鐘矢よ。胸板射ぬかれ死たるは。實天罰としられたり。弓矢たづさへ金鞠八郎。かけ来るこなたに義實公。悠然として出給ひ。ホ、適前名手柄く。此上は城中の老若男女。命を助け得させよと。仁義の詞に金鞠八郎。ハ、ア有がたき君の仁心。しかし助がたき玉梓といふ女一人。古主光弘を色にてとらかし。國を亂せし憎い女。ソレ者ども細付引の聲の下。ハ、マ、答て玉梓を前手に縛り引すへたり。義實つくく見やり給ひ。實憎むべき大罪ながら。いはかひなき女の事。ソレ命を助け追はらへよと。仰をしばしと留むる八郎。コ、ハ、御説では候へども。此女を助け給ひて。義實こそ色におぼれ。答ある女を助しと。諸人の譏是非とも切て捨給へと。諫めに實もと打點さ。しからばとくく計らへよと。仰に玉梓かはを上げ。エ、情なや義實殿。一旦助けよと云ながら。又殺せとは表裏の詞。大將より似合ませぬ。譬切れて死る共。恨みの念は此世にのこり。八郎はじめ義實殿。畜生道へ落さいでおかふかと。罵る聲も。いましき。マ、イ、らざる難言。國を亂せし報り目前。天罰思ひしらせんと。援手も見せず。亦の下。首は前よぞ落にける。時にふしぎや疵口より。はつと燃たつ陰火の焰。虚空をさして飛去しは。身の毛もよだつ計也。見回もやらせ義實公。逆臣亡び失たるうへ。貞包が積貯へ置し不義の金錢。皆百姓にわけ取せよと。仰に八郎勇み立。逆賊ばらを打取うへ。けふより君を主君と仰ぎ。景連信時兩人も。時日移さず攻に降し。民ものべふす安房常陸。二國の大守とあさん事。瞬くうちと金鞠が詞に勇む諸軍勢。皆方歳をそ「嗚へける

其五 瀧田城のぞん

築枿感衰相移る。國の世の常とかや。里地又太郎義實公。治部大輔と名を改め。仁政民を賑はし給へは。自然と諸人歸伏して。瀧田の城主と尊敬し。さのふにかはる館の結構なびかぬ艸もあかりけり。掃除仕まふて女

中たち。一ツ所に寄ごどり。何と若葉を思やる。人の出世はしれぬ者。此御館の殿さまは。結城とやらの御派
人で有たに。山下とやらを亡し給ひ。今では飛鳥も落る御威勢。けうとい物じやないかいのふ。チ、楓のいやる
通り。したが合点の行ぬ伏姫さま。明暮珠數をお放しなされず。殊々八ッ房といふ犬を。朝夕の御寵愛。ごふ
した譯じやしらすかやと。いふに小笹がさし出口。それをわがみはまたしらすか。アノ珠數の洲崎の行者さまか
ら授り給ひ。其御下向に述てお歸りなされた。アノ八ッ房。なつくに付て姫さまが御寵愛なさるのじやわいの。
チ、それとさうりと合点がいた。お大名の姫様が。犬をお好なさるとはかはつた物好。又アノ畜生も畜生姫様
しなだれより。いやらしい目付。ごふでもアノ氣が有と見へるわい。ガ、何ば惚ても犬の女房になる女子は有ま
いよ。是がはんの犬骨じやと。いふに昔々手を打て。ごつと笑しされ事も。跡の歌の種ごとも。しらすしられぬ
女同士。おだ口々ぞしごもなき。かゝる折からしづくと。上下ため付金輪大助。行義正しく入來り。コノ女
中達。此ころの不作にて。民百姓をお救ひ米に。殿は一入御心勞あるに。よしなき事の仇咄し。お咎を受ぬうち。
早々部やへと物堅き。詞の釘に打込れハいと計に秘せぬ。小氣味おるげに入にける。一ト間の内より義實公。打
しはぶきて立出給ひ。チ、金輪大助出仕大義。シテ百姓共への救ひ米は。ごつと行届しやと。仰にはつと頭を下
ケ。御藏の兵糧米迄。みな取出し與へ候へごも。猶行届かぬ莫大の人数。それ故君命を窺はんため。恐れながら
推參と。いふに義實公をひそめ。先年安西景連が領下不仕に付。五千俵の兵糧をかし與へし事も。汝の是
より安西が館へ立越。先年の兵糧迷濟の義を頼み來れよ。ハ、御意長つていひへごも。下心しれぬ景連に。當
方の不作を申聞さん事いかあらん。今一應御賢慮をと。申上れば何と。互に難を救ふは武門の常。景連知
心有べからず。片時も早く立越よと。主命是非なく領掌し。然らば是より館山へ直趨たちこへ申べし。早御暇と

式禮し。表をさして出て行。鈴の間の帳臺より。立出給ふ。如月御前。しとやかに手をつかへ。我夫是にお渡り遊
すか。此頃の下々をいたはり給ふお心遣ひ。御氣休めに奥庭の歸り咲でも御覽あり。九献一ツと有ければ。ッ、
奥。心つかひは過分去るから。下方民の困窮を見捨。榮耀は若て無益の費。併先刻より伏姫に對面せぬ。姫は何
方に有やらんと。見やり給へ庭の面。桐の露次下駄。おしごも。思ひ有げに犬の綱。引手もたゆき伏姫君。年
は二八の色盛り。匂ひをふくむ梅か枝に。むすび付たる短冊に。ひかりあらそふ水晶の玉を。欺く御粧ひ。花も
恥らふ風情也。御臺所にこやかに。ノッ伏姫。さつきにから我夫の御待かね。ハ、ハ、ハ、ハに伏姫君。しとやかに
坐に直り。イヤ申父上。母さま。おく庭の梅の花。ときならぬ歸り咲。花の數は一ツ毎に入輪のまわり。珍しさに
たなひ詠歌。おはもしなからと花諸共。指出し給ふを義實公。手に取上てうちながめ。實珍らしき歸り花。取る
直さず八ッ房梅。此たんざくの詠うたの。終にちる色とし見れば梅の花。けふの夕をしまる。かな。ハ、花を
惜しむは風雅の常。やさしくもよみけるを。併若き女の歌などは。ケ様に無用めていりよまぬもの。随分花やかま
よみめされ。ハ、そのお阿りもあらんかと存せしかと。無用を思ふ詞の種。コレ御覽せよ此珠數の。八ッの玉にす
はりし。仁。禮智孝悌忠信の八ッの文字なりしに。ふしきやいつの程にやら。此やうな文字にかはりし。人
間無常の身の上を。しらせ給ふ佛の告かど。つい浮んたる其詠歌と。かたり給へは御臺所。心あらそと御襟に。掛
たる珠數をかひ取て。イヤはんにさのふの文字あらす。文字のかはりし其障の。とよめぬ色目に義實公。ごもに
不思議と手に取て。この正しく如是畜生發菩提心の八ッの文字と。いふかり給ふ時しめわれ。白砂を蹴たて天
崎十郎。大息ついでかけ來り。御大事こそ發り候へ。館山の城主安西景連。家の子郎等うち從へ。その勢さなが
ら雲霞のごとく。不意におしよせ當城を。稻麻竹葦に追ひまき。息をも繼ぎ攻立る。され共かねて防禦の備へ。

物の具する間もあらずの味方。矢玉を惜まず防戦最中。いそぎ御出馬あるべしと。息繼めへず言上す。このそむ
 いかにと計にて。驚き給ふ御臺姫君。義實も俄の仰天。ハ、扱ハ金輪大助をもつて。先年借たる兵糧を催促せし
 故。我城内に兵糧乏しき虚を窺ひ。おしよせたる人非人。此上は命限りに防矢を射て。もし叶はずば討死せん。
 汝は持口へはせ歸り。諸將は此旨申聞せよ。早くくくに十郎は。持口さして引返す。御臺姫君うろくくと。こは
 何と成る世の中と。あつと計にひれ伏て。前後不覺になき給ふ。ヤア此期に及び未練の泪。義實が一世の浮沈。必
 し叶はず共人手にりか、らじ。よしなき歎きに時移る。早物の具の用意せよ。早くくくとす、められ。立もしと
 ろに如月御前。なくく姫の手を取て。帳臺「さして入給ふ。義實は黙然と。軍慮に小首傾けて。眼を閉たる
 庭先へ。怪しや飛來る一ツの陰火。臥たし犬の其上へ。落ると見へしが其儘に形は消て。跡もなし。や、有て義
 實公。何心なく見下す庭よ。むくつと起立ハッ房が。前足かけて階は頭をうたれ延上り。事有げなるありさま
 に。義實公さしよつて。コリヤハッふと。畜生ながら心わらはに體に聞ケ。今城中に兵糧乏しき虚を窺ひ。逆賊景運
 おし寄たれば。逆も籠城叶ひがたし。汝日頃の恩を思ひなば。敵軍へかけ入て。景運が敵首くひ切つて立かへれ
 よ。然らば汝を姫が鑑となし。珍膳美味に飽せんす。去ながら。畜類の身の淺ましき。我いふ詞の間分も有まじ。
 さるにても口惜や。景運とさの賊將に攻付られ。籠城さへも意に任せず。兵糧つさしは天命の。盡果たるかと大
 將も。拳を握り無念泣。庭の面に入ッ房が。自然と心の通せしか。一ト聲叫び身ふるひし。眼をいからし毛を逆
 立。城門さして走行。義實跡を打見やり。ハ、畜生心なしといへとも。主家の滅亡を歎きてや。勢ひ込てかけ出
 しハッ房。志ハ健氣なれとも。敵味方の矢玉にか、り。むざんの放物なしつらん。ハア不使や。ア、よしなき事
 に際せりし。イテ出陣の用意せん。ヤア如月。具足これへの聲の下。はつといらへはしなからむ。力なくく如月

花魁八总

花魁八总

御前。伏姫君も諸共に門出を祝ふのしこん。鳥臺に置露泪。長柄もつ手もしはくくと。出る跡より姫とも。昇
 て出たる籠櫃。目通り近くおし直せり。義實御臺に打向ひ。イヤニ如月。先刻より城内の物音を窺ひ聞に。味方
 ハ次第に衰ふと見へ。貝鐘の音陰氣を含むは。必定味方の敗北に疑ひなし。我欠向つて虚實を見定め。もし叶ハ
 すば深く切腹せん。かこらとてもまつ其ごとく。未練の振舞いたすな。ソノ物の具付よと立チ給ふ。是非もな
 くく取出す。御着長は緋威の上。に錦の陣羽織。傍りを拂ふ出立は。實大將の。御骨納。義實公ハ優然と。土
 器取て指し給へば。姫君何と除方も。泪ハ長柄つき添れば。義實かハらけずんとはし。如月。ヤア目出度一献の
 みやれ。ナニ伏姫。ソノ母が杓を仕れ。ヤア武士の家に育ながら未練至極と。しかられて。泪の露を。くはへの役。御
 臺は悲しさをやる方なく。か、る憂目を鳥臺や。何よろこんぶ勝栗の。名も今更に恨めしく。是が御顔の見納めか
 と。思へは目もくれ心消。いふべき詞も泪の雨。袖よつ、めと思はすも。あつとばかりに聲を上。とふと伏てぞ
 泣給ふ。ヤア又してもく、不吉の泪。ア、なくなくといひつ、も。遺恨愛肉身の。是を此世の別れかと。思へば浮
 む目に泪。如月御前は泣くづをれ。ア、いさまし出立を。見るに付ても情なや。さのふよかりる世の中と。歎き
 給へば姫君も。何國の浦にも落延て。母さま諸共恙あふ。御身をのがれ給はれと。右と左に取廻り。歎き給へば
 大將も。こらゆる胸ハ熱湯の湯玉にも猶まざるらん。又も聞ゆる物音に。あはやと見やる庭先へ。息を切てかけ
 來る堀内。御注進と手をつけば。ヤア堀内貞行。シテ台戦はいかにく。はつと勇みの大音上。御悦び候へ味方
 の軍兵。けふを限りと勇氣を勵まし。愛をせんと。防禦の中。敵は俄に駭き立。一くづれに退く有さま。湖の引
 に異あらず。此体見るより金輪殿。すはや敵ハ引たるぞ。餘すなもらすな討取と。烈しき下知ハ味方の諸軍。色
 を直して切て出。まつしくらに難立る。勢ハ破竹の如くあれば。必定勝利うたがひなし。猶追々に言上せんと申

花魁八總

捨てそ引かへす。開にいそく御臺姫君申父上。いさましい今の注しん。神の利生か佛の加護か。ア、嬉しやとなでかろす。胸のつかへも夏艸の。夕立にあふ如く也。美實不審晴やらす。十分難義と見へたる軍。俄に勝利と成たるは。もし反簡の計略にて。味方を釣だす術か。あやふみ給ふ折しめられ。逸故にかけ戻るハッ房が。主の誰とも白髪首引く。来て大將の。御前にさし置扣へある。イヤ申我夫。敵か味方かハッ房が。首をくへて歸りしと。袖を獲ふておはします。美實公は不審顔。ハッ心得ざるハッ房が振舞と。つくづく詠め横手を打。ヤン出かしたりハッ房相好のかはれ共。是こそ正しく景連が首。天晴く。扱は先刻願れに。景連が首を取来らば。姫を與へんといひし詞を誠とこ。ろへ。ささくも敵陣へ忍ひ入。景連をくひ殺せし故。敵軍俄に退きし。是故ならんと。語り給へば黙くハッ房。御臺所も姫君も。あまりの事に強氣たち。胸臆かしおはします。大將悦喜の顔色にて。コリヤハッ房。戯れながら予が詞を重んじ。敵將の首取し故。美實はじめ城中の者。死を逃れし。汝が功。けふより祿をあたへ。大守に備かせん。カ。當坐の褒美。此島嶼。手づからくれるとさし出し給へ。見向もやらずかけ上り。姫の振袖引く。裾にもつる。有様に。あつと驚き送給へ。いつかな放さず付キまどふ。御臺は見かね持たる扇。ふり上げて打給へ。たぢろく氣色なみ居る人々。もて余してぞ見へにける。美實いかりの聲あら。げ。ヤ我願れの詞の格別。畜生の身をかへり見ず。秘藏の姫に尾籠のふるまひ。立さらすば一思ひと。長押の手鎧追取て引しと。白刃も恐れぬ不敵のハッ房。姫さみめはやと身を楯に。犬をかこみて聲くもらし。マアく待てたべ。父上様。常々のお詞にも。大將の一言の輪言も同じ事。出て再びかへらぬと。宣ふ御身の今更に。よしや戯れ座興にも。おつしやつた詞を誠と思ひ。安々歎の首を取。父母始め多くの人を助けしハッ房を。御手討あらば美實こそ。モ誠なき大將と。人の譏りの亂れの元。是を思へは自らが。朝夕祈

花魁八總

る此珠數の。文字のかりつた不思議さ。畜生よ添ふ佛の告。たゞ何事も約束事と。思し諦め自を。ハッ房にのたへ世の人の。譏を防ぎ給われと。我身を捨て父の名を。立るその身は畜生道。この世からある見せしめ。思へりわつと聲立て。歎けば御臺もとも泪。たとへ提が立ばとて。生れて此かたニタ親の。手元はなれぬ孝行なそなた。發明といひ器量まで。人よ勝れし娘をば。何ばう父御の爲。ヒや逆畜生に。身を任せなめ。見捨て母が居られぬぞ。いのふ。わの子のかりに此母を喰殺して腹よと。姫を囲ひ隔れと。猶付まとも煩悩の。犬よりつらき悲しみは。修羅の苦患や餓鬼道の。責苦を一度に受る共。この思ひに増へさか。口説立たる有さまを。みるに悲しき姫君も。そのお歎を見するの。みみ自ら因果故。いかなる業か報か。泣涕こがれ伏給へば。鬼を欺く美實も。こらへ兼てはら。落る泪のあら磯に派立さけ。如くなり。美實公悲歎の泪ふり拂ひ。ハッ我あから悪也。伏姫生れて二才のとき。夜泣の病ひ治せざれば。洲崎の行者へ立願の其歸るに。怪しの老翁伏姫が相を見て。此小兒こそ惡靈の祟りにて。父母に別る。事有べし。伏姫といふ名を以て。其吉凶を判断せよと。水晶の珠數を授かつたり。夫より夜泣は治したりしが。今考れば伏姫の伏の字は。人に犬を添たる文字。ハッ房に與へんと。云し詞は願れながら。とくより定る業因ならめ。是といふも玉梓が惡靈のなす業。今更悔む。ハッ甲斐ぞなき。いかにハッ房。我一言の誤りより。天にも地にもかけがへなき。姫を汝と與ふるぞよ。され共人と生れしもの。畜生と交るべき謂なし。堅固に姫を守護せよと。宣ふうちも目に浮ぶ。泪ぞ父子の別れなる。御臺は猶も正体なく。いかに成憂目も氣遣しや。母も一所と取違る。御臺をかき退ハッ房が。姫の袂を引くはへ。おろる階姫君も。あくく引れおろ給ふ。ノッこれ待てとかけよる母君。美實公も今更に。又取直す鎧先に。隔たる姫も血の泪。ノッ父上母様。たとへ此身の深山路へ。分入とても尼法師。つねく讀誦の八の卷。此水晶の

玉の緒の。あらん限りは畜生に。身を穢さるゝ事あらじ。御心安く思し召せ。さらばと討その跡はあやも泪の暇乞。泣てとゞまる親心。子は生ながら畜生の道に引るゝ有為轉變。彼唐土の盤古氏が。例を引や振袖の。長さ別れと見かへれば。見送る父母も哀別離苦。をしや。盛りの花さそふ。無常の鐘の音かへて。早城外は。勝鬘の聲も。笏に響くなる富山を。さしてぞ別れゆく。

第二回 洲崎のだん

冬ながら。小六月とて暖かき。小春の空の長閑さにまゐるもしげき洲崎の行者。御縁日とて参詣の。群集を當テの水茶やに立よる人と歸る人絶間はさらよまかりけり。磯邊つたひに來る人は。里見の家老杉倉氏基の妻。柵の。武家風俗の。襦袢。姫下部めし述て。願はなにか白砂の道をひろい歩詣。茶やの床几に立やすらひ。イヤのふ。姫さる。毎日く。の岩屋詣。大鏡にも思やらふが。姫さまは八ッ房犬又伴はれ。富山の奥へ入給ひしより。御臺さまにはお歎深く。つもる思ひに病伏給ひ。日々に衰ふ御容体。そはで見るめも御いたはしく。とふぞ御病氣平愈の願ひ。又ニッよは姫さまの。無事にお歸り遊はすやうと。信心こらす歩詣。何をすも忠義の爲と。必ず恨んてたもるなやと。詞の艶にたんのふを。遺家老の奥ゆかし。姫下部口々よ。ソノマ奥様のもつたないない。何の御恨み申ませふ。毎日く御供するので。海邊を見はらし氣の晴る。能男は見次第。ならふ事なら年の明まで。日參のお供かした。ハ、わたしらと似た事か。面白そふよつつけく。と。チ、笑止やと袖覆ふ。口はしたなき婢女の。咄しにうさをや晴すらん。チ、冬の日短い事。日のたけぬ内参詣せふ。皆々おじやと先に立。御堂をさして急ぎ行。こなたの道より歩來る鎌倉風の旅侍。水茶やへさしか、り。暫し休らふ其所へ。是も旅する武士の。いさせとさか、りて。顔見合。是はく。横堀軍太殿。此邊へは何の用。ハ、いふ貴殿は。山の内秋定殿の御家

來。岩瀬源藏殿。貴殿には當國へ何の御用。サレ、く。當國里見家の奥方の。主人秋定の妹御。此頃御病氣の御地舞と。咄しの内より談笑のかけ。深編笠の浪人が。聞共しらぬ横堀岩瀬。ハ、夫は御苦勞。拙者は又主人家政の内意によつて。當國の地の理を寫さんため。必らず口外されな。心もせけば早御暇。然らば左様と互のおれを。別れてこそは歸りける。源藏は何心なく立上る。ゆだんの咽笛。はつしと打込手裏剣に。ワンと討に倒れ伏。發賣の影より以前の浪人。窺ひ出て死骸の懷中。さがして取出す一通の。封おし切て讀下し。何かうあづさかたへなる。茂みに死骸を蹴込て。跡くらまして走り行。岩屋の方より。柵か。下向をいそぐ夕暮前。跡より付來る非人の頭。ソリヤとかけ聲轟下る。爰かしこより顯れ出。中に囲て追取卷マアをち達は物とりよな。女と侮り慮外せばゆるさぬぞ。サそこ立さきりやといはせも果す嘲笑ひ。ハ、はさいたり女ららめ。里見の家老氏元が女房と。知て仕組だけふの仕事。斯いふは安西が郎等。兎とつ平。追刺するも景連公の。吊ひ軍の軍用金。ソレ者ども片はしから引刺と。さしづにむらがる悲憤と。こなたは一腰扱はなし。とつ平が切込刀打り開き。引ば付込且の目配り。されども多勢切立られ。既に危く見へたる所へ。折よく來か、る狩人が。斯と見るより鐵砲うちふり。なき立く柵を。うしろに囲て突立たり。とつ平見るより。むくりをにやし。ハ、憎い下郎め。さやつぐるめに討とれと。一度によるを事共せず。片手あぐりの早業に。叶はぬゆるせと雲霞。むらく。つと逃散たり。思ひがけなき柵は。顔見合てハ、お前は命鞠大助様。杉倉の御内膳柵さま。これハ御無事でおまめでと。絶て入しき對面に。暫し詞もあかりしが。大助は顔を上々。御身に逢も面目あき身の越度。昨年景連がもとへ。兵糧催促の使者に立しを。景連に出しぬかれ。安閑と時刻をうつす其内に。比興の景つら瀧田の城へ。攻よせしと聞て仰天南無三寶と。さ、へる番人切ちらし。よふく出て身は素肌。取境へも向はれず。兎や角する内景連は。何

者よか討れし風聞。安堵のして此身の不覺。どの顔さげて我君や。兄八郎に對面せん。一ツの功を立し上と。時節を窺ふ獵人の境界。しかし御身は輕々敷牀にて。當所へ何の爲。さればいな。餘子あつて伏姫さま。八ッ房犬に伴なはれ。富山の奥へ入給ふ。奥さまもそれ故御病氣。とふご姫君の御無事にお歸り有るやうと。洲崎の行者さまへ願参りと。聞て大助膝打た、さ。扱は世上の胸に違はず。姫君富山の奥にましますとや。某富山へ分登り。畜生めを一討にし。姫君の御供するが。歸参の種とせき立、袖を引とめ、いへく景連が首を取極の、ハッ房。あら立ては姫さまの御身の上。何さく腕に覺への此大助。ハッ房虎の威あり共。何條手なみにもらすべき。しかしし大事を仕遷る迄は。氏基殿にも隠密く。チ、氣づかひあるな去あがら。とふご姫さまつ、かあふ。御念に及はぬ。おさらば。さらばと別る、後へ。己前のとつ平。大助覺期と切込だん平。引はつして具二ツ。チ、天晴手のうち。柵さま重ねて御目にと兩人は。立別れてそ。急ぎ行

其一 義實館之段

君子の徳は風の如く。さればのへふす民草や。里見治部太輔義實公。武成遠近に隠れなく。降参歸順の諸方の使者。門前に市をなしにける。取次の侍。浦安兵馬。それく記録してしばし絶間と浦安の。筆さし置し其處へ。堀内藏人出仕そふと音なはせ。禮義。正しく打通る。コ、ハ、堀内氏。早々の御登城。御苦勞千万と。一揮すれば答禮し。浦安氏にも。晝夜の勤仕。御太義至極。先ッ以て今日は七夕の佳義として。諸方よりの献上物。それく記録めされしか。仰せのごとく日々にいや増館の筆昌。執筆いたす批者まで大慶。夫れに付今日は山影中將様。當館へ御入來。どの御内意。夫故金鞠氏も早朝の御登城。ある程當家の御一門。秋江公の。和歌の師範と有て。先達より内々の御沙汰。不行届さやう。云付めされ。イ、わが君に響應の。あらまし言上いたさんと。座を

立上れば浦安も。奥と口とへ別れ行。跡へばか。在所親仁。娘と見へて稚子抱かせ。歩み入てあたりを見廻し。コ、リ、娘よ。侍衆に斷いふて。爰迄の來て見たが。あまり廣ふてどこがどこやら知るもこじやないわい。とふぞ早ふ八郎様の御めにか、り。孫めがよふ肥た顔が見せたいな。チ、と、襟のめつそふを。御浪人の昔にかはり。今の美々しい出世の夫。それに私がしはたらしい。姿見せたらひよつと愛相がつかふかと。案し通しがせらる、と。赤らむ顔の恥紅葉。都の花に。くらべても恥かしからぬ器量也。エ、さり逆は氣の明ぬやつ。イヤ申誰ぞ頼みましよ。イヤ斯じやない。侍衆の内での。てうと正月のやうにいふ物じや。ものもくといふ聲の。もれ聞へてや一間より。杉倉氏基か妻のしがらみ。宿姿しとやかま。立出れば白洲には。ハ、つと恐れて平伏す。柵不審と詞を正し。ム、終見馴ぬそなた衆。誰が赦して爰へいおじやつたぞ。ハイ私は上総の關村。百姓一作と申者。是は柵が一人娘。小萩と申まして。金鞠八郎殿とせ、くり合。子中あした者で御座ります。エ、コ、と、様つけく遠慮もない。イヤだまつてのやしやんせと。引もどして手をつかへ。是はくどあたかは存しませぬが。今と、さまの申される通り。八郎様にのゆかりの者。とふぞあまたいお執成て。主に一目。お逢しあされて下されふなら。いか計のお情と。おづく願ふ詞のはし。柵も打は、笑、扱は八郎様のおかめとや。日頃物堅い高吉様も。色の道は思案の外。併けふの七夕の御祝義やら。高位のお客のお成のものふけ。八郎様のお下りには問もあらん。イヤそれ迄の私が部屋でゆるりつと待たがよいわいの。夫は、イヤ有難ふ存します。見苦しい形りをしてあまりと申せば勿体ない。チ、ソ、くどこぞ越でも敷てある所で。足を延して待ませふ。イヤ遠慮には及はぬ。ハイ左やうなら敷さつしやませ。娘よおれが草鞋とそれか草履。一ツにく、つて袂へなど入てこ。エ、イヤ、イヤの出はう越す。何ぞいのふ。ちやうなら奥さま。おのめじなから。チ、案内しませら。イヤ

し八郎も胸に満ち来る涙をば。香込くくるしきは。泣よりもなほ哀れあり。一間の内に聲高く。ヤアく小萩。一作とやら。金駒八郎が世繼の情。義實か獲ひ得させんと。呼べる聲と諸共に。一間の障子引明れば。衣紋改め義實公。太刀持近習。柵も。後にかしづき奉る。見るよりいつと敬ふ八郎。一作親子も恐れ入思ひす。頭を下にける。義實優美の御座にて。いかに八郎。情をしらぬは武士にあらず。譬ひやしき妻にもせよ。腹の假もの勇士の種、おが子とするとも恥かしからんや。某此國の主と成る。偏に汝が忠義故。とくより恩賞すべかりしに。伏姫が事奥が病死。それ故に延引せり。今日より長狹郡を。知行にあたへ東條の城主となすべし。イッ感。状を納めよと。差出し給ふをかし戴き。コハ有かたや忝なやと。悦ひ色にあられたり。手負の今端の手を合せ。ア、有かたや。本望や。と。さま悦んで下さんせ。ちやつとお禮を。お禮を。いふ聲も早よはり行く。一作消おしぬくひ。親の死目も露しらす。寐入た孫はほんの佛。六十過て娘を先だて。残る此身の何たる業。おれも一。所に死たいと。大は聲、あげて叫び泣。虫がしらすか稚子が。乳たいくと泣出す。柵見かね抱取て。すかすを義實かは打守り。ホッ眼中の光り天帝ひろく。天晴なる小兒か人相。いかに八郎。せめて小萩が最期の際に。夫婦の堅めして得させよと。仁者の詞に頭を下。コリヤイ小萩。汝を離別せしは。筋目いやしき故をらす。我本心をいひ聞せんと。壺付取ておしいたゞき。刀を抜て押巻く。腹にははと突たつる。ノウ何故の御最期と。手負を始め驚く人々。義實不審の聲はげまし。ヤア八郎長狹郡を不足に思ひ。子を恨んでの切腹か。所存いかにと有ければ。八郎息をはつとつぎ。ア、勿体ない過分の恩録。何しに不足に存せべき。我切腹の一と通り。申上ん。聞てたべ。某もと神與光弘が家臣たりしに。山下が讒言にて不興を蒙り。諸國武者修行に廻る内。元の家來柿不半牛といふ者。定包を討取ばぬが勘當も救ぬべしと。思ふ心の直なれ共。まがりくねりし山下が。術に乗て光弘が。我身の仇としらま

可。人喰馬の貞包と。思ひ違へて朴平か。放す矢先に眞逆さま。おちばの岡の夕露と。消し其場に朴平も。種が鳥にておへなき最期。跡にてそれを聞しとき。南無三寶しなしたり。某が家來朴平が。三代相恩の主君を討し。我手にかけてしも同し事。腹かつさばき眞逆よて。いひ譯せんと存せしよ。アイヤ待しはし。逆賊貞包を討取て。其上にて追腹と。惜からぬ命をながらへ。時節をまちしに君の蔭にて。本意を達せし身の悦ひ。二君につかへぬ申わけに。則ち覺悟のこの切腹。コリヤ女房チ、よく死だ。出かしたる。盡末未までかはらぬ夫婦と。勇氣たゆまぬ武士も。さすが妹脊の紐の糸。引入耳に聞取て。ア、嬉しうござんす八郎殿。その一言が堅めの盃。迷ひも晴て成佛します。此世の名残に今一度。坊の顔がと這よつて。探る手先へ一作が。コリヤ娘。孫のこに居るのいやい。ア、可愛やも目かみぬかや。見へぬかや。親子は一世と聞ものを。今一度顔を見せてやりたいわい。コリヤ娘や。い。と。あせれと甲斐も嵐吹。すそ野の小萩あへなくも。散てはかなく成にけり。とつとばかりに泣入親。八郎始め御大將。歎きは同し柵も。水せさかねし天の川なみ立騒ぐとくとなり。一間の内より山蔭中將。藏人引連歩み出。饗應の酒に銘訂し。思はず一匝の夢の間。忠臣貞女のむざんの最期。これる袂を絞りしそと。悔みの詞に金駒八郎。ア、ア有がたき高貴の御詞。死ての面目此上なし。先刻怪しの曲者を討とめて。面を見れば小五郎信時。懐中せし此一通。アサ御一覽と指出す。義實取て打詠め。是こそ先年亡ひし扇が谷季政が。一子。定政より頼の密書。我を害せん連忍び入し。信時を討留しは。天晴忠義。其功にめで。あれ成一子を守りだて。二代の金駒八郎と名乗らせ。汝が跡目となすべしと。仰よ中將威し入。ホ、尤斯こそ有たけれ。去ながら。今死出の旅。趣く八郎。達變なき誓には。幸ひく。帝より下し給はる此天盃。君、臣ともに誓ひあれど。懐中よりちやくしく。誓とつて指出せば。義實はつと頂戴し。小佳が酌に三度はし。ア、藏人。柵。その

はし。ヤレく嬉しや。敵のやつ原は切殺した。去ながら。只憎きは貞政高吉。かれらが巧みにて。御家はめつ亡。我も討死すべかりしが父が遺言やむ事を得ず。むねんながら村雨丸を守護し。爰までは落延たり。いかなれば里見の一門。一時にめつはうよ及ふ事。思ひ廻せばまはす程。口惜き次第やと。無念涙にくれ居たる。かゝる處へ敵の軍卒。追々かけ付口々に。のがさぬやらぬと追取巻。ヤア討もらされの犬塚伴作。村雨丸の太刀をぬたし降参せよと呼はつたり。ヤアよふこりもなきあふ蠅ども。道なつひらいて通さば其分。邪摩ひろがひなで切ど。いせも果せ一同に。切てかゝるを事共せず。前後右左よなき立る。勵き手並に雑兵ども。叶はぬゆるせと逃散たり。相手おければ伴作の。手紙をくゝるあひだもなく。又も聞ゆる物音に。かしこをさして落て行。こなたの道より平坪椀藏。義若丸を高手小手。家來引つれ出來り。ヤアく者ども。主人定政の言付により。生捕たる義若丸。本國へ連行の。里見の余類が攻來らん時の人質。隨分路次に氣を付て。ソレ怪しき者あらば。一々に討取と。示し合せて先またち。あゆむ向ふの辻堂より。飛來る矢先に椀藏は胸板討ぬかれ倒れ伏。スハコ曲者討とれど。ひしめく内に辻堂より。顯れ出たる忍ひのすがた。むらから中へわつて入。義若小わきに引抱へ。行をやらしどさゝへる雑兵。シヤ面倒と引つかみ。はらりく〜と殺らし何國ともなく

其一 拈華庵

かけり行。深山水の。茂る梢は日影さへ。もらでぞ暗き木下閣。夜長が嶽の山中に。拈華庵とて門前の。額の板さへやぶれ寺。道場参りの講中が百萬邊も平等に茶漬待間を命ある。住持の雲つく大坊主。講中に打向ひ。扱おのくよふ参らつしやつた。茶づけでも進せる等の處。弟子めり取にげ男は隙やり。人手がなきに何にもせさんだ。はつたい茶でも吞て。ゆるりつと咄さつしやれと。いふも講中口あんでり。ハアそれのいかい當の機。何でも

した、か呼れふと。ハッ茶をひかへて來て。百萬べんで腹がげつそり。はつたい茶飲だらすぐに腹く。イヤエフよばれたも同し事。のふ皆の衆。内の供養をいたいかふと。つふやさく〜銘々よ。ふくれたものは頬ばかり。腹をか、へて立歸る。草深き。片山里の澤邊にも。萎の花の水際の。手束と名を〜しはらしき巨元の盤に露を合む。昔の山道ふみわけて。詣でし寺の。内入よく。頼みませふと音のふ聲。住持文牛立出て。それを見るよりはや〜顔。チ、お園後家のお娘よふこそ〜。けふはお園女郎の〜と七日の迷夜。定めて墓参り召れふと。首を長ふ待てゐたサ、マ、〜、是へも猫なで聲。手束はあしやくし打通り。なつしやる通り母さまの〜と七日の迷夜。お慮もじながら。御影向なされて下さんせと。つ、む泪の露金を。さし山せば手も取上り。若しに似合ぬ奇特やの〜。何の是に及ぶ事。〜。影向仕ませふと。りん打ならし殊勝氣に。新解脫の精靈。向岸貞順信女。初七日のたいや順生菩提。南無阿彌陀佛〜。〜。サア〜影向は是で済ました。したが愚僧は麓の在所へ。迷夜参りをせねばあらぬ。此頃ひきつらぶつそらな。幸ひともじの墓参り。ちいどの間留主して吳まいか。チ、それはマアお安い事。去ながらもふかれ是と日の暮前。この此廣いお寺に私一人は。どうやら心細みて氣味がわるふござんす。何の〜。長留主すると〜ふでもあ〜。〜一走〜往てくる間。せひよ。〜と無理だのみ。草履引かけそ、〜坊主。籠をひしてはしり行。娘は跡にはつしりと。テモめつさふな住持さま。女子一人に留ませいどの。ひよんちの頼まれるもの。ア、さふやら氣味のわるい。早ふ戻つて下さんせと。立たり居たり落付ぬ。案しは女子のならひなり。武士の矢たけ心の梓弓。引はかへさぬ魂も。父の遺言せんかたなく。多勢を切ぬけ犬塚伴作。腕の手疵の痛をしのび。來かゝる山路の古寺を。響月かげにすかしえて。幸の山寺。宿りを乞へんと。門前に案内し。山路に迷ひ難義の者。一夜の宿の御無〜と。音のふ聲に娘は立出。それはお安い事ながら。私ばる

横手を打。ハ、其詞て思ひ出せし事こそあれ。昨年父の物がたり。我鎌倉へ使者に立しとき。井野丹藏貞秀の息女。手束とやらんを汝が妻と申請たり。明年は呼迎へんと仰有しが。つゞく軍務にいとまなく。其事も打忘れしよ。はからず今嘗此所にて。廻り逢ふしきの奇縁と。語るにこなたも貳度悔り。ヤアそんなら前が言号の。我夫でござんしたか。逢たかつたとすがり付。始めのこはさ引かへて。嬉しなみだぞ道理なる。伴作も胸なておろし。我計らずも此寺へ来て一宿せしも。親々の引合せ。それともしらす。賊僧の。女房と疑ひ今の廉忍。すつての事にあふない事。しかし怪我なしなかりしか。イエ、お前に逢ひ死しやんしたか、さんの導。シタサ此寺の住持を手にかけさしやんしたからは。夜が明けては人の咎め。成程夜明けぬ内に立退て。武藏の大塚に腹がはりの姉もあれば。是またよりて世を忍ばん。早ふ用意とともく。身こしらへする其内に。いた手なからも息吹かへし。戀の歌と切。込出刃。た、さあとして扱打に。真向丁と西瓜の胴切。はや明方の山鳥。かひいゝの女夫つれ。二世を結んで直す山の。腰をび横雲の。明ぬささにと手を引て。武藏の方へそ「急ぎ行

其二 富山のたん

曉ことの阿加の水。月も心や澄すらん。さなきたに物のさびしき秋の夜の。人目稀ある此山の。嶺の松かせふけ過て。月も傾く岩屋の草。麗を埋む落葉には。盛者必衰の理をしめし。初に響く瀧津瀬の。山又山の松風を。兼覺の友と。身ひとつに。悟り澄して伏姫若か、る。苦患も先の世を。頼む佛のわか手袖。手元もゆらゆ谷かけへ。おり立菊の。下露の。苔の庭に座をしめて。唱ふる經も。鶯の。聲すみわたる。山彦のそれかわらぬか風あらで。幽に「聞ゆる笛の音に。姫若耳を傾け給ひ。思ひよらぞや此山の。狩する男新こる。腹も進ぬ所なるよ。珍らしき笛の音は。いか成人のすさみぞと。聞入耳にしんく」といふ。こふるき響ひし。人まつ虫としらぬ子の。笛

に餘念も七曲り。坂道。ゆられ下り来る。姫若しばしと呼と、め。あふく、童人も通ぬ此山へ。分登りし心得す。そなたはいづくの里の子ぞ。聞まはしやと宣へば。童子は笛を吹やみて。チ、としの此山の麓に住。お師匠さまよつかひる、者。けふ此山へ薬を取に登りました。ハチナア薬を取といやるからは。ハ、そなたの師匠のお醫者よな。チ、常人の病を直し。又ある時は蕃をとり。人の吉凶禍福を占ひ。前生徒生の因果をしめし。或は雨乞日和の加持。天地の中に有とあらゆる事。知ざる事なまします。いと賢しけにそ語ける。ハ、そんならそなたも病の道は聞つらん。自らはさいつ頃より。夜に日に増て胸くるしく。次第く身の重さ。いかなる病。治る薬も有ならば。救てたもと有ければ。ハ、夫こそいつはりのしるし。又目の下は青濁とて。青き色の見へたるハ。胎内に子を孕み。産月も早近づきしと。いふに姫若打笑ひ。チ、ア子とした事が。座敷も事によるぞかし。膝をかたらんこあたへと。招き給へば懸きて。牛の脊ひらりと飛下て。御傍近くかしてこまる。伏姫若のわか桶の。菊の一枝手に取て。コレ童子。そなたの此花はしらのないか。ハ、其花おしい下されと。もつれかゝるも愛らし。く。右よ左とたむひれて。あたへ給へ嬉しけに。コレ御覽せ此花の。誰育てねと秋毎に。おのれと咲も雨露の。恵みを請し千代見草。よひ草とよままに。異名も多き黄金草。姿やさしき乙女草。手馴草とて。手つさみや。コレ白菊の。御身に。子をやとよぬと。言がたし。いやとよ夫はひが事よ。夫逆もな。一人身に。やゝを産べさ様もなし。いやゝそれには儲な證據。かたつて聞せ申べし。お前は當國里見の息女。伏姫といふお人であらふが。悪縁つさしハツ房に。身入られしも定まる因果。此深山路へ伴われ。明暮法花經讀誦の功力。畜生に身つけがさねと。ハツ房犬が戀したふ。一念こつて胎内に。自然とやぶる子のハツ子。されとも身に添ふ水品。の。珠數の徳にて末つるよ。里見の家の忠臣と。生れかわるも方便力。かまへて疑ひ給ふなよ。さらりやさらば

花魁八蒼總

飯追取て。腹にがばと突立る。御手にすがり聲ふるはし。コハお氣はし違ふたか。但しハ拙者ハ顔當カシエ、情なき御生害と抱きいたはる介抱に。姫は苦しさ息をつぎ。のみ大助。しなねばならぬ此身の因果。一通り聞てたも。自ら此山へ入し日より。御経讀誦に他念なく。けふ迄肌身汚さねどいつしか只ならぬ身と成て。いか成病と不癒る内。最前あやしの草刈童。未前を示す不思議の詞。胎内にハ天の精氣。自然とやゆるも定まる業と説示してかき消如く姿の失しは疑ひなき。洲崎の行者の御つけならんと。思へはあめく生て居て。犬の子を生あらば。我身ばかりか父母まで未代迄の御恥辱。それ故覺期の此自害。死る此身ハいとね御恩の父上母様も。歌のためにやみくも。無念の御最期遊ハして亡魂は此山へ。浮みもやらすろくも。嗚や迷ふて來給はん。夫が悲しいかいとしコハく大助。自らがしんだ跡。術を廻らし。歌を亡し里ハの家を起してたも。頼むはそなた計ぞと。耐る内にもとさ出る。血汐の瀧の。四苦八苦。なみだは袖に滯なして余所の。見る目も哀れ也。悲歎の泪大助も。その御遺言は重けれども。罪につみを重ねし某。何面目にながらへん冥途の御供仕ると。いひつ、刀に手をかくる。後の方に聲高く。ヤハく金鞠大助暫く待て。山の内秋定對面せんと呼はつて。木影を出る。其形相。肌には着込の狩裝束。金作り反太刀も。夜目にか、やく優美の出立。あどに引そふ天崎十郎。義若丸を誘ひて立出れば姫大助は。コハくいかにと計にて敬ひ。かしづき平伏す。秋定泪の聲くもらし。コハ、健氣あり。伏姫。國の掟に身を捨て。か、る深山に入ながら。身を首生に汚されざる。物がたりハあれにて聞く。犬の一念腹に宿りし。その身を恥ての生害は。追に義實が娘はと有。コハ、尤斯こそ有たけれ。又金鞠大助は。兄八郎と。同意ならざる言辭に。伏姫を守立。吊ひ軍を企んと。ハッ房を討出し忠義の程ハ、感入。汝はからず伏姫に手を負せしハ。過りに似て過りならず。是皆玉梓が怨靈のなす業。われ此國へ忍び下り。義若丸を奪返し。旅寐の夢

花魁八蒼總

の枕神の役の行者現れ給ひ。伏姫が信力にて。惡靈の祟りもささり。佛果を得べき可來れり。その證據は水晶の珠數の文字。最期の際元の如く成へし。いそぎ富山へわけ登れよと。告給ふと起て夢覺たりいで其珠數を改めんと。仰に大助心得て。御前にこそはさし出す。珠數取上て月影に。とつくとながめ扱こそく。如是畜生の文字は消て。元の如く仁義禮智孝悌忠信。ハッの文字と成けるハ。是ぞ惡靈解脱のしるしと。聞よ扱はと人々も。佛の御告有がたく。泪に袖をぬらしける。手負の姫は這寄て。コハ、忝なや有がたや。か、るふしがを見る上、は。迷の雲も晴わたり。此世に思ひおく事なし。とつきの童子が物語。胎内よりやどりし精氣。水晶の珠數の功力にて。里見家再興の忠臣と。生れんといひし詞の端。たとへ自から死する共。一念力は神となり。ハッの玉を八人の忠臣勇士の子だねとし。秋定政高吉を亡さしを慰ふかと。痛手も屈せず珠數おしりもみ。南無神變大ばとつ。奇特を爰に見せ給へと。一心懺たる祈念の信力。忽ち颯と吹かせに。連てもみ切ハッの玉。虚空に巻上靈々と。光を放つて飛散たり。奇代の不思議に人々も空打守るばかり也。コハ、嬉しや本望や。念願成就の上からは。一時も早ふ冥途へいて。父上や母様に逢て此事申が樂しみ。コハ、義若伯父君のお世話にて。おとなしう成人し。里見の再興してたもや。とばいふもの、いぢらしや。便におもふ父母に。おくれるのみかそもやそも。たつた一人の姉にさへ。娑婆と冥途のうき別れ。年端も行ぬ孤のさぞや。寐覺のうつ、よも。不便やたよりが有まじと。そればかりが思はれて。悲しいわいのと口説たて。見かはす顔に若君も。姉さんしんで下さるあど。すがり給へは抱きよせ。とつと計は取亂す。血筋の別れおもひやり。秋定始め兩人も。瀧なす泪漲りて。水かさ増る。谷川に懸る。流すことくあり。姫君御顔ふり上げて。我ながら未練なり。頼むは伯父君貳人の衆。何れもさらば。くも舌こはぐり。今ぞその身の知死期と。銀をぬけばがつくりと。散てはかなく成にけり。あつと泣入義若

丸。同じ歎きの人々も。果しなみだをおしはらひ。秋定いさみの聲のげまし。ヤハク商人。不覺の歎き未練なり。靈夢に違はず。伏姫が。最期に飛さる八ツの玉。家再興の忠臣と。生れ出んは疑ひなま。是より諸國を廻國し。玉の行衛を尋ねよと。仰にはつと金輪大助。響ふつと切らひ主君に。くれ姫君まで。あやまちしたる申譯。武道を捨て出づ家とあり。犬侍の犬の字を。ふたつに引わけ。大と名のり。諸國修行も主君の追善。ニツにはまた勇士のみばへ。尋ね出して吊ひ軍。めか君の世にひるがへすが。御恩報しと言上す。秋定感じて出かしたく。照文もまたすがたをやつし。大に力を合せよと。仰に天輪いさみたち。ハハハ、面白し。仰に任せ某の。役の行者の跡を追。山伏修行と姿をかへ。東八ヶ國を徘徊し。玉を所持する勇士を尋ん。コソコソ必ぬかるな金鞠入道。ハハ、言にや及ふ。犬の精氣を請たるの。取も直さす八犬士。尋ね出すは案のうちと。勇み立たる兩人か。矢猛心の。梓弓。引は引る。後髪。空敷姫の亡骸を。見れば目にうく水晶の。玉を欺く白露に。草の。袂もぬるでの紅葉。産ぬささの古郷へ。銚る錦の色々や。菊のは山や奥山の。空と雲井の。廠の聲。假の浮世のかりもがり枕に残る法華經の功德の。深き八ツの玉。響く詞もかな文に。八犬傳と未迄も。世々に傳へて残しける

第四回 行女塚のたん (是より富山の段より廿余年後)

東路や。武藏の國と名またかき。中も取分住人も。大塚村の片邊り。幾年ふりし榎あり。神とあふきて御注連繩。はるは殊更のどかさ。立つたけたる姿うり店。上か田樂の足。客の足さへとだへなく。あたり近所の百姓ども。太郎兵。五郎兵と呼あつめ。茶やの床几に腰打かけ。何と賑はしい事じやないか。サレハイン。去年は練馬の軍で。此邊までどんちやんく。小氣味。見る事てあつたよ。今年は世か治り。此行女塚もあらい参り。神子どんのどんちやんく。びくく。せいでもいじやないか。コソコソ太郎兵のか尤。この行女塚の明神へ。願がけす

や。腰けしやうち血の道一切。女子の病は河でも治るとの事。河内屋重太郎の神明湯の功徳同然じや。オチンソソ。くこの瞬も。去年の産に腰が抜そふに有たが。此明神へ願かけしたら。その御影か腰抜が直り。コソコソ此頃の持上やうのあらま。どんちやんく。あれの腰が抜そふなり。ハハ、サレハイン。夫にまだあらい事は。此頃とさる木食上人。男女の病ひ八卦墨色。何でも差した生佛。追付丸塚山で。火の定に入しやるげな。めづらしい事じやないか。イヤモ。あいらが所は。年中火が降。火の定に入たる同然じや。ハハ、イヤモ。だ咄で。日がたけた。なんとさるふじや有まいか。いのち。と吉原雀。どちやんく。ちやしやべり歸りける。塵の世を。いと捨てもちりの世の。人に佛果をす。めんど。諸國を廻る寂莫道人。身の行徳も高足駄。錫杖をらし。歩来て。木々に咲花散花も。盛者必衰の理りと。暫し。觀じて。イリ。春風に。なひく柳の夫ならで。腰もすふわり振袖の。若むらさきの色さかり。爰に請で。来る人は。所の大庄屋。六が。一人娘の濱路とて。田舎に惜器量よし。下部額藏引述。茶見せし。暫し足休め。頼藏はかつつく。ハハ、サレハイン。申濱路。御病氣の体も見へぬに。此明神へ願参り。何の御願でござります。サレハイン。そなたにいふも恥かしから。アノ。うちら隣。の信乃さま。もど。一家の中あれば。行く々は。女夫にする。と言号のしな。ながらも。親たちの不中故。思ふに。まかせぬ事ばかり。とふぞ親々の心も和らぎ。早ふ女夫に。ありたい願ひ。又ニツに。私が身の。實の親兄弟。練間の御内と聞たばかり。その御主人の。去年の秋。貞政とやらに。攻られて。討死有しと聞かよふ。もしその時に親兄弟。敵に討たれ。あされぬか。無事なら。どふぞ。迷してたへ。一方ならぬニツの願ひ。ハハ、夫で。さらりと。さかりました。たやうなら。一足も早ふ御参りなされませ。そんなら。参るとかいたつを。道人しばしと。呼と。いめ。聞は實の親兄弟を尋るよし。愚僧の寂莫とて。木食の行者。墨色をもつて。人の生死を。しる術あり。實親の手跡。腕の緒など。は。持れずや。いふに。濱路。嬉しげに。私が守りに。此書付とは。ぞ

の緒の包し封紙にてくゞとさし出すを道人手に取とつくと詠め。ム、此墨色を見る時の父母は最早死去し。腹
 がりの兄貴人。おは世にながらへ有。遠からぬうち廻り逢ん。暫く時節を待れよと。教示して道人はかしこを
 さして歩み行。濱路は猶もくらしやうす。問んと行を額藏引とめ。賣主坊主の當すいれう。打やつておかしや
 りませと。留る處へ犬塚信乃。與四郎犬をひきつれて。来るかげ見より濱路のいそぐ。チ、よい處へ信乃様。
 コレハ濱路殿御参詣か。ハ、額藏殿も大義でござる。イヤモ奉公人の私。大義にも存せぬが。困つたは濱路も。ヤ
 足がいたむとて。最前からこゝて休足。ナッ。いたむく。いたむ足でハ参られます。ヤ。幸のお咄し相手。
 私めは代参。申信乃様。暫くお頼み申す。コレ濱路様。此間にためぐの咄し。イヤハあし詞の與四郎。お
 のれも。信乃さまの。代参せい。何だかふりふるのいやか。ハ、エ、エ。氣のさかぬちく生め。行あらぬかと。追
 立て。場合を。つくる通りもの。宮内をさして走り行。跡は二人のつきはなく。梅と櫻の色くらべ。花物いはぬ
 体なりしが。イヤ申信乃様。いつぞやか、さんの言しやんすにハわがみの殿御は。イヤ信乃。やがて祝言さそふと
 の。お詞聞たそのときは。恥しいやら嬉しいやら。ほんに結ぶの神かけて。二世も三世も。先の世も。かゝるま
 いと一筋に。片時わすれぬ心根を。すい量してと。その跡の顔にもみぢの袖几帳。おほこに見へてかはゆらし。
 信乃は今更返事さへ。仕かねて扇の手をもちく。是はく。添い。思ふに任せぬ不中な親々。心とけ合それま
 では。イヤやつり他人むき。かうしてゐるを見られては。互の身のためにならぬ。是にゆるりと捨て。立を濱
 路が。コレ申。イヤ待つてと袖たもと。とぐむる手さへいと薄。風にはらふて足早に。もと来し道へ急行。濱路は
 はいなき延上り。見とる。後へ氷上久六。それと見るよりはふと抱付。チャットしめたぞく。エ、いやらしい誰じ
 やぞいのふ。イヤ誰でもあひ久じく。エ、お前の御代官様アタみだらな爰はなして。エ、放してと。お心

強い。日頃こがる、濱路姫。こゝで逢たは結ぶの神の引合せ。幸ひあたりには人はなし。ついでよこぐとしあ
 だれ付。いやがる者を無理無体頼すり付るその所へ。戻りか、つて額藏の。首筋つかんでゑのころ投。益くひま
 に濱路に目くばせ足を早めて。立かへる。久六やうく起上り。ヤレくくお顔に似合ぬ手ひどいお力。と。もへ
 山吹御前にも勝つたところがある。賞。既と。いひつ、あたり打ながめ。イヤレくくコレヤモツいんだか。ハイと。
 月夜にかまひげ砂打拂ひ。しかみづらす其處へ。設殿の内より龜雀が飼猫いだき立出て。見合す顔は。ヤア久
 六様か。ム、お身は龜雀。娘濱路はこゝへ逃した。ヨ、何をさよとく。いひなさるけふは濱路が此明神へ。参り
 たいといふた故。もし甥の臆病者に。初穂上さしてハ跡の邪摩と。見へ隠れにせ道から。たつた今さましたれ
 ば。濱路の事はしらぬわいな。ム、扱は同道ではなかつたか。夫なればそれにせふか。コレヤかめさ、そもじの聞
 へぬ者たぞよ。兼て濱路を身が女房にやらふといふた故。五倍治をもつて結納込入たに。今よ婿をわけぬとい
 ふは。あまり願欲といふ物だぞよ。サイアア私も如才はあけれと。とかく氣が、りは村雨丸。とふぞこつちへして
 やらふと。夫故わざと信乃と濱路を。見合すといひ込だも。娘をおとりに刀を取分別。刀さへ手に入らば。娘は
 直にお前の花嫁もふつとこの間しやコレ地だしあざれ。ム、成程。そふ聞は尤だが。一日も早く祝言の義を。
 コリヤ。たのみ入ぞよと咄の内にはさじ猫が膝か下りてそこ爰と。あるくも咄しにうつ、の龜雀。宮内の方より
 練助に。隨がひ來たる與四郎犬。おどろく猫を引くは。ぐつと一噛ふり捨ておせ道はるかに走り行。ヤレと撥
 く練助より。見る龜雀はびつくりはいもふ。ア、さじを與四郎が噛あつたぞ。かい立はづみ床几はから目久六が
 オイタ、ハ、ハ、コレヤモツいんだ。コレ、そこ處じやあしむ。コレヤ。練助。何で與四郎に。大事のくさ
 じを噛殺した。おどろくはかせと。腹立ち涙。練助のうろく顔。イヤ、めつそふな私が業じやぞりませぬ。と

花魁茗八總

ふぞ御了簡下さりませと。詫るを聞すイヤくく。さじを生て戻しおれど。ゑんりよあしやくも糠助が。茶びん
 わたまをはりまのし。大聲上て泣わめけば。久六なだめてコリヤくかめ笹。じたいコリヤとふいたしたのだ。サイ
 ナ。私が大事の紀次郎を。アノ糠助めが。伴作の所の犬を連れてきて。噛殺さしましたわいなあ。扱もく。可愛やナ
 ア。夕邊迄もけん迄も。手水つかふたり。藝盡し。手てくれよふするかわいさを自慢せうと思ふたに。わんと其儘
 噛殺すむでひ犬めと死がいは抱しめく。頬すりわて。大つげなくも泣わめく。久六は手をつうてイヤこれは
 幸ひ重疊く。エ、何のこれが重疊とこか。さじか歌を討てたべ。拜わいのと猫額。八の字書てしやくり泣き。
 ナ。尤だく。幸といふは。コリヤかうくと耳にロムとそんならその御教書。噛やぶつたといふて。セイ、万事
 の慕六と密だんの上。コリヤよふ氣が付た證據人の此糠助。エ、申私。いふぞ御了簡と。遂行帯際久六か引
 立行は籠ざ。は。猫のしかいをだくくも打連我家へ

其一

伴住家のだん

歸りける。食しみて樂しむと聖の教へ身一ツ。學びの窓の白梅も。集る雪とものとゆひの。雪の春さへ消やらぬ
 はた火にかけし。燗なべ煎じつまりしわび住の。主は犬塚伴作とて元とは里の武士も。手紙のなやみ片手さへ
 叶はぬ上に持病の。瘵は數そふくらし也。信乃は晝夜に看の。隙々學ぶ軍學の。書物ながめて居る處へ。一
 僕つれし血氣の武士。犬塚伴作の在宿あるやと。音なふ聲に書物さしあさ。伴作宿におりませ。どなたじや
 お通りなさらませ。ム、それは重疊ゆるしめされとうち通れり。主の納戸を立出。犬塚伴作とは。則拙者。いづ
 れより御入來と。挨拶すればさればく。拙者の八木の城主。定政公の家來。主人より密事の御用。委細は此書面
 に。イサ御内見と。文箱取出し。渡せば手に取封おし切。一々々讀終りハ、成程御書面の趣き承知し奉る。去なが

花魁茗八總

ら不がんの上。病氣に。合候へば本よく次第推参仕り。委細言上仕らん。先ゆるく御休足。ア、イヤく主人よ
 り急きの御用。御承知の上は最早退出。しからば御苦勞千万と。互に式禮侍の家來引連立かへる。跡打見やり伴
 作の。さしうつむさし思案顔。信乃の差より手をつかへ。申親父様。今の御侍はア、イヤとれからの御使と。た
 づねに伴作左あらぬ体。ア、イヤありや古朋輩よりさ。いの用。何も案じる事は。ア、イヤ、一兩日のめつきりどあ
 た、か。庭木の梅の眞盛り。ア、イヤ花見がてら茶を一ふく飲ふかい。ア、イヤ、夫のよ御慰。ドレ水を汲かへて。煮花
 んとして上ませふと。孝行ふかさ井のものと。釣瓶をさげて立出る。折しも隣の露路口より。灰吹片手に額藏が。ナ
 信乃さま。早御時分のおこしらへか。ア、イヤ私か汲んで上ませふと。氣もかるく。と汲上て。引さげは。ア、イヤ深切
 ぶり。伴作の打見やり。ア、イヤ額藏毎々大義。非方な性も修行のため打やつて置ては。たもらひで。ア、イヤけつかうな
 御挨拶。もと私の幼少より御隣へ。小がひ奉公。何一ツ稽古いたす隙もござりませぬ。ふと先生が是へ御出なさ
 れ。御術やはら。手習讀もの迄。御傳授下されし御高恩。もとより主人龜笹さまの弟御あれば。師匠なり御主人
 同然。せめて水なりと汲まするが。萬分一の御恩報じ。御遠慮なふかつかひをされて下さりませと。眞實こもる
 一言に。伴作もさけんよく。ア、イヤ能ゆつてくれめさつた。瘦浪人の生兵法。何の極にも立ねども。好こそ物の上手
 どやら。一を聞て十を知る頓智といひ。器量といひ。藝六づれが下部は惜いもの。それ引かへ。啐めが臆病。
 竹刀しなへは取あがら。肝心の眞剣を見れば。おち恐る。極また、す。元とかれは瀧の川辨才天の申子故。此ころ
 私願をこめ。慫慂するも。何卒臆病平愈の祈り。去あがら。聖ををしらぬ我多病。力と頼む。御邊一人。以後は兄
 弟の交頼入と。餘義なき訂に。信乃の手をつき。額藏殿を兄とせば。夫社此身の杖。柱。とふぞ堅めの盃がいたし
 たい。ア、イヤ是はく。迷惑千萬。たい今も申通り。師匠なり御主人同然の信乃さま。兄弟など。は勿躰ない。たい御

花魁八蒼總

のさせまじきに。せひもなき身の不孝跡御救されど計にて痛はる泪の手を打はらひ。イヤ我切腹のかねての覺期親類ながら其六夫婦村雨丸を奪とらんと。或の縁談。又は御教書飯など。手をかへ品をかへての巧み。もし我今も病死せば。終には御太刀を奪とられ。此年月の千辛万苦も水の泡。去によつて。長からぬ命をさ、げ。祈誓をかけたる誠心を。納受あつて今日今宵。汝が臆病戻りし。生るに勝る我本望。今端の籠得させんと。小柄をとつて手裡劍に。はつしと打ば梁の。釣繩されて大竹の。筒より。出る錦の袋。氣丈の伴作手に取上是こそ里見の重寶村雨丸。此劍の奇特といつゝ抜の切先より露したたり。殺氣を含んで振とさ。目眩と晴天雨を降し。刃に血汐の穢を受す。去によつて村雨丸と名付たりと。語る内より與四郎犬。薦を這出くるしけに。うめくを手負は見おろして。此年月飼育。不便には思へども。逆も助からぬ。彼が鎗疵。劍の奇特をためすは究竟。ソノ慘。苦痛を助け得させよと。渡せばはつと押戴さ。イヤ聞およびし此御劍と。言つ、紐を引はさ。ぬけば玉ちる名劍を。片手より引さけ庭におり立いかた與四郎。世に稀なる名劍にて。苦痛を遁る、汝が果報。未來の必ず佛果を得よ。如來畜生發菩提と。唱ふる聲と諸共に。首討落す疵口より。逆巻血汐れい。光をはなす名玉の。穢をあらふ村時雨。しのを亂して降來る奇瑞。親子はさつと打なかめ。イヤ、イヤいふかしや。イヤふしぎや。今與四郎が死骸より。逆立血汐諸共に。光をはなす一。理の名玉。ににかに雨の降來るは。村雨丸の奇瑞なるかと。刃の元末さつと詠め。逆奇代の名劍。地金金味焼刃の句。七星の紋輝か、やき。さながら金蛇の走るが如く。唐土の干將莫邪。我朝の鬼切膝丸も。及かたき此名劍奇特をまさきに現はせしか。彼といひ。是といひ。奇代の不思議と親と子の。暫しながめて居たりしが。玉を手に取刀を鞘。させば降やむ雨の足。血汐も。俱に納りける。信乃は手に持つ玉うちながめ。ハテ心得ぞ。孝の一字をあり付たる此玉。いかある故と父が傍。見すれば

花魁八蒼總

手を取實誠。ハ、ア是にて思ひ當りし事有。此玉自然と其方が。手に入たるその仔細。語つて聞んとかたへある。有合ふる布おつ取て。腹帯しつかと。引しめ。かぞふれば早廿余年以前。頃ハ七月七日の夜。俄によせ來る逆賊定政。大手擲手一時に。火の手を合す鯨の聲。スハ夜討よといふ闇の。空にとれたる星兒。物の具する間も。ある手の敵。早本丸まで責詰られ。武運も今ぞ月月の。矢種を切し無念の落城。その砌父正作の遺言により。此村雨丸を密に守護し。身の遠近のたつさなき。山寺に一宿し。計らぞ言身の妻手束に出會。直様當所へ。立越しが。妻は一子のなきを思ひ。瀧の川の辨才天に。祈誓をかけし夜半の夢に。一人の天女顯はれ給ひ。孝の字の玉を授け給ふと見て。夢の覺たる其。何國ともなくア、與四郎。迷ひ來るを飼置しが。程なく女房懐胎し。出生したる。則其方。しかるに犬の疵口より。誠の玉の出しも不思議。けふより汝が守りとなし犬塚信乃成孝と名乗へし。最前定政が招きの書面。村雨丸をさし出し降参せば。大録を與へんと此一通。是を証據に八木へたち越。降参と。偽て隙を窺ひ定政を討取。君父の仇を報せよと痛手も届せぬ物語。聞たび。に忝をみだ。殘る方なき御めぐみ御遺言臆し銘じ。頓て定政が首引提。御意に手回奉らん。とハハ年月御不便の。御思の上に勿跡なや我故やみく御腹。不孝の罪をいつの世に。びせん様も情なや。親十一世の契りとはいつの世からの定めぞや。あちさなや恨めしや。赦させ給へと合す手よ。か、るハ血筋血の泪。氣丈の父も思亥の。子故の闇の夜の鶴。鴈を斷思ひにて。親子手に手を取かりし。見上げ見おろす愛別れ。あつと一度は聲立て。涙出す泪四筋の瀧白千町のおとし水。一度に流すばかり。なり今はの父は泪をどいめ。實我ながら不覺也。此世に思ひ置事なし。イヤ介借と腹帯と。刀を取て弓手より。さき、くとかき切る苦痛。信乃の泪の村雨丸。抜て片手の臨終念佛。なむあみた佛。首は前にぞ落にけり。ハハいつとばかりよとふと伏し。むなしき首に取付て。前後不覺に泣

花魁 八 蒼

居たるか、る所へぬるで五倍次。手の者引連かけ来り。ヤア、犬塚村雨丸をすなほに渡さし其通り。異儀に及
 へ、討ち殺し。刀の有、家々さがしせん。何とく。くど罵つたり。泪拂ふて突立成孝。ヤよい所へ捕不五倍
 次。臆病半愈の力試し。相人のほしい折に幸ひ。腕だめしには幸究竟。一度にか、れと身掛たり。物ないはせご
 討取れど。下知にしたがひ組子ども。群か、るを事共せせ。片はしつかんて人磔。ばらりくど。「なげ飛す。烈
 しき手並に五倍次初め。數多の組子も舌をまさ。コリヤ叶はぬと泣らつたり。氣味よし。心地よし。少しの心
 晴行空。廻る月日もたつか弓。頓て中陰はりなば。八木の館へ旅立の道の。案内はしらねども。海山高き思
 義の父。心ばかりの葬りと。死骸をおぼふ假の塚。ともに菩提の種ぞ連。與四郎犬を一。野よはかなき名のみ卿
 よかく露か。時雨か泪の玉の光りも星にはのく。と。早夜も時の。鳥が鳴く。東の武藏大塚に。其名の朽ぬ犬塚
 の古跡を。今に殘しける

第五回 神宮川之段

水無月と。誰がいふ立の雨晴れて。風も涼しき七。過き神宮川原の涼み床。あふささるさの其中に引思強き蕪六
 が。跡に隨ひ網干左母治。打連立て出来り。わたり見廻し小聲にあり。何と左母次。道々もいふ通り。伴作がさい
 どの後。詞を餌ばよ呼取たア、信乃。さいてあるはてつきり村雨丸。欺し取らんと色々すれど。片時はなまぬ身
 用心。彼是れといふ内親の忌明も濟たれぬ。翌の八木へ發足したいとの望みも手紙にのしてかかれぬ。そこで
 工夫したけふの計巧。高ふはいはれぬコルカウ。と。呼く密事。香込左茂治。ム、スリヤ網舟作の刀。すり
 かへて手渡したらおれが望みも、信乃さへすふく。とやつてしもたら望の通り聲にして。濱路と祝言をすわ
 いの。そいつは悉い。そんならおれは先へ往て。網舟を待合そふ。土太郎にも香込込せ。万事ぬかりないやう

花魁 八 蒼 九十四

に。合点くとうなづき合左茂次の立ていそぎに死につかふる事生るが如く忠孝の二字を守る犬塚信乃は
 發足の無事を祈りの神詣。下向を急ぐもどり足。それと目早々にひき六が。サ、信乃待ちかねた。イヤ、是へよ小
 腰を屈め。どなたかと存せしよ伯父者人こ、へお出は。定めて涼みの御氣ばらし。といふににこく眞實顔チ、
 す、みがてらわが身の迎ひ。あすは八木へ旅立ちと聞さ。いとまごの盃せうと。肴屋をせいらくすすれど。此頃
 の暑さで新しい着のなし。そこで己が得手の網糸ぬ。手織を見せるも一ツはあぐさみ。幸ひ小料理に功者な。網
 干左茂次も同船したいと頼む故。川下の船に待してあいた。サア、爰から直又同道せうと。乗るのあふなき巧の舟
 共。知ねば信乃の手を摺て。コルカウ色々の御心遣ひ。御無用にはあされい。併折角の御志。むげに致すも
 餘り不眠。苦しうなくの御供いたしませふ。ソレハ、重疊彼是といふ内汐のこみ口。網入るには上時刻。下案
 内せふと先にたつ。伯父にしたがひ犬塚も。さそのれ行こそ。うたてけれ早夕ばへの日も入て。月の出しはの
 神宮川。櫓柄をとつて土木川が。漕出す船の舳に立て。打込網を蕪六が。しぼつて上てひらい込。あふなすは
 しりはへもろこ。左茂次は信乃に盃を。す、めつながめつ打興じ。念念は更に涙の面。又蕪六が網打込。船をお
 さへし回すなど。さしづの内に引上る。網も功へし三年鯉。船中賑ふばかり也。蕪六のしたり顔。網をしらへし
 て臂にかけ。きつと打込身の捻り。わざとひよろく。漂ふ足。踏なつして真逆さま己がたくみの底深さ。淵へ
 さんふり水けふり。あいやとあせる三人の。中にも信乃は引はどき。衣服ぬぐまむあら涙に。身をおどらして
 飛込水練。ついでとび込土太郎も。水裏をくぐり跡をしら涙。船には左茂治が獨笑。サアしてやつた此ひまよと
 。信乃がさし料村雨丸。手早く目釘ぬけ目なき。煙管の金穂ごちく。己が刀とすりかへて。己が刀は蕪六
 が巧みのうちで早速の悪知恵。舌打ならすばかり也。淵の底には蕪六が。わざと苦しむそら溺れ。ひん抱く信

花魁茗八總

し上ます。頼もしい人や。その詞て安堵しました。藪六殿のいはる。には。幼少から育て。氣心しつたそちなれば。娘の鎌に直した。事の。何と得心してた。めるか。エ、アノ私を。タイのふ。ソリヤ。もふ。あ。まり。結構。す。きて。何とも申やうがない。眞實。濱路。さま。を。下。され。ます。から。身。を。粉。に。く。だ。いて。御。孝。行。尽。し。ませ。う。チ。早。速。の。承。知。嬉。し。い。〜。愛。に。一。ツ。の。難。儀。と。い。ふ。は。浮。世。の。義。理。で。言。号。した。甥。の。信。乃。せ。ふ。事。な。し。に。引。と。つ。た。が。伴。作。が。腹。切。た。は。藪。六。殿。の。し。り。ざ。ぞ。一。一。圖。に。恨。む。此。頃。の。そ。ふ。り。油。斷。した。ら。舞。首。も。か。さ。さ。ふ。な。ど。思。は。ろ。く。よ。夜。の。目。も。合。ぬ。よ。つ。て。け。ふ。の。旅。立。に。は。そ。ち。を。付。て。や。る。は。ど。に。油。斷。を。見。す。ま。し。此。相。口。で。殺。し。て。た。も。エ。ア。ア。斯。い。ば。一。人。の。甥。子。を。憎。む。や。う。な。れ。ど。現。在。連。を。夫。と。に。替。ら。れ。ぬ。ホ。ン。ニ。お。れ。が。胸。の。せ。つ。な。さ。を。推。量。し。て。ど。そ。ら。泣。の。泪。の。燦。場。の。鬼。瓦。に。水。打。か。け。る。如。く。あり。額。藏。は。打。う。な。づ。き。わ。ざ。と。眞。顔。の。そ。ら。請。合。ハ。御。尤。御。養。子。よ。あ。し。下。さ。る。か。ら。の。私。が。爲。に。も。兩。親。の。仇。も。の。見。事。に。仕。お。は。せ。て。見。せ。ま。せ。う。首。尾。よ。ふ。仕。お。は。せ。た。ら。眞。實。濱。路。さ。ま。を。私。の。女。房。に。チ。念。に。の。及。ば。ぬ。大。事。を。つ。ま。ず。打。明。す。上。は。手。柄。次。第。で。す。ん。ぐ。に。花。舞。チ。エ。添。い。しか。と。詞。を。つ。が。ひ。ま。し。た。ぞ。下。レ。ん。なら。用。意。し。ま。せ。う。と。口。と。心。は。裏。口。と。納。戸。へ。こ。そ。は。別。れ。行。思。ひ。有。り。華。の。宿。め。い。と。は。し。を。片。敷。袖。も。露。し。げ。き。戀。の。山。路。よ。迷。ひ。て。や。濱。路。の。部。や。を。忍。び。出。て。廣。さ。座。敷。も。胸。せ。ま。る。我。身。一。ツ。の。か。こ。ち。言。は。ん。に。思。へ。ば。此。身。は。ど。世。に。あ。ぢ。さ。ない。者。の。あ。い。明。く。れ。こ。が。れ。た。信。乃。さ。ま。折。角。一。ツ。内。に。住。け。ふ。か。あ。す。か。と。祝。言。を。樂。し。む。申。變。も。情。あ。い。入。木。と。や。ら。へ。旅。立。と。は。よ。く。結。ぶ。の。神。様。に。見。放。さ。れ。た。る。悲。し。や。と。人。目。な。け。れ。ば。恨。言。聲。を。も。立。す。忍。び。泣。き。お。の。い。ざ。や。白。張。の。襖。引。あ。け。犬。塚。が。餓。れ。酒。も。そ。こ。く。に。暇。乞。し。て。出。來。り。見。れ。ば。泣。居。る。娘。の。体。何。心。な。く。傍。に。より。チ。濱。路。ど。の。こ。に。か。此。頃。は。氣。を。聞。た。が。ち。つ。と。氣。分。の。よ。ふ。ご。さ。る。か。扱。是。ま。て。は。い。か。い。世。話。父。の。遺。言。止。事。を。得。ず。け。ふ。下。野。の。八。木。へ。發。つ。足。行。さ。る。の。

花魁茗八總 三十五

劍の中。ふた、び逢やらのぬやらしれぬか浮世。随分無事で下され。さらりと立を引とめ。マア〜 待て下さんせいな。今更いふでいあけれ共難なじみの昔より。思ひの深き筒井筒。ふりわけ髪も取上て。ゆふて貰ふてごふしてと。向ふ鏡の玉くしげ。二親達の胸欲な気がねの中。指折て。盃するを樂しみに。思ふて居るに情ない。お前よわかれ片時。生きている氣はござんせぬ。うつそ手にかけ殺してと。娘心の一筋に。たつる操の真心の。泪に袖めくちぬらん。木竹をらねば今更に。振捨がたき戀の綱。もてあましたる計なり。かゝる所へ下部額藏。支度して庭先より。チ。信乃様。是にござりますか。敢前から一邊と尋ましたと。いふに二人のちやつと飛のさ。チ。額藏殿。いかい大義。もふ行ふでは有まいか。サアとふどけみの中。西がはらか笑輪。迄参らさば。道のつもりが悪ふござります。チ。見れば濱路さまも見立じやあ。しばしの別れも案じるは女中の常。申。よく〜と思召さ。此額藏めが御供するからは。ほごもふ連。まして戻り。お前と祝言させます。サア信乃様。お立なされませと。進めにせひなく立出れば。コノのふ誓し言たい事。今一度顔をと取付て。尽ぬ名残のはらく〜と。しのも際る。泪の雨の。排ふ菅笠すげあくも。枕かひさぬ妹存中。これぞ一期の別と。しらぬ隔の額藏が。諷めに眠て出て行。濱路は跡を見送り〜。わつと前に聲立て。正脉泪にひせ返る。始終後にうかゞふ總笹。襖おし明たち出て。此濱路のこに居やる。娘〜。チ。娘。愛。に。い。や。る。か。ホ。ン。ニ。信。乃。乃。の。う。行。ま。し。た。か。チ。ア。今。旅。立。さ。し。や。ん。し。て。わ。た。し。や。身。も。せ。も。あ。ら。れ。ぬ。と。跡。い。ひ。さ。し。て。泣。沈。め。ば。ホ。ン。ニ。チ。ア。の。子。と。し。た。事。が。信。乃。が。旅。立。の。わ。が。み。の。出。世。何。の。悲。し。い。事。の。な。い。わ。い。の。エ。何。と。い。は。し。や。ん。す。信。乃。様。が。旅。立。さ。し。や。ん。し。た。を。私。が。出。世。の。種。と。は。へ。チ。合。点。の。行。ぬ。等。今。迄。の。隠。た。か。ア。ノ。代。官。の。氷。上。久。六。様。わ。が。み。の。器。量。が。氣。に。入。て。嫁。よ。く。れ。い。と。モ。有。難。い。御。詞。御。代。官。様。の。奥。さ。ま。と。傳。る。果。報。の。何。と。出。世。で。有。ふ。が。の。と。す。つ。か。り。い。れ。

て。エ、そんなら私を久六様にお預け、嫁入さしてやるはいいの、ハハはつと計に呆はて。詞のさうに泣ばかり。エ、思
 くしい何をめろく、女子は氏なふて玉の輿は。願ふてもない出世のよめ入。サ湯も追ひ突も直しや。イエ、
 たとへ親のお詞でも。貞女兩夫に見へすと。世のことわざも情ない。外の殿御を持すとは。余り氣強い嗣欲な
 の。やつはり元の信乃さまと。女夫にして下さりませ。御慈悲く、と手を合せ。歎き沈め、空囀さ。たばこすは。
 く、吹ばかり。エ、あた森しいならぬわいやい。コリヤ信乃は、額藏に言付て。道てぐつしやり。今頃、わをち死
 。叶はぬ事と思ひさう。おうと、いふて嫁入せいやい。エ、まだどしどし。かふりふるはいやか。コリヤ痛いめさ
 、にや應とぬかすまい。さてく。サ是でもうせぬか。ヤ嫁入せぬかと。傍に有合、おつとり。かよはき濱路を
 りうくく。痛き苦しき悲しさに。歎き叫ぶを非道の打擲。三途の川の鬼婆が。呵責も。斯やといぢらしき。聲
 聞付てかけ出る藤六。二人が中に分入て。コリヤ、待女房。コリヤ何故へのあら折檻。エ、何故とはしれた事。久
 六様へ嫁入せいと。法華す、める程いふて。待心せぬ、不孝もの。それじやよつてと又振上る其手をどつ
 て。エ、マア待おれやい。もし打所が悪ふて。目鼻がまふたら何とする。ア可愛そふにひがひすなものを。荒々
 しい打擲。ま、子憎むと世間の人に後ろ指がさ、れたいか。エ、ちつとマア嗜んだがよい。イヤのふ娘。龜篋
 が折檻も。わがみが可愛さあまつての事。もふく、了簡しや。エ、サ、もふよ泣な。おれがあるからは指もさ
 、せぬ。ガコレおれが、いふ事よふ聞てたも。いつぞや楠木五倍次殿がおれを呼付。言しやるに。上役の久六様
 が。そのの娘濱路を嫁に貰ひたいとの仰。イヤと、ハは大庄屋の役を取上。此國を追放と。モ退引ならぬ手詰の
 難題おれが仕出した身代なら追放もいと。はね共入聲の悲しき。此家に疵付て、いふおれが義理が立ぬそ
 れ故是非のふ結納まで取られと。わがみの氣をはかりかね。けふ迄はよふ言出ささんだけれ共。今宵おしかけ

て聲入との事故。手を下て親が頼みじや。とふど氣には入すとも。得心して泣してたも。コレ娘手を合して拜む
 のやい。頼む。くも上へにて。泣て見せるも仕組の狂言。夫と白齒の娘衆に。道理の分ても氣に染ぬ。何と返事
 もないじやくり。エ、是はと返事を分て頼むのよ。返事の無いとふても不待心じやの、是非に及ばぬも頼ま
 ぬと。言つ、諸肌押くつるげ。腰をる脇差援放せば。はつと驚きあはてる龜篋。濱路の其手は、縫り付。ア、申く
 勿躰ない。何の御詞背ませふぞい。得心して嫁入します。必怪致して下さんすなど。縫り敷けば。エ、そんなら
 ア嫁入してくれるか。ア、エ、あまらこい。ア、計は、濟ぬわやい。さうく、行ふとぬかしおれ。ア、是はし
 たり。おれが言聞してゐるよ。傍から彼是やかましい。だまつて居い。何コリヤ娘。スリヤ眞實得心して往てくれる
 ぞ。ア、何の鹽を申ませう。ア、よふ言た。く、嬉しいぞよ。その一言が、二親の命を助る大孝行。ア、よふ得心し
 てたもつた。く、のふ。サ、もふ泣きやんなく。サ、泣止みやと。泣入娘を介抱し。すかしおだむる折こそあれ
 。奥の間より、秘立出。申く、旦那さま。只今氷上久六様。五倍次さまも御同道て。奥さし、御通りと。聞て夫
 婦の胸りし。ア、くもふどつたか。ン、龜篋。ちやつと何角の用意しや。コ、娘早ふ髪も結直し。さつと身仕廻
 めしておさや。ヤレ、胸の動氣が、ちつと納つた。ア、か、おじやと打連て。奥へ入跡。見送つて。こらへく、し溜
 なみだ思はずとつと伏沈み。身も浮計り歎きしが。漸に顔を上。一、且結んだ妻定め。貞女を立ればと、さま
 が。生きていぬとの今のお詞。所詮、そのれぬ身の因果。淵川へ、と身を沈め。死てしまふが申譯。そのい、義理の
 る親々に、稚い時よりお世話になり。御恩も、おくらす先立此身。不孝を赦して下さんせと。奥を見やり、手を
 合せ。涙ながらの暇。泣々、いづる後より。娘待ちやといふに。胸り。エ、御前はか、さんいつの間。ア、往
 生づくめの得心。がてんの行ぬと思ひしゆへ。鏡て見る所。信乃を慕ふて行ふとは。念の入たし、ふとい根性

おのれを手放しては。久六様へ言辭がない。どつこへもうせぬやう。仕様の斯と有合細引。なき入娘を後手に。しばり上げたる猿つなぎ。奥より葦六聲へ立て。鶴笹のどに居る。女房くんと呼ぶ。立られ。心の爰に氣のそゞろ。奥をさしてどはしり行。濱路は泪の聲を上。エ、胸欲をか、襟。貞女の道を破れど、エ、餘りしやく、胸よく。でござんすはいを。縛られてもく、られても。久六づらと祝言する事は。いやじやく、いいなア、エ、此細がどいてほしい。人は來ぬかと延上り。走らんとしての引留られ。その儘そこにどふと伏。泣涕こがれ泣沈む。ア、そふじやどの道死る身の覺悟。たとへ此手の叶はずとも。夫と親へ只一筆。書き殘さんどかたへなる。料紙引よせ。取上る。鹿のまさ筆衛立に。書下したるもしはぐさ。文字の運びもふるはれて。今も消行命毛の。後の哀を殘しける。斯ともしらす細干左茂治。忍び入。たる奥庭口。見れば濱路が縛の繩。天のあたへどかけ上り。柱の繩さき解はどけは。濱路は見るより。ヤアそなたは左茂治といふ口押さへ。コリヤおどはね立を。欲張づらの葦六め。聲にせふとたらし込。やばな仕事をさしあがら。久六と祝言さすと。今聞たからは念。暗し。かたげて退ふと忍び込たりや。幸の後手。ついでに口もと手拭よ。泣く音とくむる猿轡。仕合よしと引か、へ。何國ともなくかけり行く。奥の亭より久六五倍次。もてあし酒のむかつき上戸。席を蹴立てかけ來る跡。葦六夫婦すがり留め。ヤア御両入とも御待下さりませ。お腹立はみな御尤。只今も申通り此頃病氣に打伏娘。身こしらへの障入は。幾く重にも御川捨と。詭る内より鶴笹が。衝立を見て悔りし。ナニく泪川。深さ思ひよ身を捨て。沈むを水の哀れとも見よ。コリヤ濱路が身を投る。との辭世かど。聞て葦六しり餅どつさり。ヤアく、コリヤ大變じや。イテ追かけとど立上るを。引もどしてヤアどこへく。是もうぬらがこしりへ事。ヤア女めりどこへ埋んだ白狀ひろげ。ア申く、何の左やうの惡巧み。女房のいふ通り偽り申さぬ證據に。里見の重寶村雨丸。暫ん時お預け申さんと

花魁 八 總

差出す刀手に取て。ム、スリヤこれが村雨とや。フレ一見と拔放せは。似ても似付ぬなまくら物。久六いよく。居丈高。ヤイ老耄是かどに村雨丸。眼を明てよく見よと。云れて刀打ち詠め。ヤアコリヤ眞赤な腹物。そんなら左茂治に出しぬかれたか。エ、無念口惜やと。あせる夫婦をはつたとぬめ付。ヤア重ねくぐの無咄。もう了箇がと援打に。肩先はらり倒る。葦六。ノッ人殺しと呼はる鶴笹。五倍次すかさす拜み打。やぶれかぶれと葦六が。落たる刀追取て。切たるぬるでが額の大疵。惡の報ひの間違喧嘩。た、みかけたる兩人が。血氣の刃に葦六夫婦。朱に成て死たる處へ。宙を飛てかけ來る額。ヤア主人の歎と援打に。氷上が素垣桐一文字。手負の五倍治ちろたへ眼。逃るをのつさりから竹割。思はず振向衛立の。辭世を見るより南無三寶。コリヤ濱路さまの手跡。コリヤ斯して居られぬと。跡を慕ふて「かけり行。世は様々に戀無常悟りすまして寂莫道人。火定に入し九探山。殘る柴火の焰さへ。殊勝にも又物凄し。いと欲とに煩惱の。闇路を急ぐ細干左茂治。濱路を小脇にかい込て。息をはかりにかけ來り。ヤアくしんぞやく。爰まで來ればマッしめた物じや。フレ色めを口説て一薬みと。縛のはどけは逃出す濱路。すかさす振袖むすど取。コリヤまで濱路。最前も言聞す筈あれど邪摩が入てはどかたげて退た。コリヤあれがそのやうに戀したふ。信乃が所持の村雨丸の。神宮川でみて、こてん。摺かへておれが着服。それともしらす八木へうせて。胸の手足が上がり。縛り首の定の物。叶ぬ戀と思ひ切。おれが心に隨と。聞て濱路の胸りし。そんなら大切ナ村雨の刀を。ッ、疑しくば是見いと。援てさし出す氷の刃。見れば覺の村雨丸。ハアいつと無念の口惜さ。どつこらへて左のらぬ休。ム、此刀を持てゐやしやんすから。いかにも心に隨かはふが。一ツの願ひは。此刀を正しに預て下さんせぬか。ア、おれが物は女房の物。眞實だかれて寐る氣なら。そもじに預けて置ませい。エ、忝い。此刀が手に入からの。ヤアの歎と切付るを。引つとしてコリヤ何ひつぐ。

花魁 八 總

チ、しれた事刀の盜賊。思ひしれやどふり放す。腕首つかんて。エ、しどいけんさいめじやあ。其根性では。どふいふてもへがしあるまい。可愛き餘つて憎さが百倍。もう是迄と刀もぎ取。肩先はつきり。あつと計に倒る。濱路。折しも一天かきくもり。俄に降。來る村雨の。刀の奇瑞ぞ不側なる。左茂次はきつと空打をかめ。ハッ。ふしぎやな。いつぞやひさ六が物語に。村雨丸の奇瑞には。殺氣をふくんで振ときは。晴天に雨を降し。刃に血汐の穢を請せど。聞。まに違はぬ此有様。捨て賣。にして千両道具。テよい物が手に入たと。石にどつかり。憎ていつら。手負はむつくと起直り。エ、極悪人の鬼よ蛇よ。たとへ此身の死るとも。恨みを晴で置ふかと。氣のはやれども女氣の。立上らんにも深。手の弱。除方泪の身をあせり。是も付ても我。夫。の。御身の。難儀の村雨の。刀の有所がしらせたい。死る此身はいどいねど。跡の難儀が思ひれて。いとしいわいのと這廻り。延上つての伏。ひ。泪のかぎり呼聲も。枯野の原のさりくぐす。ねを泣からす如なり。マ、もつと呼てやれ。コリヤ何ば呼ても叫んで。も。どふに六道の辻に迷ふて居るわい。逢たか冥途に逢させ。ドリヤ引導を渡してやろと。そろく折し。も後なる。火定の穴より飛來る手裡劍。鳩尾を脊骨へ打ぬれ。きつやと計は死たると。心地よくこそ見にけり。火定の内より寂莫道人。頭巾衣に引かへて。着込の腹まさき小手脚當。黄金つくりの大太刀横たへ。ゆうくと歩みより。落たる刀手に取上。ハッ。通の名刀。豐城三尺の氷と言し。龍泉大河の寶劍にも。劣るまじき此刀。雲なき空に雨を降らすは。紛ふ方なき村雨丸。わが手に入しは天の眞。ハ、エ、有難や忝やと。鞘よおさむる。雨のあし。濱路は又も起上。ハ、扱はそなたも村雨丸を。奪へんため。盜賊よあ。ヤア愚か。寂莫道人とは假の名。誠は扇が谷定政に亡はされし。煉間左衛門が家臣犬山道策が。一子。道節忠知との我事也。われ火逆の妙術をあらひ。火定に入といひふらし。金銀を集るも吊ひ軍の軍用金。しかるに先刻。坂道より立歸り。聞の左茂治が汝

を殺す。濱路といひし一言にて。扱は妹の仇敵と。手裡劍にて討。留しは。則。兄が汝へ寸志。エ、見たしを妹といはしやんすには。何ぞ慥な誦掛が有かへ。ホ、いつぞや行女塚の花の元にて。汝が臍の緒の書付を見て。父の直筆。うたかひある。わが妹とはしりたれども。大事を抱へし此身なれば。わがと名乗らで過つるが。計らず今宵汝が歌を。討て捨しも尽せぬ奇縁。ハ、さてハ年頃尋したふた。兄さんでござんしたか。なつかしいお顔を。み。て。死るとい此身の本望。今端の際に。ハのお願ひ。言昔の我。夫。は。犬塚信乃成孝といふ人。大切な刀を盗まれ。定て難儀して居さんしよ。とふぞ夫との行衛を尋ね。その刀を戻してたべ。頼上ます兄上と。いふも苦しき息づかひ。始終を御と打黙さ。ホ、わかれも此刀を餌にして。さす敵定政を討取。その。ち犬塚とやらへ返しくれん。心残さず成佛いたせ。さ。り。あ。が。ら。今。一。足。早。か。へ。ら。ば。む。さ。く。取。期。は。さ。せ。ま。じ。物。せ。ひ。も。あ。さ。身。の。有。様。や。ど。手。負。の。手。を。取。引。よ。す。れ。ば。濱。路。も。ど。も。に。這。よ。つ。て。見。上。げ。見。み。ろ。す。血。筋。の。別。れ。強。男。不。敵。の。道。節。も。玉。を。わ。さ。む。く。両。眼。も。こ。た。へ。か。ね。て。い。ら。く。丸。塚。山。の。さ。り。か。す。み。晴。間。の。眞。に。な。か。り。け。る。折。し。も。麓。さ。わ。が。し。く。定。政。が。郎。等。肩。張。利。金。太。手。の。者。引。連。れ。か。け。來。り。ヤア煉間の殘黨犬山道節。注進の者あつて。利金太討。手。向。ふ。た。り。腕。を。ま。わ。せ。と。呼。つ。た。り。泪。拂。て。道。節。突。た。ち。ハ、ハ、ハ、ハ、は。ざ。い。たり。蠅。出。め。ら。百。万。餘。騎。に。て。四。む。と。も。汝。ら。が。手。あ。ふ。忠。知。な。ら。ず。刃。物。よ。ご。し。も。而。倒。な。わ。が。妙。術。の。奇。特。を。見。よ。と。唱。ふる。咒。文。に。あ。ら。不。思。儀。や。電。光。稲。妻。の。た。が。み。吹。來。る。廢。風。に。ま。さ。上。げ。ら。れ。利。金。太。は。じ。め。數。多。の。軍。卒。五。体。を。さ。か。る。落。花。み。ぢ。ん。木。の。葉。と。ど。も。に。飛。散。た。り。手。負。の。今。ぞ。知。死。期。と。さ。か。し。や。盛。の。糸。櫻。散。て。果。く。成。に。け。り。非。歎。の。兄。の。合。掌。し。臨。終。正。念。南。無。の。み。た。佛。目。に。は。泪。の。稱。名。も。假。の。出。家。の。け。さ。袋。し。が。い。に。打。着。せ。立。出。る。い。つ。の。間。に。か。り。額。藏。が。引。戻。した。る。刀。の。鑑。こ。を。た。も。ひ。る。ま。ぬ。身。の。捨。り。か。は。し。て。直。に。切。込。刀。い。か。ハ、し。け。ん。額。藏。が。守。り。の。と。けて。道。節。が。刀。の

柄にからむ共。しらす手練の切、先に刃口飛出る玉。手早に掴む額藏が。思はず切破殿より。石火の光蜻蛉の。火通の忍術さへ行姿。何國までもと額藏は跡を。したふて。」追て行

第六回 しをり崎の段

松浦かの。許我の渡りも程近き。しをり崎の八まん宮。御興あらひと。地車綱手賑ひも参詣人。引つゞきたる老若貴賤。群集は押もわけられず。男達もも悪者もも。みがき兼たる人便り。肩振手振ふい〜仲間。茶店間近く出来り。何と皆の者。小文吉が子分の奴等。師匠の顔をばかさに着て。か〜ぬかすが氣にくのぬ。かいらが親分房八殿は。小文吉が妹。一家中の子分と。よけて通せば付上るあらずと。ため押て是から後。願げた叩かぬやうにしてこまらふ。そんなら祖内の香屋を喰ししめ。元氣つけて立引せふ。皆こい〜と打連て。宮后をさして歩み行く。こなたの道より権柄に。お先手をふる長羽織。對の六尺袂袖。振込〜長刀。中が取囲み。うづ高まさ給の紙のり物。茶やがかたへに立させて。女中がそれとたち寄て。戸を〜わくれはしとやかに。姿媚くうら菊が。大振袖の緋ち〜みに。縫のもやうの花もみち。柳の腰のすふわりと。副巻しを風情あり。茶屋の床几に敷物しかせ。暫しと腰を打かけてイヤのふ小萩しのぶけふ世さまは御願ひ申。此宮さまへ参つたも。自らが氣延し。又貳ッには月丸にも晴やかな。野山を見せふため。ちやつと爰へ出してやりや。ハイ〜イヤモ。結構な御参詣で。我等もよい男の見飽いたしました。御籠愛のお猿どの。こなたも外を〜させてやろと。乗しより飼猿の。綱を小萩が手に取て。出せば驚ひちよ〜と。走り廻つて餘念なき。小猿に見入。主従は。笑ひ興する。其内よ。小萩がゆだんに月丸は。かたへの松にかきのぱり。狂ふはつみに繩さき結ばれ。かりん〜とともがく度々。綱のからみて身はぶら〜。ひすめめ女中もハイ〜冷汗。ア〜助けてとあせれども。詮方も

あき折こそあれ。燕の公子が頼みに應し。秦の都へおもむきし。刑柯かだめし身にぞしる。犬塚信乃は旅すがた。八木の館を志し。しほり崎へとさしかる。見れば梢は啼叫ふ。小猿よ目を付打ながめ。ハ〜危ふき猿の有さま。おのれと綱にからまれし。不便のしだいと獨言。し〜しながめて立すめり。こなたは何か呟き合。中にも小萩がさしよつて。申〜お侍様近頃卒爾な事をがら。ア〜猿は手前の主人の飼猿。木登りしてア〜通り。とふぞお助け下されふなら。有がたふ存じますと。余義なき頼に打らなつた。ハ〜イヤいかさま我とても氣のど〜と存する處。いかにも助け参らせんが。そも御身の御主人と何人。ハイ八木の城主有村さまの御息女。浦さ〜様と申まして。則ちあれに居られます。何有村殿の御息女とや。ハ〜と心に〜と思案何か心に。黙て。小柄援ととり手裡劍に。はつしと打ばあやまたす。綱うち切たる手練の手のうち。すかさず落るを抱さとめ。毛を撫さする有。様に。うらさ〜始。中。胸あてあらず計也。コ〜いかに世話。何と御禮を申さふやら。御苦勞ついでにあなたの御手から。主人へ直よお渡しなされて下さりませ。ハ〜しからの直々御渡申さん。眞半御免と立よるも心に。〜もつ抱し猿。イヤと計にさし出せば。ハ〜づかしそらに浦菊が。抱さ取手も氣もそ〜る。顔よ見とれてさみだれの池のあやめの花の口。よつと笑ひし愛敬は。かはゆらしうてあまめかし。ハ〜是ハ〜お有がたい。お前のおか。げて月丸の。命を救われし御恩。お禮の口には謝されず。お手の内さ〜といひ殿ふりませ。とこよ〜ッ〜ひ分あ〜。何國のお人と尋られ。イヤ某の武藏犬塚村の浪人。犬塚信乃と申者。父が遺言により。定政公へ献じ度品有て。わざ〜立こ〜候處。有村さまの御息女の。御目にか。るは八幡宮のお引合せ。何卒御取次偏へに願ひ奉る。と。聞いて娘はいそ〜と。ハ〜夫何より安い事。館へ伴ひ今日の。御禮もゆる〜言たし。また外は何やかや。た〜と云たい事も有。ハ〜小萩のなため。一。所にのり物へ。ハ〜そんならあなたと相興に。イヤ〜夫は存じもよらす

拙者の御供の衆と跡より參上。アノマア初心な誰に遠慮。氣づまりながらと無利無体。じつとどる手にしめかへす戀は歎のよい手引と。心に駈き乗物へ。二人一ッ所にのり移れば。おたちとふれる聲の下。出来る六尺供まはり。行列正して立歸る。宮居の方より人聲高く。喧嘩くと騒立遊げ行く跡よりいたこの金太。亂しかみの身は血みどろ。聞ぬくと罵を。さ、(なだむる其中に。立出る犬山小文吾。所名うての大前がみ。跡に付てもう六五郎太。腕まくりして。イヤコレ。關取。こなんの子分は淺き紙。金太が紙の大きすの上。しかも三ッ所。了簡せいと計での濟ぬじやあいか。サアぬいわい。房八が居ればすむ事なれど。居合さねは是非がない。さ、いな事をいひ上つての喧嘩。ことよけふは大事の祭り。おれにめんじて了簡せい。イヤサあいらり了簡する氣でも。跡で親かの耳へ入。なせひけ取たといはれて。おいらがおちど。さ、そふじやく。男の面に。是程流付られては。了簡おらぬ關取。コリヤせりふさして貰いぬわい。ハア聞。譯のない者ども。けんくはは時のはづみ物。どちらに疵が付ふ共いのれぬ。おれが子分の疵が淺いとて。呼で來て無理に疵も付られず。金太のいのちよか、る程の疵でもない。能かげんに了簡せいと。なためるはと猶付上り。イヤ了簡ならぬ。聞ぬのじや、聞ぬといふて又どふすりや。チ、相手の辛四郎。へ出さんせ。コリヤモフ人を付ていあした物。今更呼よもやられまいか。さ、そんなら關取。こなんの誤謄文が貰いたいと。いふに小文吾目よ角たて。ヤアいはしておけのはうづめない。うぬらははたし喧嘩に。誤り謄文かく手はもたぬ。せりふがしたか。房八を連立てこい。ヤコレ小文吾關取くと立ておさや。餘りたんがすぎるぞよ。辛四郎ははりにわれを斯と兩人が。むしやぶり付を引摺み。てんがうすなど二三間。なげ飛されても我武者の三人。茶店の割木てんでに追取。すは事社とみへたる折から。皆の者マア待と。言つ、出る山林。夫と見るより小文吾は。怒の面やのらげて。チ、房八かよい所へ。けふの祭りに若いやつらが。

地車引の言あがり。とつばさつばの其中へ。折よふおれが行合してと。半分いのさず。たまれ小文吾。女房の縁は内證事。おれが身びいさの取。捌。知ぬ顔しちや。人中へ煙が出されぬ。よつて存分たて引せふと思ふて來たのじや。サそふ思ふも尤なれど。高。で知た子分のいさご。わがみとおれが立引するもかとなげあひじやないか。イヤそふぬけさ、ぬ。此喧嘩此儘濟して。女房の縁よ引されて。引とつたと思れるもひやくし。サアわれから仕かけるか。己から仕かけふか返答せいと居合とし。短氣の小文吾青筋立。よ、是程譯を言に。聞分なけりやせひがない。いかにわれと立引せふわい。さ、よい了簡。若い奴等が顔の立線。見事そちが。して見せう。どふしてすりや。さ、かうしてすると胸づくし。コリヤ見ぐるしいと肘落し。はぐれて一度に引わかれ。氣を合して入身にあり。すつとよつて小手返。双方おとらぬ力者ど力者。いどみあふたる其處へ。二人の山伏かけ來り。二人の中へわつて入り。コリヤ房八。マアまで小文吾も。マア放せ。此たて引われら二人が貰ひじや。サ、いやでも應でも。もらいにやならぬと引わけて。中を隔る二人の山伏。小文吾見るより。さ、お前は願徳様。こなたは念玉御坊。おいらが立引を何でさへ人に出やんした。さればいの。先度からわがみにいふ通り。此願徳をさし置て。ア、念玉が先達せうといふ故。イヤおれが。イヤおれが先達と。いひ合ふた所が。さんと婿が明ぬじや。そこでおれは貴さま。又念玉の。アノ小文吾。二人が二人をたのんで。相撲の勝負。勝た方を先達と極と。今やうく。談合が極つた處じや。さ、願徳のいふ通り。頼みに思ふ關取と。せき取が。今爰で喧嘩して。若どちらぞに怪我が有ては。肝心の相撲の妨じや。よつて此立ひさ。さ、おれらに付けてもらひませう。何といはんす。そんならおれと小文吾と。相撲の勝負でこなんがたの。さ、山伏の位定するのじやわいの。さ、コリヤおもしろい。何と聞たか小文吾。アノわん達の頼みとありや。けふの立引のばそらかい。イヤコレつちにのぞまぬけ

花魁八巻總

ふの出入われさへ得心なりやとふなとせふわい。ナ、サ此立て引きは土俵の上へ。勝か負るは互の腕づく。アそれまでハ。小文吾。房八。塙所であつたと右左。劣らぬ關の大前髪。にらみ別る。意氣地と意氣地。角自立たる前鬼。後鬼。悪鬼仲間の三人も。肩ふり立る人強み。弱みを見せぬ小文吾が。男一疋幅廣を。道のちまたや西ひがし。立別れてぞ。かへりける

其一 芳流閣のだん

下野や。室の八島の夕煙。風の。行衛の定めなき。戰國の世も夏卿の。時しり顔に榮へ行く。八木の節と聞へしは。前の管領。扇が谷定政が持城執權堀有村が下知として。晝夜の守り怠りなく。事と嚴重見へにけり。奥の亭。よは女中達。勤の透間寄つとひ。何と早吹。一昨日らら菊さまが八幡参りよ。連れてお歸りなされたお侍さま。奥さまへは沙汰なしに。主の部屋に忍ばして。馳走はんさう。とふでもマッヤ御寮人さまがすへ膳と見へるわいの。夕霜のいやる通り。何でも只のわかぬうらさく櫛のそぶり。イヤ又お惚かざるも尤。色白てくつさりと。目元なら口元なら。とこに一ツ言分のないよい男。ならふとあらこちとらる。送り膳がして見たいと。つひいふ事も沙汰。やしき女中の常ありさ。折しも次より奏者番。服櫛の御成としらせの聲に姫中。ソッヤ又例の御毛虫様。くしやつかれぬ内にかりさふと。皆く奥に入にけり。斯としらせに。有村が。妻の敷妙出迎ひ。まつ間程なく悠々と入来る。扇か谷定政。儲の席にむんずと座し。敷たへ出迎ひ太儀。シテ有村はいかゞいたした。ハ、ア夫と有村の。城の外堀ふしんに付。見廻りのため出られしが。お成のやうすしりましたれば。遣仕おめみへ致されませう。よなる程戰國のたぐ中。城普請と道が執權職。ニ敷たへ。われ今日此城。中へ來りしは別事ならず。そちが娘うち菊。かねて身が委よさし出せよと。有村へ申付たれど。その、ち軍務しげく。暇な

かりしが。最早近國の敵は。大半味方に付たれば。高枕して樂しむ計。今より某が闇の伽を致させよと。我ま、氣儘の主命に。敷たへはつと當惑の。色目見せじと粉つくろひ。是ハマアつ、かな娘を。有がたい御意。併行義作法もしらぬ。ほんの懐子。万一御機嫌をそこなふて。お上へ不忠。此義計のお免えをされて下されませと。いはせも果す知慮の定政。ヤア予が一言の輪言同然。詞かへすは緩急至極。小身ん者の有村を。執權職に取たて。此城を預るも。浦菊を闇の花とせんため。自他とも予が心に隨がはせよ。又不承知ならば。汝等親子を縛り首。性根を定めて返答せよと。主の威光のてつへし押。返答何とさせたへも。今さらはつと胸せまり。暫しうらへもあかりしが。思案を極めて。ア、勿体ない。何の御意を背させませう。此上は娘にも申聞せ。しかにも御寐所の御伽いたさせませう。ム、メリヤ心に隨がはそとや。ソ、満足くシテ見入めり。いまだ印可を指出さぞやと。尋に敷たへ手をつかへ。さればとござりませ。夫と有村日々手に手をかへ品をかへ。印可の有所吟味仕れども。今に白狀いたしませぬ。ハ、アしふといやつ。奴が師匠二階松山城が印可の一卷。劍術柔術の奥義の勿論。城取。陣取の秘事まで。しるし有と聞し。予にゆづれと所望すれども。承引せぬのみならず。身の暇を願ふ不忠者。それ故入半申付おいたも。印可の有所白狀させんため。今日は予が目通りにて拷問にかけ。せひ共白狀させんす。主従評議の時しもあれ。取り次の侍罷出。先達て入半いたし候。見八が女房。御訴訟ありとてお次よひかへ候。通し申さんやと伺へば。敷妙の打黙。幸。これにわがさみさまも出されば。こあたへ通せと。差圖にし。たがひ下部ども。庭口。さして入にける。斯と差圖に入来る。犬飼見八が女房お松。白洲の上にかづくと。訴訟有げに見へにける。道こなたに手をつかへ。夫と見八。お上の御意と隨がぬ御谷にて。長々の半舎。つれな見たしが其悲しさ。とふそ敷し有やうにと。半分いはさず尖り聲。ヤア又しても叶はぬ願ひ。さうく立てうせお

ぬ大丈夫の。詞に恥て女房の。かへす詞も泣ばかり有村の目をひき出し。ヤ御前とも憚らず不敵の一言。ソレ
 者も見八めに。水くらはせよ。畏つたと用意の桐子にしばり付。鏡にさし付水口を。扱は忽ちうくく。
 漲り落る水勢にむせびめだゆる八寒地獄。見る女房の身も世もあられず。のふ悲しやとかけ寄を。支る下部。
 詮方も。泣聲さへも水音よ。蹴られて庭へ伏轉び。苦に増る涙。白砂を。ひたす計也。有村の聲をかけ。ヤ
 く者とも責殺しては物が無い。ソレ薬をあたへ呼生よと。渡せば取て下部を。口よ含ませ活入れは。ワと計。
 息吹かへす有様を。定政の打見やり。ヤ見八。それでも猶印可の傳受致さぬか。ヤ恐か。師匠につがひし
 詞は金鐵。たとへ火水の呵噴も死すとも。極意の印可思ひもよらず。ヤアしよといやつ。よ。此上の天秤賣
 につかけ。生ず殺さず拷問せん。ガ暫くの獄屋へち込。薬をあたへ休ませ置。女めにも言付る。一義有。上り屋
 へ引たてよ。我の是より芳流園の花をながめ酒宴せん。有村來れとかい立て。權威にはこる高慢我まん。悪の
 腰押有村が非道の下知に見八夫婦。右と左へ引わける。コレソ暫しと女房が縫るをへたつ下部をも。追立行の。
 主従は別殿さしてぞ入よける早日も西にくれなるの。綾の。天井錦の戸張。さらさらを飾りし別殿は。名に。樓の
 芳流園。間毎よ。照す金燭の光も庭の躑躅まで。いとゞ。色増ありさまは。目さまし。又。うるはしさ。廊下傳
 ひにひらしやらと。銘々花籠たつて。座敷もあらへ奥女中。一間にむかひ手をつかへ。仰付られし我々が生
 花のイサ御覽下されませぬ。御察人さま裏菊さまと。おとなひ入れば一問より。まだ裏若き裏菊が。衣のとめ木
 の伽羅の香に。匂ひ綻ふ花の顔。玉のかざしのあてやかま。月もひらふ品かたち。しとやかに立出て。チ、皆の
 衆毎日くの花所望。うるさい共思はず大義。とれもく。見事な手。いかふ花が上つたわいの。誰も見附
 のせなんだかや。くそこらにぬかりはござりませぬ。表向の生花の御用。内殿は。カ、お方への御馳走。それ

じやによつて花筒の。武重三重料理人に申附。随分腎精ますの魚。玉子生貝鯛いりこ。色の取。台風味まで。いの
 ぬが花の秘事口傳。人にはそれと岩藤のしめてからんてしつはりと。御水上の傳受事。定めてお濟なされませ
 うと。笑ひまじに言ければ。さく裏菊の打しはれ。その戀人は鬼にかくに。難曲に附いと。猶。思ひます秘の
 しのす。さ。亂る。私が心根を。推量してと評にて。の泪の露袖しぐれ。ぬれの腰おすこし元とも。俱にしはる
 、折こそあれ。出居の襖おしあけて。立出る母敷たへ。夫と見るよりうら菊は。泣目見せじと手をつかへ。コレハ
 く母さま。今日はまたお目もじ致しませぬ。おによりは御さげんよふて。御嬉しう存じますと。隔てぬ中も三
 ツ指の。禮義の武家の習ひかや。敷妙もよこやかに。チ、そなたもけふの氣合がよいやら。美しう髪を結やつた
 のて。思ひなしか顔もちもよさそふな。見ればうるはしい生花。ハ、娘の病氣を慰んと。秘共の手づきみよの。
 ハイヤもふお目にかけるもはづかしい。稽古もせぬ生花。菊がいふ事聞ず。あちらむくやい。おにじだは。い
 やがつてかぶりある。不調法な所が御笑脚でござりますと。いふに敷妙打は。笑。イヤくとれもくよふ入
 ました。此後とも何成として。随分と娘の心を慰めてたも。夫の格別。ちと娘に言聞事あれば。そち達は暫ら
 く次へと。いふに氣轉の早咲深ゆき。心得ましたと夕霜も。打連次へ立て行く。母の其間を松が枝に。からみし
 藤を手に取て。イヤのふ娘。何れもうるはしい生花の。中に。取わけこの松に夏藤を巻附せしは。陰陽夫婦の利に
 叶ひ。一しは面白ふ生た此花。ナントうら山しうは思やらぬかと。うら問詞にうら菊の。母の心の解やらぬ。思ひ
 を何と岩藤の。花打ながめ不審がは。カ、かはつた事のお尋此いけ花を浦山しう思はぬかと。ハ。サレハイノたど
 へていは。松の男。からみし藤の。則女子。まつ此やうに女の子も。夫とを持ねば身が立ぬ。そなたもモヤよめ入
 ざかり。いつくまでも一人は置れぬ。夫じやによつて。急に夫とを持す了箇何と嬉しいか。エ、自らに殿御を

持すどのソリヤマイ誰ぞござんすへ。外てもあひ。弓筋の風に歌をなひかす。扇か谷定政様じやわいのふ。そんならわたしを定政さまに。ナイノサ。ハはつとばかりにわされりて。返す詞も。なく計。母も心をおしはかり。胸まで満くる涙を隠し。おどろきの尤。この母もけふ迄。そなたの氣に入れた聲を。悦ぶ顔をみんもの。思ふに遊ぶ定政さま。最前か入あるやいな。今宵中にむすめうら菊を。閨の御をさせよとの。主の權威の横車。押返されぬり家來の悲さ。夫と有村どのに談合すれば。夫こそは家のさかへ。是非とも娘に得心させ。差上よとの無得心。主人ながらも知慮殺伐の定政様。何のそなたの氣に入ふ。不待心のしれてあれど。言ねばならぬ手詰の難題。因果づくじやとあきらめて。得心してため。コトく娘。頼むと計手を合し。ふし拜む手を押分て。ア、コトか。さん。勿体ない事して下さんすなど。いふ心の裏菊が。せつなさつら。悲しきよ。何と返す事泣入て。暫し。詞もなかりしが。よふくに涙をおさへ。段々と事をわけての御詞。よふ合点してあります。いかにも心に随ひませふ。そんなら得心して聞入てたまるか。マイナ。よふいふてたもつたのふ。懐子でも時分の娘。心よ思ふ殿御も有ふに。おすく無理な親我意と。必らず恨んでたまるなど。抱き寄ればすがり附。互に顔を見合して。果し泪にむせかへる。折しも早咲のしり出。申く。奥さま。定政様が召ますると。いふに詮方泣目をはらひ。そんなら娘。身仕舞も仕直し。嗽小そでも着かへてあさや。といひつ。立て打しはれ。奥の座敷へ出て行。跡打見やり裏菊は。こらへくし溜泪。わつとばかりに泣たさる。一間に心沖の石。重き歎きに伏沈み。袖に涙こそ計あり。一間に忍ぶ犬塚信乃。襖をそつと立ち出て。跡先見廻し聲ひそめ。先日八幡の川頭にて。不思議に御口にか。りしより。此館へ件入れ。日毎のもてあし過分主極去ながら。只今われにて承れば。定政公にの當城へ入來の由。イテ御目見へと立ち上る。襦をひかへて。コトマイ待て下さんせ。慈悲も情もしらぬ殿さま。

今御目にか。りあは。出て御身の爲ならず。とふぞして父上の。御機嫌を見合して。首尾よふ取なしあるよふに。ど。一日二日と日を送るも。お前の願ひかなへた上。私が願ひも聞入てもらひたさ。今更いふも恥かしながら。ふつと見初たそのときから。戀の思ひは深見草。色も香もある男へし。その面影の身に添て。忘る際も夏艸の。しのぶのみだれ我から。穂に顯はる。いとす。さ。露の情も。なかくに今に一度の下に結め。とけぬ心は。胸欲を。つれあいのいと取附て。恨のたけを夕顔の。花も露もつ涙なり。矢たけにのやる成孝も。切なる心察しやり。其恨みは理りながら。父の遺言背さがたく。此館へ入込し。定政公に對面し。多年の本意。イサヤ本傾安堵を願ため。その一大事を打捨。不義がましき事あつては。父尊靈の恐れ。殊には又定政公の深く心を懸られし御身。斯してあるその内も。人目にか。らは互の大事。爰放されよとふり切て。行を引とめ有。合琴。隔ての垣と押直し。こは情をの仕業やな。さのみ人につらかりし。西も東も日涙の。いつと泡とも消もせず。有に甲斐あさ此いのち。是程したふに胸欲な。あんまり氣強い成孝様。青葉くと呼とも濱の。のまの松風音ばかり。松風濱の。濱のまつ風音ばかり。聞へぬといなど抱付。もつれか。りし膝かづらもてあましたる折こそあれ。後の襖わら。かに。不義者見付た動くなど。呼りながらかけ出る定政。はつと驚き飛退二人。廊下口より有村も。袴のそば取走り出。ヤア君のお詞か。りし娘に。密通ひろぐ毛二才め。覺悟ひろげと援かくる。その手よすがる娘のうら菊。犬塚も飛しさり。まつしはらく。早まられな。某全く不義密通の覺へなしと。言せも果す。はつたとねめ付。ヤア覺へなしと。不敵なやつ。用心厳しき城内へ忍ひ入さへあるに。娘が部家は。隠は。取も直さず不義の證據。何と是れにもしひ隠あるか。サアその儀は。サア。サア。く。何と。問つめられて犬塚は。いつとばかりは當惑の。色目見て取らうら菊が。こらへ兼て用意の懷劍。胸にがりと突立る。是れとばかり驚

花魁茗八總

理なる。強氣の有村とがり聲。ヤア極よも立ぬよまひ言。妻子の仇たる大塚信乃。觀念せよと援討に。てうと切し
 の首をちぎ。縛めふつ、り切はせき。刀を直に我腹へ。切先深く突込たり。のみ情なや何故に。御前までか此の
 りさま。譯を聞して下さんせと。取付妻を突退て。ヤア歎く女房。悲しむを。傳へ聞くかの鬼子母神の。多くの
 人の子を喰ひ。我子を佛に隠されて。悲歎の思ひに惡念やみ。佛法守護の神と成しも。我身の上に異ならず。是
 迄數度の戰場に。人の子人の親ともいはせ。手にかけては數しらぬと。哀といふ事しらざりしに。肉身の娘が最
 期には。肝をた、らに掛らる、如く。鐵石心もどろけ果。始て涙を。こぼせしぞよ。娘が慕ひし大塚の切腹を
 どめいましめしは。詮議も事よせ助けんため。そふとはしらす最期にも。むごい爺じやと恨みつらん。不世の者
 やいぢらしやと。苦しきからだを這寄て。血汐の首をいたさしめ。コリヤ娘魂。いまだ此家を去らば儘にさけ
 。息ある内は犬塚と。未來のかためがさしたけれと。主人目のの前詮方なく。氣強く首を討しと。さば。わが此
 腕もなへしびれ。刀はさながら磐石を。上るより猶事かつたいや。コリヤこらへてくれよ裏菊と。息ある人に
 いふ如く。眠るが如き死顔を。見る目に餘るわら泪。六十年來仕込たる。氣の張弓も弦切て。泣出してはとめど
 なく大聲上げて取亂せば。妻は正肺泪にくれ。その心とは露しらす。情しらすの邪見のと恨みいふたが恥かしい
 。こらへてたべと手を合し。伏拜たる見び泪。夫婦の心察しやり。勇氣にはやる犬塚も。つ、ひとすれと湧出る。
 泪の同じ三人が。身をしる雨の漲りて。一度に落る瀧の涙。岸をむくたくはかり也。有村悲歎の泪を。わらひ。イヤ
 のふ犬塚氏。あれ程にまで戀したひ。命を捨し心にめんじ。未來の契りをゆるしてたべと。餘義なき頼に成孝も
 。満くる泪おし拭ひ。某も濱路とて。言号の妻あれども。切腹息女の最期といひ。われを助んどの夫婦の情。いか
 でか無下よ致すべさ。未來を契る堅めのさかづき。斯の通りと柄杓おつとり湛し水を汲取て。首に向ひて三々

花魁茗八總

九度。見るに夫婦の嬉しなき。ア、有かたや。忝なや。雛娘めが悦び申さん。祝義の翁がと居直つて。あひに相生
 の。松こそめでたかりけれ。ハ、ハ、ハ、ハ。まづは末期の水盃池とさへ行尉と姥。三國一の悲みに。盡せぬものは泪
 なり。か、る哀れは白洲より。勢ひ込て警護の面々。鎗引すできかけ來り。ヤア、犬塚。定政公の上意を請。われ
 へ向ふ上からは。翼ありとも逆はせじ。觀念せよと呼はつたり。ちつとも騒がせじろりと見やり。ハ、ハ、ハ、ハ、
 推量のうへは包ひにおよはず。義實公の怨歎定政。討取んため來りしが。事顯はれし上からは。是非におよはず
 。汝ごときものへろく。武士。なで切にせんは安けれと。刀の穢れなどなげなし。あらば手柄に討て見よと。い
 ふより早く廣庭へ。ひらりと飛下。二王立。すかさずくり出す片鎌鎧。持たる扇で丁と請。拂らへ得たりと後
 より。襦を縫いと閃く穂さき。はつしと蹴れてひよろく。た、よふ邊間を付込。早業。はげしき手並にた
 びろく細子。追立。く。あふて行く。手負夫婦は延上り。氣つかふ後へ大將定政。ふすま蹴放しおどり出。ヤアわが
 子の愛に恩義を忘れ。うら返たる不忠者天罰思ひ知らせんと。抜く手も見せず夫婦が首。はつしと打落し。
 血刀提げ突立。折しも。俄かに聞ゆる貝鐘に。あはやと見やる庭先へ。息をさつて馬淵軍藏。庭上に大息つき。仰
 にまかせ犬塚信乃。組留んどいたせし處。聞しにまざる手練の曲者。むらがる多勢を切ちらし。芳流閣の家の棟
 へ。上るを透さず付込。味方。われ組留んど力者の面々。左右へか、るを寄付す。或は。囃切。から竹わり。われ
 にわれて。われわれく。上より落くる味方の死骸。手に余つて見へ候。急ぎ御加勢あるべしと。申捨てぞ引か
 へす。定政いかりの髪逆立。ヤア言がひなき弱卒ばら。此上へは見八めよ申付ん。ヤア、者ども。先刻の女呼出せ。
 早くくと氣をせいたり。斯としらせにかけくるお松。定政聲かけヤア、女。今こそ見八が半舎を赦す。犬塚信
 乃。をかめ取らば。望みのごとく暇をくれん。其旨早くいひ聞せよと。手の表かへす主命も。夫との爲とお松が

悦び。ハア心得ましたととり物は得手の夫と。たとへ朝比奈辨慶でも。生捕事今の内。ア、お嬢しやとつま引上。勇みす、んで走り行く跡打見やる定政が。肩口ぶふと打ぬく鐵砲。さしもの定政たまりかね。尻居にかつはと倒れしが。刀を杖に起直り。ヤア何やつあれの比興の振舞。者どもはあらざるや。曲者討取よと。呼入るかしこに聲高く。ヤアく定政。煉間左衛門が家臣。犬山道節。對面せんと呼はつて鐵砲引さげ入来る道節。身よの小具足。小手脚當。以前にかゝる。その骨柄。定政見るより大よいかり。ヤア儕の大入太郎扱は煉間の變黨よて有しよな。ホ、いふにやあよ。大入太郎との假の名。誠は煉間左衛門が家臣。犬山道作が一子忠智。汝が不忠の押かけ軍。思ひよらねば主君をはじめ。我父までもやみく。討死有て無念の落城。某その境に有。合さず。跡よて聞し心外さ。何卒汝を討取んと付ねらふたる。折に幸。のからず手に入る。村雨丸。餌にかふてばかりより。今社返す君父の仇。思ひしれよと懷中より位牌取出し。ヤア。はつしと蹴すあし勢ひの。實にも犬山道策が。忘れがたみとしられたり。定政無念の齒がみをなし。ヤア奇怪なる歎呼はり。冥途の供とよるばひあから。切てか、るをしつかとどめ。此期におよんで叶いぬてん業。今こそ此世の暇くれんど。援手も見せず定政が。首のはるかに飛散たり。折しも駈来るあまたの力者。曲者やらぬとつばなの穂先シヤはざいたり。嘯出とも。わが妙術にて片はしより微塵にせん。の安けれども。預り物の村雨丸。金味見んの幸究竟。一人も残さず撫切と。ひらめかしたる名飢の。奇特に降来る雨よりも。足音しどろにたゞよふ大勢得たりと飛込飛鳥の働さ。さんを亂して逃行く軍兵。のがさじものと道節は。搦手さして。追て行。阿房をうつす玉のいらか。芳流園の金殿も。修羅のちまたと鳴太鼓。二重の樓にの見八が。十手口に欄干へ足踏。かけて身づくろひ。見上る屋根より手具の死が。い。落るはさながら雪だれ。シヤものくしと一人言。見廻すかたへ見越の松。是幸と身を踊し。ひらりと枝へひさぐひの木傳

ふ「ごどくによぢ登るの危ふくも又勇ましき。難なく屋根へ飛下りて。見八勇みの聲高く。ヤアく大塚。定政公の仰を受。犬飼見八向ふたり。尋常に細か、れ腕をまはせと呼はつたり。ヤア小ざかし討手呼はり。犬塚信乃が死物狂ひ。相人は嫌はぬサアこいと。詞の内に見八が。取たと打込十手を。さしつたりと受流し。うての開さしされば付込手練と手れん。秘術を尽す犬塚が。太刀をはつきさとうちをられ。其儘入身の極意の秘術。こなたも劣らぬ勇力剛力。あいやくともみ合中。いかゞの仕けん兩人が。のる、はづみ半五。ふみすべつてころくく。下の谷におふ早川へ。落て生死のしら涙の淵。定めぬ浮世也

第七回 大塚鎌倉御殿の段

新ころ。鎌倉山と歌人の。言の葉。舞も榮へ行。足利左兵衛。佐持氏公。弓箭の徳にあひさ伏す。關八州の大小名。八朔の佳儀をのべんと参列の。さらを鋤りし大廣間。武勇の。威徳ぞたぐひなき。諸侯の列の中より。山の内秋定。しづくと進み出。房州瀧田の城にこもる。金鞠刑部。吉。先年里地を亡せしより此以來。扇が谷定政と心を合せ。將軍家の下知に背き。近國を亂妨し。民の歎きをかへり見ざる惡逆。願くは御勢をむけられ。御征伐あらしめしと。言上あれば持氏公。ホ、その儀心付。ざるにあらねども。應仁以來諸國みだれ。關八州の大名心々隙を窺ふ時節あれば。いまだ言。吉征伐のいとまわらず。其方の里見が縁者。とに冠者義成を。育養ふよしあれば。手段をめぐらし。高吉征伐の用意いたせよ。されども隣國千葉の介頼胤と不相なれば。後よ心のひかれやせん。幸ひ今日は頼胤も伺候いたしたれば。己後は兩家和睦のしるし。千葉の重寶小笹丸を。山の内へをくり。山の内の重寶。落葉丸を千葉へ贈り。互に寶をかへて。以後は水魚の因みを。高吉定政を征伐せよと。嚴命くだれば頼胤の。はつとひれ伏。奉ある。折から勘番の表者まかり出て。扇が谷定政。下野八木に在城の處。何者

ともしらす忍び討取候により高吉八木へ引うつり候よし。隣國より訴へ出候と。申上てご退さける。持氏公
開給ひ。扱は早。政はじびけるな。此上は高吉誅伐の義。兩人に心を合し。油斷なく取はからへよ。猶當
參の銘々も。國の守りを怠らず。忠勤をいげむべしと。鶴の一と聲なみ居る大名。一き同にいつと平伏す。持氏公の
帳内に入らせ給へば大小名。各式禮目禮し。早退出の時つ風。枝を鳴さぬ松の間を下りて。こそは

其 一 入江の段

「行水の。流れも早き行徳の。入江よ。よするさし汝の。波の波よる老人が。好の道かや釣竿の針の曲れとまがら
ざる。律義一通かた親父。所名うての古那屋文五兵衛。釣に餘念も波のおも。ながれよつたる捨小船。エ、大事の
所へ邪摩が入た。ア、めんどうなとつぶやきく。立上り。船つきやらんと見て恠り。ア、船の中には人の死がい。
誰がわざかはしらぬも。か、り合になつてはならぬ。ド、リ、モ、リ、今日はこれ切りと。いなんとせしが顔さしの
ぞき。見ればみるほど。鯉の房八によふ似た顔。しに切た体とも見へぬ。この人かかしらぬも。助かる事
なら。よび生てやるも後生と。いひつ、綱を柳もやい。抱さか、へて陸へ上。水をふくませ耳も口よせ。コ、ン
どこの人やらしらぬ御人。氣を儘にめたつしやれと。呼はる聲に氣のつく信力。ア、爰は何國いか成所と。いふ
に文五兵衛打ながめ。氣が付ましたか。コ、ン、爰は下総行徳の入江じや。こなさんいこの人。みれば君物
も裂やぶれ。手疵もあふていやしやる様子。ア、いふいふで。船の中で目を刺さしやつたと。尋に犬塚のたり
に氣を付。なよをか隠さん某は。武藏大塚に住し犬塚伴作といふ者の一子。同名信力成孝と申もの。仔細あつ
て村雨丸といふ名剣を所持し。八木の城へ入こみ。君の仇をねらはんとせしに。事難ひれて大勢に取まかれ。す
でに一命もあやふかりしに。松の屋根より踏すべり。落しとは思ひしが。其後は氣絶して何事も存せず。かた

る内より文五兵衛。ム、そんならお前は。犬塚伴作様の若旦那でござりましたか。ア、某が父の名苗字。くひしく
しつたる。貴殿は何人。ハイ私は何とお前の祖父様。正作さまへ仲間奉公。名を林平とよばれしもの。若氣のあ
やまりに。酒狂のうへで人をあやめ。既に仕置にあふ所を。正作さまの御指で助り。御金をもらふて。此行徳
へひそかに来て。宿屋商賣はじめたも。皆、正作様の之恩。エ、いふ度はお禮よと。思ふはつかりで。一と年
二とせとくらす内。高吉とやらがわざ。里見の御家は断絶し。正作様も討死と。聞たとき其残念さ。エ、コ、レ
とふぞして。伴さくさまになど御めにか、り。お詫申たいと思ふたもよそ廿年前の事。それからい便を聞な
んだに爰で御めにか、る。いんせぬ縁。シテ、伴作様の御までござりますか。尋ねに信力の聲うるまし。扱は
常々父の物語に聞かよふ。林平と貴殿の事よな。ア、まことに人の行徳と水の流れ。不思議の對面するに付。思
ひ出す。父伴作。仔細あつて切腹し。末期の際に某へ。君家の仇を討よとの。その遺。いも水の泡。大切な刀
の盗まれ。目さす敵も。討たず。思へば武運つたなさを。推量あれ林平と。身を悔みてぞ泣き居しが。なま
中。いさ恥さらさんより。切腹して相果んと言捨刀に手をかくるを。ア、コ、ン、又短氣千方。いま死しやりました
て。刀はたれが詮義しいだし。イヤ、サ、敵のたれがサ討ますぞ。ア、サその義は。ハテ分別が若い。短氣功をなさ
ずと。イヤ、氣をしづめて。コ、ン、ア、聞つしやりませ。エ、私か伴小文吾といふ者。生付て力強く。もがりの犬平
といふ悪者を投殺してから。もたれいふとなく。犬田の小文吾と言ひやし。小相撲の一番もとる男氣なもの。お
前。入譯咄したら。力とあつて刀を詮儀し。その敵とやらも討しかねぬ氣。ガ、ア、ア、萬事は私にお任せな
れ。早う内へ御供して。伴小文吾にも達せませと。かい立後の若原より。ア、イヤとふから爰に居やんすと。言つ
、出る大前髪。一腰さすが關取と。いねとるさ太肉り。それを見るより。ア、伴。そんなら最前からのやうす

花魁八巻總

をアイ何れも皆聞きました。おれが爲にも古主の若旦那。命にかへて御世話申さしやあらぬ。しかし人目の多い中。アノ形では人の怪み。ヤ幸ひおれがもつて来たお前のとんど。是をあなたに着せまして。と差出せば。チ、コリヤよい分別。サ若旦那。ちやつとお着かへなされませと。いふに信する手をさげて。扱は小文吾殿と。こもとよ。主のしらひの調痛み入。何卒以後は水魚の交り頼み入と。聞て小文吾打笑ひ。ソリヤ私から願ふ處。サ、お手上げられい。イヤ申親父様。もしや八木から追手のか。るまい物でもない。早ふ内へ進まして。ソリヤ合点じや。ガ此小袖は其風呂敷につ。んぞ。ア、おれが持ていにやんすわいの。よ、よし。足のつきさふ。あア舟も。突流し早ふ戻りや。サ、よいてや必らず道で怪しめられぬやうに。顔はこれ此笠でと。親子が寄て取つくらふ。深切まりをよろこぶ信乃。しからは後刻と互のおれそれ。二人はうち違たち歸る。小文吾の血汐の衣服。風呂敷におし包み。小脇よか、一撃し船。もやひを解て沖中へ。力に任しふみ流し立かへらんとする處へ。後、疑ふ曲者が。風呂敷づ。みに手をかけて。引もどすを拵ひ。物をもいはず打こむ拳。身をかりして付込早業。こなたも釣らぬ身の捻り。互よいとみあらしふづみ。風呂敷をけてばら。と。出る衣服の片袖を。手早く曲者引ちざり。聞はあやなしかけ出す早足。のがさじ物をと小文吾も跡を。したふて「追て行

其三 千葉館之段

久堅の雲の上にて見る菊の。花の袂を折はへてと。うたいつ弾つ取々に打眠しき菊月や。けふ九日の酒宴と。さめさしたる一とかまへ。千葉の介頼胤が。かみやかた。繁昌類をかりける。屋敷づとめのゆるやかに。腰元とらやの問よりこぞり。ナント小沙松が枝。けふの節句のお祝ひで。服さまの無理じい。いかに酔たじやないかいのふ。ア、アノ早月の顔の赤さ。あかいのよいがしとがなふて。麻松しやらふかと案じたわいのふ。キ、キ、キ、ヤその赤

花魁八巻總

いので思ひ出した。アノ海岩から来た角太郎殿と。離衣の事しつて居やるか。ア、ア、こは。いやんな。こちららが呑込で。二人人の戀を取もつたの。朋輩のよしみ。夫にアノ一藤太殿。顔にも似合の色せんさく。離衣は届けて呉て。毎日の状文。たのまれるにはつとしたわいのふ。サ、それ。角太郎殿とは違ふて。目いどんぐりめ。鼻は獅々舞す。市が流紙仕立の鬼の面。の。も似合ぬと。そしる後に一藤太。ぬつと出たる顔見て。胸の。ア、お前は一藤太殿。いつの間に。イヤと。ふから後よ立聞した。誰あらし小見山一藤太と。いはる。武士を。離紙の鬼の面のと。そしり口。さつと咎め申付ると。サ、いふは嘘だ。粹のさつすいたる身ども。氣にはかけぬ其かり。此文どふぞ離衣はわたし。色よい返事するやうに頼み申と。渡せば小汐が突もどし。イエ、くせんぞから度々届けても。七里けんはい受付ぬの。どふでもお前の御御の仕込の。さゆへ。もつと女の好よふに。産直して。らはんせと。笑ふて奥へはしり行く。エ、いま。くしい女郎共と。わたる。さかやしさに。似合しからぬ此離衣。入来る藍原胤度。しづく。歩む足元に。落ちる。一通手に取。上。もの。がたさかやしさに。似合しからぬ此離衣。ど。つく。詠懐中し。左あらし顔にて奥へ行く。引ちがへて一藤太。落せし。を。さ。よろ。尋る。後。に。コレ。サ。一藤太。うろ。く。と。何しめさると。聲かけられて。胸の。ア、ア。こなたは。馬加氏。身共のちつと。落した物があつて。ア、ア、ヤ。それの格別。かねて貴所の舎兒。横堀有村との。勸めによつて。定政公へ。一味合味。主人千葉之介を。な。きもの。に。せん。と。山の内秋定と。不和になし。既に合戦にも及ぶ處。鎌倉殿の。あつかひによつて。兩家の寶を取かへ。和睦との義。スリヤ日頃の。巧み。も。みな。む。だ。骨。良。服。外。に。所。存。は。し。ご。さ。る。か。あ。ア。サ。と。く。より。その義を工夫し。いたり。只邪摩になるは。相役の藍原胤度。また。犬村角太郎の。奴ら。兩人を。自滅させ。其後。離衣を。あ。さ。び。に。する。手段を。只。今。見。せん。ず。と。庭。に。あり。立。小。石。を取。打。こ。む。井。筒。の内。より。も。錦。の。袋。引。く。は。へ。ぬ。つ

花魁八總

と出たる並四郎。大記さま。シイシテ件品の品は。お氣遣ひあるな。寶藏にしのび込。まんまど首尾よく小雀丸を盗みどり。箱への件状を安置されました。イヤお請取下さるな。渡せばとつて。出かいたく。ソレ當座のはふびとを投出す包み。ム、スリヤ此金を私に。ホ、ッまだ汝に言付る事ありと。懐中より種が島。取出しわたへ耳に口。ム、そんならアノ藍原を。シイ首尾よふ仕おはふせなは。東諸はまみ次第。かたじけない。左やうならば御向所。必ぬかるな。合点。と並四郎。奥庭さして忍び行跡見送。一藤太。ヤ天晴妙計。ガ其刀を見どがめられぬやう。チ、其義はそつとも氣づかひ無用。まだ其方に申聞。す密事あり。一と間の内にて示し合さん。げに尤も黙さ合。打連てこそ入にけり。風さそふ。菊の匂ひの。それならで。つとの梅花の芳りさへ。ぬならぬ姿雛衣が。おもひのりげに立出る。廊下づたひに角太郎。とり持酒のはる酔さげん。それと見るより。ヤア角太郎さん。逢たかつたといふ口を。ちやつとおさへて。コレハ又大きき聲。かくしつ。む二人が中。我ら酒にたべ酔ても。そもじの事はかくびにも出さぬに。それにイヤ逢たかつたとは。サアたしなれたがよいわいの。サアそふはそふあれ。一とツヤかたに住ながら。人と目の間にへだてられ。顔見るのみで咄しさへ。ならぬしんさきもどかしさ。つもる思ひは山鳥の。おろの鏡の間をへだて。夢の契もあざさき。つりさぬくの。鐘の音に。つきはない身のはかさを。推量してと取付て。はろりとこぼす。一と平泪の戀の。習ひなり。思ひの同じ角太郎。心を察し。チ、其悔は道理。我父一角は武術の達人。大祿にて召か、へんとあれど。仕へを好まぬたつての辭送。しからば悴をどの仰により。昨より近習奉公。不義はお家のかたい法度。かういふ内も人目に立ばわる。サアちやつと奥へ。イヤ。御酒宴はもみ納り。又あひ首尾に何やかや。つもる咄しは奥の。サアござんせ。取手をはらひ。ハアこつつけぬ。ない。晝日中にたしあみや。咄開に。又折あらんと。立を引とめ無理やりに。もつれあふたる。おもみぢ。あから

花魁八總

む顔を袖几帳。いかなる夢をやむすぶらん。後の襖そつとあけ。窺ひ出る一藤太。戀の意趣もつむつとかは。エ、はてくろしい兩人め。日頃つれあふぬかした返報。やがて思ひしらさんと。ぶつ、く所へ奏者番。たゞ今山の内家の使者として。里見義成様御出。しらせの詞に。何山の内の使者と。大かた寶取かへの一義ならん。これへ通せ。身共は主君へ言上せんと。追たてやりて小見山は。一間へこそは入まけり。桐根の二葉かんばし。里見の。小津よし若丸。成長有て義成と名も改めし。禮服の。姿威たかき。優美の骨柄。何か白木の。蓋の物。小隠従に捧げさせ故實。正く入来る。斯と案内に千葉の介馬加大記したがへて。末座に着し。一揖し。山の内の御使者。遠路御苦勞に存じ奉る。某。千葉の介頼胤。使者の口上仰聞られ下されふと。禮義正しく述べければ。義成も答禮し。某は里見冠者義成と申者。伯父秋定が使者。立事別義あらず。鎌倉殿の嚴命に任せ。兩家和睦のしるし。互に寶を取かへ申さんため。山の内の重寶。葉丸則ち。持参仕る。改てか納有り。又當家の寶小雀の刀。御わたし下されふと。ウひつ、箱を差出せば。頼胤取ておしいた。き。傳へさく名。銀鍔に落手仕る。ヤア。誰かある。申付し。此これへ持て。呼ひる聲。ハッ。とこたへて。うやくしく。刀箱をさ。げ出御前に直し置。近習は次へ。立って行く。頼胤箱を引よせて。蓋取退れば。こは。いかに。刀よあらで入たる。一通。見るに仰天。コリヤ。とふじや。大切なる刀は紛失。みれば怪しき。此。一通。それ常武改ためよ。せき立色目。大記もわざと打驚き。文おし。兩さ肩に。皺。コリヤ。これ不義の。詭書。手跡は正しく女の筆。これ盗賊の手か。りならん。いふ問もあらず。一と問より。その盗賊これよ。と。呼はる聲。一藤太。角太郎。雛衣が。小腕とつて引たて出。白紗へ。とふと。脱浴したり。二人は。つと。面目をみだ。顔も得上。さしうつむく。大記の。蛇と見下して。此兩人を刀の盗賊と。何ぞ。儲な。證據有。や。サア。くこやつ兩人。晝日中とも。彈からず。田の内にてはてくろしい。イヤ。モ。言詰道断の。しだら。身共か

がん付かんづけ引ひえらへしところ。離な衣ぎめが懐なつかより取と落おした此一いつ通と。その状さまを引ひ合あせて御ご覽らんあれと。差さ出しせば。手ても取と。上う。一いつと目め見るより。これこれの同どう筆ひつ。禁きん制せいの不ふ義ぎをひらぐといひ。大だいそれた刀やいばの盜たう賊ぞく。ソレ角かく太郎たろうめに繩なわぶち。揚あ問もんせよの下した知ちより早はやく。小こ見み山さん庭ていに飛とべあり。サア角かく太郎たろう版ばんを廻まわせと尋たずねれば。離な衣ぎ悲かなしきあしへだて。マアく待まちて下したりませ。角かく太郎たろう襟えりに科かはあ。私わたくしの文ぶんが有あたから。盗ぬすみ人は此こゝひな衣ぎ。縛しばりてなりと責せなどして。角かく太郎たろう様さまはゆるしてたべ。お慈あはれと手てを合あせ。泪なみだとともともに詫わげれば。ヤアならぬ事こと。女おんなのさし出しる所ところでな。い。退のておらふと。又また立たか。るを一いつ問もんより。イヤ刀やいばの盜たう賊ぞくの外ほかは有あり。扣ひへられよと聲こゑ打うかけ。しづく。出いる藍あ原はら種たねのり。馬ま加か大だい記きひざ立たて直ちし。ヤア藍あ原はら。寶たから藏くらの鍵かぎ預より。其その方かた。刀やいば筋すぢ失し致ぢしたれば。其その方かたも罪ととののがれぬ。夫おつとに何なにぞや落お付づ飾かざり。刀やいばの盜たう賊ぞくが外ほかは有あり。何なにぞ儲たくわえ証あかし據しよが有あり。ハテ証あかし據しよなふて申まをそふや。夜よ前まへ寶たから藏くらの四よ方かたを見み廻めぐる所ところ。おち散ち有ありし此こゝ一通と。取と出しておしひら。コト見みられよ馬ま加か氏ぢ。小こ笹さ丸まるを奪うばひ取と。この証あかし書しよを入いれ置おけよと。頼たのみ遣はす此こゝ文ぶん言ごん。當あた名なの。並な四よ郎らう殿でんへと計はか。先ま知ちより立た聞きすれば。箱はこに入いれたる状さまをも見みず。離な衣ぎが証あかし書しよを差さ出しし。同どう筆ひつならんと競くらべさせし。一いつ藤ふじ太たが詞ことばといひ。此こゝ証あかし書しよを持もて詮せんせは。とこへとばしりか。らふやらしれ申まをさぬ。、左ひだりはと刀やいばの紛まじれをしりながら。明あ箱はこを主しゆ人にんへ突つ付け。御ご使し者しやの前まへにて赤あか恥ぢか。せし。所ところ存ぞんはいかに。サとくより言こと上じやうせんは。安やすけれ共ども。わざと明あ箱はこを差さ出しせしは。詮せん義ぎの手て際わきを見みせん。、面おも白しろい。見み事ことその方かたが紛まじれ失しの刀やいば。只ただ今いま詮せん義ぎするじやまで。おんでもない事こと。夫おつとで見み物ものしめされと。言ことつ。差さ添そぬき取とつて。ハア我われ君きみ。お家いへの重おも寶たから小こ笹さ丸まる。イヤ御ご内うち見み下くだされふと。いふに不ふ審しんと頼たのみ頼たのみ手てとつて。鯉こい口くち四よ五ご寸すんとつくを見て。實まこと誠まことこれこそ紛まじれ方かたな。小こ笹さ丸まると。いふは。悔くわいり馬ま加か小こ見み山さん。顔かほ見み合あして詞ことばなく。手て持もて沙さ汰たにみへにけり。頼たのみ刀やいばを鞘かばに納いめ。此こゝ証あかし書しよを汝なんぢがさしそへに致いたせし。いかに成なり。と尋たずねられ。藍あ原はらはつと兩りゆう手てをつき此こゝ頃ときの人心にんしん。もし御ご寶たからを奪うば

取とらんと。ねらふ。族うぢあるまじきにあらす。夫おつと故こ箱はこに。尸し物ぶつを入いれ置おけ。誠まことの証あかしは某たれが。差さ添そぬき仕し込こ守しゆ護ご正せいる。それともしらす盗ぬすみとらせ。科かを余あま人にんにぬり付つくと。古ふる手てを巧たく。ハ、ハ、イヤこれは。尸し物ぶつ。まづ其その証あかし書しよを成な成せい公こうへ。差さ上うられて然しかるべし存ぞんじ奉ほうると。いふに頼たのみ頼たのみかんじ入いれ。山さんかしたり藍あ原はら。思おもひは追おての事こと。刀やいばをばらひ置おけにすへ。御ご聞きの通とり故こ障せうあつて思おもひぬ延のび引ひ。イヤ小こ笹さ丸まる御ご落お付づ下くだされふ。ハ、これハ御ご換か換か。藍あ原はらとやらが働はたらきに。寶たからの取とり。事こと相あ濟せい。祝いわ言ごんも存ぞんじする。此こゝ上うの兩りゆう家か水すい魚ぎよの因いんみ。か。る目め出でたき折せなれば。角かく太郎たろうとやらが罪とと科か。輕かろき取とり。はから願ねがはしう存ぞんじ。某たれは役やく目めすめば。ハ、退たい出しゆ。コト余あま性せい。何なになくとも能よ酒しゆ一いつ獻けん。アイヤ。大だい切きの品しなを預あづかり。長なが居いハ却かへて凶きん。然しからば。使し者しや御ご苦く勞らうと。互たがひの禮らい義ぎよし成なり。悠ゆう然ぜんとして歸かへらる。、跡あとに業わざ腹はらまぐばり大だい記き。何なにかあそばにあたり眼まなこ。此こゝ上うは不ふ義ぎの兩りゆう人にん。しはり首くびふち放はなせと。いふをみさへて藍あ原はら胤いんのり。イヤ兩りゆう人にんより。一いつ藤ふじ太た。その方かたから腕うでまはせといふは。悔くわいり。コトサ藍あ原はら氏ぢ。この一いつ藤ふじ太たには。なに科か有あり。ハ。アしれた事こと。不ふ義ぎの科か。是こゝの又またさまぐのたの言こと。此こゝ一いつ藤ふじ太たに不ふ義ぎの科かの。何なにを見み付つて何なにを証あかし據しよ。ア、証あかし據しよといふは。則すなはち是こゝ。以い前ぜんの一通と取とり。出でし離な衣ぎの君きみさままいる。こが。一いつ藤ふじ太たより。讀よみに仰おほ天てん取とり。手て首くびを掴つかみ頭あたま轉くる倒たふれ。たまりかねて常つね武ぶが刀やいば追お追お取とり。抜ぬか。る。その手てをみさへて。コトヤ何なにとめさる。イヤこれは。ア、ソレ。一いつ藤ふじ太た。身みが手てまかけて不ふ義ぎの成せい敗ぱい。ハ、ハ、イヤそれにも及びますまい。科か人にんの成せい敗ぱいは。それハ。役やく目めあり。家いへ老らう職しやくの刀やいば穢よごし。ハ、ハ、イヤ。しかし義ぎ成せい公こうの御ご詞ことばもあれば。お仕し置おけは。我われ君きみの御ご心こゝろまかせ。ハ、何なにから何なにまでぬけめ。あさ胤いんのり。和わ睦ぼくと。のひし悦よろこびにめんじ。死し罪ざい一いつ等どうをゆるし。角かく太郎たろう離な衣ぎ向むか人にんとも。屋や敷しきを追お放ほう申まを付づる。早はやく館たねを立た退たいよと。情なさけの詞ことばに兩りゆう人にん。かへす詞ことばも泣なばかり。君きみを拜まがり藍あ原はらを。ふし拜まがり手てにハ。ハ。ハ。なれし館たねの名な残のこの泪なみだ袖そでに。余あまりて身みも。しはれしは。と出いて行い。千ち葉はの介け壁かべ高たかく。ヤア。く者ものども。一いつ藤ふじ太たが大小

取あげ。門前より追はらへど。下知にぐんにやり果れ顔。エ、そんなら拙者も。いふにやおよぶ。外は詮義の筋も有。助がたき不忠者ながら。悦びにめんじておはらばらひ。早速立よの仰の下。よつてか、つて大小取。上げ。サア立ませいと。前竹に。叩き立られせひなくも。大記の顔を恨めしげに。見かへり。く立て行。頼胤かさねて。ヤアく藍原。兩家の和ばくど。のふ上。何ぞ高吉征伐の。下知くだらんも。量がたし。出陣の用意せよ。又山の内の落葉丸。けふより汝に預る間。油断なく守護いたせと。刀を取て指し給へば。藍原取って押いたゞき。某預り奉り指添にして身を放さず。守護仕らば石櫃に。入置よりも大丈夫。恐れながら御安堵あれ。まつたどくより合戦の。用意申付て候へば。何時にても御出馬あれと。君臣心あひ原が。油断をねらふ忍びの曲者。ねらひの筒先小柄の手裡剣。忽ち命の並四郎とつさり落命馬加が。又ぬさかくるをどゞむる藍原。頼胤扇打ひらさき。出かした見事。ンア

第八回 杉戸松原のだん

戀をする身の相の鳥。かはしくに。袖しほる。シヨンガへ。愛もりや。杉戸の里の村はづれ。いくもと續く並松原往來の。人の其中にわきて。目にたつ二人連。途中の病氣ださか。へよふく。茶店にたどり付。無心ながら急病のおこりし者。水一口を乞ければ。お安い事と返て出す。茶碗をとつて。イヤソ離夜。思ひがけあひ互の身の上。心道ひで癪もおこる等。幸いわが生れだちより。守りよする名玉あり。是迄わが病氣の時。水にしづめ其水をのむやいな。忽ち直るふしきの靈驗。そなたも試にのんで見やと。守り袋の玉とり出し。水よ沈めてす。むれは。ア、嬉しうござんす角太郎様。數ならぬ身はいとね共。私故におまへ迄勘當を請さしたは。みんな此身の徒ど。思ふ案しの此つかへ。堪忍して下さんせと。どどく。悔めば。ハテモツかふるは互の身から出たさび

。今更悔んてかへらぬ事。一とまづ故郷赤岩へ立歸り。となたの親兵六殿の方へおち付。父一角殿へ託言をしてもらひ。時節を待て歸參を願はん。くよ。案じすと。早ふ此水を呑みやいのふと。手を持へてそ、さ込。いかゞはしけん思はずも。玉もろとにも吞下し。ア、ひよん事。今の玉を呑てしまふたわいなと。いふに驚く角太郎ヤ、スリヤ大切な玉を呑だかサイナア香氣でいなかつたに水と一所に。ヤアく。こは何とせんぞふせふと。二人は貞を見合して暫し。あされて居たりしが。ア、儘よ。腹の中へ入れた物。とこぞでは出よそのうち。そふして氣分はどふじや。アイとんと痛は治つたわいな。ア、それは重疊。然らばかふしても居れまい。日のたけぬ中サアおじやと。まだ妻若さ初女夫。水の出花のふもしろさかり。手を引池て立歸る。折しもさらめく鎗印の馬加大記常武とて。千葉の權威は鼻高々。松影に立とまり。コリヤでく平。身は此所にて待合す者あれば。其方のは先なる。村口にて待合せよ早くにでく平。かして急ぎ行。大記のたりを見廻して。袖より出す呼子の笛。松影より一藤太。窺ひ出て常武との。シイ聲が高い。せつかく仕組だもくろみ。藍原めに見顯のされ。御邊までがその成行。とかく大望の妨げの藍原胤度。此所待合せし。コレこの鎗を持て只一と突。必らず油断召る。あど。渡せば受取。なる程く。遣恨かさある藍原め。太腹くつしやり欺すに手なし。ア、必らずぬかる。奴が差ぞへの落葉丸。奪ひとつてひそかに身が屋敷へ來られよ。ア、合点。かならず吉左右相待。と。しめし合して兩人は。左右へこそは別れ行。諺の。花の櫻木武士の家の行儀のおとなしく。藍原胤度が一子夢之助。氏神参りの辰足。こなたの道より。女子連。親子と見へて面さしむ。人にすぐれし器量よし。いたと行合顔見合。ヤアお前は夢之助様。アそふいふは紀の降殿。是の久しやあめづらしやと。三人床几に腰打かけ。夢之助は詞を改め。アア紀の路迄の。先達て酌のあつた。父の種の子と。アア子の事と。さるかと。尋ねに紀の路顔赤らめ。お尋ね

にわづかるも恥かしい事ながら。旦那様の御種をやとし。古郷犬坂へ歸り。産落したは十三年前。その、ちお屋敷へ参り。御噂の申せしが。奥さまへの御遠慮にけふ迄の。エ、述ても参らざりしよ。アノ浅毛野が成人するにつけ。と、さまの御顔が見たいと。明ても暮てもせかみませ故。せふ事なしに述て参りました。お前様の御目にかゝるは。氏神さまの引合せ。とふぞ旦那さま奥様へ。お取寄しを。と手をついて。頼めば俱に浅毛野も。そんならお前が兄さまか。おなつかしうござります。年月がこれし父上の。御顔が一目拜みたま。尋ねて参りし心の内。御推量をとばかりにて。涙さし涙親と子が。訴訟にこなたも。泪もろく。夫にこそ何の遠慮。父母どもに折みしけ。こなた衆親子の事を。いひ出しての御案じ。爰であふたは。縁。おがためにも眞實の妹。これより直に同道せん。そんなら何角よ。いふに。お頼み申と親と子は。いそぐ打連立歸る。早くれやすき。秋の日の入相つくるかねの聲。音もかふく。と物す。いとゞ哀れを添にける。千葉の忠臣藍原胤度。下城をいそぐ駕乗物。松原まさしか。り。暫しと駕を立させて。イヤコリヤ銀平。大切の昔物を詰所。忘れ置たり。引返して取て参れ。早くくに銀平の。畏まつた。と一さん。に。もと来し道へ引返す。これぞ三世の別れとは。後にぞ思ひしられたり。乗物やれと胤のりが。下知に下。かき上る。後の木陰に乘てより。鏡ひよつたる一藤太。こふしを堅め突込鎗さき。ソリヤ曲者よのがす。と。口は達者に足ひよろ。我もく。と述て行。乗物の戸を踏ひら。刀を杖に藍胤のり。ヤ何やつなれば名のりもせず。だまし討とは比興至極と。いりせも。と笑ひ。小見山一藤太様だ。重々かさなる恨みの鎗さき。心魂に答へたか。無念の齒がみ。を。扱へ國賊一藤太。で有しよ。恨みの一と太刀請け取。と。よろはびながら立上り。切込腕首しつかと握り。ヤ極にも立ぬはて。んでう。うぬをばらすは。けふの意趣ばかりじやない。路葉丸を奪ひ取。千葉山の内を不札にさせ。鎌倉の谷め

を請させ。兩家を亡す。こんたん。何とよふした細工であらふがな。ア、ソリヤ馬加常武と同意し。主家押領の巧みよ。斯と夢にもしるならば。逆賊常武はじめ。汝を討て捨んもの。よくも運に尽しかと。無念の齒がみ。わき出る。血汐に道も秋くさ。紅ひ。染るばかり也。一藤太ハ舌なめすり。ラ、もつと悔め。うぬが妻子も跡か。らやる。劔の山を待てあよ。刀もさとり脊骨より。大地へ縫付手さし。を。しや。成生が夢の間の。五十一期の忠臣義士。草葉の露とぞ消にける。死骸を蹴かへし留めの刀。差添取て押いた。ハ、出世のたねの落葉丸。オ、忝いと腰にばつ込。欠出す向ふ燈灯の。火影に驚き小見山は。又も木陰に窺ひ居る。斯ともしらすい。させき。立歸つたる銀平。が。つまづく死骸を。得せと。火陰にすかし見て。悔り。ヤ、ソリヤお旦那。何者の此仕業と。仰天ながら抱か。へ。耳に口よせ。お旦那様いのみ。と。呼びこたへる胤のこたま。松吹ならすばかり也。エ、迎かりし死なしたり。今一と足早くば。此御最期はさせまいもの。口惜や残念やと。拳をにぎり齒をかみしめ。無念涙よ。くれるたる。後へぬさ足小見山が。物をもいはず切込刀。心得たりと身をかせせば。燈灯はつたりまつくらがり。曲者やらぬと銀平が。切込忠義の切先に。高股さられ小見山が。たじろく足元付込。銀平。こなたも早速の泥つみて。ためらふひまに小見山は。あをを。くらまし述て行

風寒み。離よつくる。菊さへも。おさまはせる。初霜と。見まがふ色や着せ綿に。花の齡の長かれと。つかすま。せ枝翁。かれ葉の虫をとりく。に。相原胤度が留主の宿。妻の稻木は召つかふ。女相手に花の世話。うさ忘れ。とぞ見へにけり。女も口々に。イヤ申奥様。大方虫もどり。枯た葉も見しりました。ハ、ちつと休みなされませと。いふに稻木は手をどめ。チ、こなた衆の手傳。と思ひの外は。かいた。夫と胤度殿の。當番の御前勤。夢

花魁八巻

之助の氏神へ参詣。その留主の間に掃除して置く。我夫の御心を慰めんため。とふで下りは夜よ入ふ。さゝの用意もして有かや。ハイ御酒も氣を付。お肴も料理人に申付ましたれば。何とさお下り遊ばして。お氣遣はござりませぬと。咄し半ばの折こそあれ。風も吹ぬに花壇の菊。皆とくく折ければ。あれよくと女も。驚く中に稻木は取分。ハア心得ぬアノ菊が。残らず折しのコハいかにと。主従顔を見合して。暫しおされて居る處へ。立歸る夢之助。世の前よ手をつかへ。母さま只今歸りました。賑御待かねにござりませう。夢之助は。つたか。何やらかやら咄す事。サア〜われ〜と親と子の。座敷へこそは打通る。母の我子の姿を見て。コノ夢之助。おがみの鬚は。あせ元結が切れて有と。世の詞に夢之助。頭へ手を上げ不審顔。物にもさのらぬ元結ひの。何故切しぞ心得ずと。いふ内花だんに屹と目を付。申母様。アノ菊が折りました。さればいのみ。掃除を仕廻手を放せば。風も吹ぬにアノ通り。残らず折し菊の花。とふが斯かと氣が。りに。思ふ夫先にわがみの元結。一度ならず二度ならず。不思議かさなる此場の時宜。夢之助わがみの何と思やるぞ。怪を見て怪しまざれば。禍ひもなしとの本文。御花のものとより折安さるもの。又元結のはぢけるの珍らしからせ。母人さのみ御氣にはかけられますな。おまへ様よの取分悦ばせませす事がある。常々咄しの紀の路の。ふしぎにけふめぐり道。父のお胤の浅毛野と申。女の子にも名乗合。腹こそかはれわがいもふと。同道して歸りしと。いふは稻木は氣も紛れ。ア、夫よよふ進て戻りやつた。夫も常々その噂。早ふ逢たい顔が見たい。呼でたもれと機嫌よき。母の詞に氣も落付。次の間に打向ひ。紀の路の親子の衆。早くこれへの詞の下。ハイと返事もかい〜しく。娘を連れておづ〜と。紀の路のはるかに手をつかへ。コノ〜と。奥様お久しうせんじます。はんに何から申さふやう。積るお咄は山々ながら。ハイ〜御無事な御顔を見て。お嬉しう存じます。お分達ておよつと御噂申せし。旦那様のおたね

花魁八巻

とは。此子の事牛落して一年余り。親里にありましたれど。やふす有てその家を出。方々流弊の其中にも。とふと爺様は一度おめにかゝりたいと。此子の願ひに。おし付ながら進てまいりし折に。幸。夢之助様の御めにかゝり。お頼み申て参りました。なが〜の御無事なり。おゆるしをされて下りませと。いふに娘も手をついて。辭儀するばかり言の葉は。口にごもりておめかしイヤモふたりこのちも同じと折ふしは言出し。胸をして。ました。イヤ〜と。子に設さやつた。年々い〜と。尋ねられ。ハイと。しは十四名の浅げのと申す。此上なから御見知なされて下りませと。年よりませたわいさつと。育がらとて可愛し。主の戻りに間も有まら。歸られ次第引合ふ。モッ里〜とてはか〜しはせぬ私が娘にして。可愛がる。何はなくとも親子の盃。つめる咄し。奥でゆつ〜。ソノ女子も。盃の用意しや。アア皆奥へと打とけて。分福なき挨拶に。親子は嬉し〜と。〜と。氣は〜と。身を取て。おや〜と。奥の間へ。伴はれてぞ入にけり。始終表に親山伏。人なきひまを幸と。何か心に黙々。お〜と。して。お〜と。行。既其日も。入相の。遠寺の鐘のから〜と。おやさ。間の庭の。花だんの虫の。聲も胸に響し。愛思ひ。居所のあゆみの未より。此世をさるにせまりくる。重き思ひの若葉銀平しは〜として。下歸り。下部にかゝす乗物を。縁側にかき居させ。あたりを氣を付。道々もいふ通り。おれが。いさるを申上るま。必何にも沙汰は無用。サ、部や〜と。追立やう。音なはんに口一は。張裂胸も。板様よ。鐘を。おて。男をさし。詞は。おかりけり。斯とは誰が白紙の障子引明たち出る。稻木の火陰にすかし見て。そこにあるは銀平のいな。見れば夫の御乗物。お歸りなれば音なふり。またわが夫。お下りな。か。問の。つ〜。ハイイヤお下りな。お下りなれ。モ。思ひがけないイヤサ思ひ外御酒が。過てアノ乗物に。跡言。し。泪見せじ。と。喉し。はる。稻木の何の氣も付す。〜。いつに。酒が。す。て。お休とや

お風かなめしつらん。起ましてとたちよるを。銀平はて押隔。ア、モシめつそふなく。ヤモめつたにさめ
 るやうな事じやござりませぬ。ちつとの間など。あのまゝて置しやりませ。エ、何をいやるやら。此夜に駕の
 中で寐さ、られず物かしのう。コン、夢之助紀の路との。親子の衆。我夫の御歸りぞやと。いふに三人走り出
 最御下城なされしとや。ヤ、待かねしと立寄て。駕の戸明れば、コ、いかに。朱に染たる相原が。死がいを一目
 見るより。はつと計に親と子の。呆れはてたる計あり。稻木親子の銀平を。中に挟て膝突かけ。ヤ、銀平。我夫
 の何故此御最期。コ、親人の誰が手にかけた。泣て居る所でない。サ、譯をいへ。やうすいふしやと。三人よ。
 責立てられて銀平は。やうく涙の顔を。上、お腹立は。お道理だ。御尤で。ごりりますはいや。申上るもく
 面目ない事だが。今日旦那には御用多く。御下城の六ッ道。道をいそぎで杉戸の松原へか、りし所。南無三
 寶大切なる書物を。忘れた。引返して取来れと。仰を請て下郎めは。その書物をさがしどり。又引返し戻つて見
 れば。お旦那に。あの通り。その上、今日殿様より。お預け有し落葉丸の。春ひとつて立退しは。盜賊の
 業か但し又。意趣ある者のし。成かど。とつ、置つ思案の内。物を。いはず切込曲の。身を。かかせば。切りを
 切消。目ざすも。しれぬ。眞の。主人の。歎とぬき合し。借に。一太刀切付しと。思ふ目先へ泥礫。とかうする中口惜
 や。その。曲物を取。おがせし。此下郎めが。おひなさ。ア、どの。顔さげて。のめく。と。立歸らんやうも。直にそ
 の。場。で。腹。と。刀。手。は。か。け。た。れ。と。も。ア、イヤ。一日。御。死。骸。を。持。返。り。その。上。で。申。譯。に。腹。か。つ。さ。ば。く。迄。の。と
 ど。惜。し。か。ら。ぬ。命。を。存。命。立。歸。り。し。下。郎。が。心。コ、ヤ。コ。ン。く。御。推。量。下。さ。り。ま。せ。と。泪。を。が。ら。の。物。が。た。り。夢。の。助。は
 な。を。も。語。り。コ、リ。ヤ。その。方。が。言。譯。は。な。り。で。事。が。濟。ふ。と。思。ふ。か。い。や。シ。ミ。テ。その。場。に。これ。ぞ。と。い。ふ。證據。に。成。べ
 き。物。は。な。か。り。し。や。サ、ア。何。ぞ。歎。の。手。が。り。も。と。さ。ぐ。り。廻。せ。て。是。ぞ。と。い。ふ。證據。逆。も。は。り。ま。せ。ぬ。と。聞。て。四。人。の

親と子の。頼も綱も切果て。わつと一同。聲を上げ泣涕。こがれ歎きしが。稻木は。死かいに絶付。扱もくいと
 おしや。是と思へは。最前の。菊の折たも。元結の。切しも。夫婦親と子の。縁の。されめを。天道の。しらせで。有たか味
 さなや。神あらぬ身の。後ま。や。こん。を。事。と。露。し。らす。お。歸。り。あ。ら。ば。娘。は。逢。し。笑。ひ。が。は。を。見。ん。の。と。樂。し
 ひかひも。情。を。い。此。御。最。期。の。何。事。と。口。説。な。げ。け。ば。紀。の。路。は。お。は。正。体。泪。に。む。せ。か。へ。り。お。別。れ。申。て。十。三。年。長
 の。月。日。の。内。に。も。我。子。の。顔。み。せ。出。か。し。た。と。お。は。め。の。詞。を。聞。ふ。物。と。氣。を。は。る。く。と。尋。た。け。ふ。に。決。つ。て
 此。有。ま。ま。よ。く。薄。い。親。子。の。縁。魂。魄。此。家。に。ま。し。ま。は。た。つ。た。一。言。娘。か。と。お。詞。か。は。し。て。給。り。れ。と。か。へ。ら
 ぬ。事。を。か。ぞ。へ。立。口。説。た。つ。れ。ば。夢。の。助。歎。き。の。同。し。浅。毛。野。も。空。し。さ。か。ら。を。推。動。か。し。主。従。五。人。聲。立。て。一。同。よ
 わ。つ。と。取。亂。す。泪。々。の。村。時。雨。時。間。は。更。に。あ。か。り。け。り。や。有。て。銀。平。は。泣。目。を。拂。ひ。居。直。つ。て。既。よ。自。害。と。見。へ
 ければ。紀。の。路。の。聲。か。け。コ。ン。銀。平。腹。コ、リ。ヤ。ら。ろ。た。へ。て。か。血。迷。ふ。て。か。イヤ。サ。お。放。し。な。され。最。前。も。申。通。り。その。場
 て。切。べ。き。下。郎。が。お。ん。腹。期。を。延。せ。し。の。御。旦那。の。御。最。期。を。し。ら。せ。な。た。め。サ、ア。元。じ。や。く。さ。り。な。が。ら。今。こ。ゝ
 ん。が。腹。切。た。連。歎。きの。有。家。が。し。れる。で。い。な。し。今。死。る。命。を。な。が。ら。へ。夢。の。助。さ。ま。や。浅。毛。野。が。力。と。成。歎。を。尋。ね。本
 望。を。と。げ。さ。し。て。祖。忠。義。も。立。と。い。ふ。に。稻。木。も。諸。共。に。サ、さ。の。路。殿。の。詞。の。通。り。犬。死。する。が。忠。義。で。は。な。い。せ。か
 す。と。心。を。鎮。め。て。くれ。と。言。は。れ。て。死。ぬ。に。し。な。れ。も。せ。ず。差。う。つ。ひ。さ。し。折。こ。そ。わ。れ。御。上。使。の。御。入。り。と。呼。ぶ。る。聲
 に。驚。く。稻。木。コ、ン。火。急。の。御。上。使。は。定。め。て。御。上。の。御。檢。使。を。ら。ん。紀。の。路。と。の。親。子。共。見。付。ら。れ。ぬ。其。内。に。マ、ア。く
 奥。へ。と。稻。木。の。差。圖。せ。ひ。あ。く。く。も。投。く。び。し。二人。は。立。て。入。に。け。り。跡。に。は。死。が。い。を。取。替。ひ。待。間。は。お。お。く。入
 來。る。の。馬。加。大。記。が。女。房。戸。時。の。人。の。歎。き。も。自。糸。の。縫。の。撥。や。う。の。稽。さ。ば。さ。緩。思。ら。し。く。打。き。通。れ。ば。親。子。は。泪。お
 し。拭。ひ。上。座。に。か。し。つ。き。手。を。つか。へ。コ、ン。ハ。く。戸。時。さ。ま。御。上。使。の。御。役。目。御。く。ろ。う。に。存。じ。ま。す。と。い。ふ。に。戸。時

花魁 八巻 總

襟かき合せ。上使の役目よの義ならず。聞て藍原胤度殿。今宵下城の途中にて。何者ぞもしれず。聞討にあらはれしとの沙汰。武士に似合不覺の最期。夫は格別。たゞ大切な山の内家の重寶。落葉丸の名劔。殿より御預有つたれど。胤度殿死去の上は。若し、う有らばお家の大事。いそぎ請取たちかへれとの嚴命也。聞より親子主従。はつと計に當惑の。吐息をほつとつく計。戸蔭は色めみて取て。ユいなきどの。何をうつと。早ふ劔を出さつしやれぬか。サアその落葉丸の劔をやらも。ヤヤ、何がとふしてと。いはつしやる。コト稲木どの。此人わいの。泣てゐて濟か。ミチ夫かどふしました。サ何としました。とはれて今更返答も。道ぬる母にありかはり。サア其大切な劔の。父かさいとの其砌。かの曲者か奪取て。サアヤヤ。落葉丸まで紛失と。アモがおれ。これいふ。ア、御劔は。忝くも武將の嚴命によつて。千葉山の内家和睦のしるしとて。取替た大切の品。それを奪ひとられては。殿のお家の一大事。ア、大それた事じやぬ。ア、コト稲木が。一丁箇はあたのぬ。モシおちは丸に故障あらば。藍原が女房子を召連歸れとの御上意。則ち乗物も用意した。サア二人共御前て言譯さつしやれど。いりれて詮方難進。主命かへす詞なく。胸をいためるばかり也。一問の内に親と子が。あせる物音稲木の聲かけ。ア、コト悪。必出まいぞ。出まいと。目頭の仕かた。戸まきは聞てふしんが。は。ヤ。稲木殿。出まいと。とはソリヤ誰が事。イヤサ出まいと。申は。サ、それ。召遣の女どの。コ、ハ出てのどのやうな。身のなんざ。イヤサどのやうな。さうがあらふも知れぬ。によつて必出まいと。どを制する詞。一問の兩人。せひも泪の時しもわれ。打出す時計を戸蔭はかぞへ。ア、コトモ。夜半の時計。とき延るほど上への恐れ。ア、家來も。その乗物早々これへ。さしづの内に昇くる下部。親子のこれぞ獄卒の。冥途の迎ひ打しはれ。しはく下りて乗つれば。たまり兼ねて銀平かけより。戸蔭の裾を引とめ。申戸蔭さま大切なる

花魁 八巻 總

刀を。奪とられしは下。稲木が。あやまり。拙者めをお引なされ。御主人達は。情に。刀の詮義仕出すまで。何とぞ暫しの御用捨を。いふをすけなふ振拂ひ。エ、ならぬはやい。大それた科。一家のはし迄お着りは定の者。召つかひにお答りない。有がたふ思ひ。すつこんでぬや。エ、主が主なりや下部迄。ア、イヤまじくとしたかは。いの。コト、ハ、笑止やの。サ、ハ、ハ、二人の科がゆるしてはしくは。紛失した落葉丸。今夜中にたづね出して持ておじや。ア、何として。叶はぬ事。ヤ、家來も。乗物やりや。主の威をかるてつゝいおし。乗物ささへやりおどが。いふも。情に。さしづの内に昇くる下部。親子のこれぞ獄卒の。冥途の迎ひ打しはれ。しはく下りて乗つれば。たまり兼ねて銀平かけより。戸蔭の裾を引とめ。申戸蔭さま大切なる

刀を。奪とられしは下。稲木が。あやまり。拙者めをお引なされ。御主人達は。情に。刀の詮義仕出すまで。何とぞ暫しの御用捨を。いふをすけなふ振拂ひ。エ、ならぬはやい。大それた科。一家のはし迄お着りは定の者。召つかひにお答りない。有がたふ思ひ。すつこんでぬや。エ、主が主なりや下部迄。ア、イヤまじくとしたかは。いの。コト、ハ、笑止やの。サ、ハ、ハ、二人の科がゆるしてはしくは。紛失した落葉丸。今夜中にたづね出して持ておじや。ア、何として。叶はぬ事。ヤ、家來も。乗物やりや。主の威をかるてつゝいおし。乗物ささへやりおどが。いふも。情に。さしづの内に昇くる下部。親子のこれぞ獄卒の。冥途の迎ひ打しはれ。しはく下りて乗つれば。たまり兼ねて銀平かけより。戸蔭の裾を引とめ。申戸蔭さま大切なる

刀を。奪とられしは下。稲木が。あやまり。拙者めをお引なされ。御主人達は。情に。刀の詮義仕出すまで。何とぞ暫しの御用捨を。いふをすけなふ振拂ひ。エ、ならぬはやい。大それた科。一家のはし迄お着りは定の者。召つかひにお答りない。有がたふ思ひ。すつこんでぬや。エ、主が主なりや下部迄。ア、イヤまじくとしたかは。いの。コト、ハ、笑止やの。サ、ハ、ハ、二人の科がゆるしてはしくは。紛失した落葉丸。今夜中にたづね出して持ておじや。ア、何として。叶はぬ事。ヤ、家來も。乗物やりや。主の威をかるてつゝいおし。乗物ささへやりおどが。いふも。情に。さしづの内に昇くる下部。親子のこれぞ獄卒の。冥途の迎ひ打しはれ。しはく下りて乗つれば。たまり兼ねて銀平かけより。戸蔭の裾を引とめ。申戸蔭さま大切なる

花魁八巻

○應にがはと突立る。のふ何故の自害ぞと。取付浅毛野銀手も。いざさか、へて介抱に。手おひのくるしき息を
つぎ是が死すにぬられふかしのう。御慈悲深い願ひも。よもやお二人の命は氣づかひないと思ふたに。常武が
やしきへ引ての成敗と。しつたら此身も付添て。是非一旦の御前へと。いのちを捨てて守らるもの。今の悔んでか
へらぬ事。此上は片時も早ふ愛を立のき。刀の詮議して下され。足手まといの此世の。麻度さややお二人の。め
いどの御供をするわいの三人四人の歎討首尾よふ本意を遂てたも。そなたの生れたそのとに。不思議とひ
ろふた守りの玉。智の字しるせし心はしらぬ。其文字を忘れぬやう。智恵才覚が肝心ぞや。常々おしへた舞の
一手を。世をわたるたつきとし。白拍子と身をやつすも。歌に近よる手段ぞや。とはいふ者の浅ましや。こんな後
に立入連。おしへて置かせぬ物を。藝が其身を助くるは。ほんにそなたの不仕合せ。可愛の子やと引寄て。歌け
ばとみにむせかへり。けふはいかなる悪日ぞ。父母といひ奥さま兄うへ。三人四人が一日に。刃のつゆと消殘
る。此身のいかなる因果者。神も佛もない世かと。返らぬ事を。くどきたて。三人手に手を取かはし。一同にわつ
と聲立て泪の雨やさみだれに澤の。眞狐も水越てあやめ。わかあき如くなり。かゝる處へ奴のてく平。物かげよ
りあらわれ出。開た〜かふいふ事もあらふかと。忍んで襟子をうかゞふ所。藍原が血筋の女郎。此むね主人へ
注進と。いふより早くかけ出すを。あはやと驚くその内へ飛くる手裡銀てく平の。其ま、庭に倒れ伏。コ、何人
の助ぞと。見やる一と間に聲高く。ヤア〜旁。必驚く事あかれ。天崎照文。對面せんと。いひつ、障子引明れば。
内に立たる以前の山伏。兜巾鈴かけ殊勝げに悠々然たるその有さま。ホ、ウかたぐいの不審もつとも。我は元里
見の臣下。天崎十郎と名乗者。主命により。東八ヶ國を遍歴するは玉を所持する者を尋んため。然るに夜前伏姫
君の夢の告。藍原がわすれがたみ。智の字の玉を所持する者有らばつねて對面せよと有。正しき靈夢の告

花魁八巻

により、先刻此家へしのび入り。始終のやうすをうかゞふ所果して浅毛野とやらんが。智の字の玉を所持するは。
里見殿も仕へ奉るべきるん縁あり。只惜べきは藍原夫婦親子の最期。これ皆常武と一藤本か所爲なる事。鏡に
かけて明か也術をめぐらし常武に近付。紛失の刀を奪返し。不俱戴天の仇討せよ。イヤ出立の儀別せんと。懐中
より金包み取出し。これ社義成公より。賜。イヤ有がたぐ頂戴し。路頭にせよと差出せば。浅毛野とつておしいた
いさ。ハ、有がたぐ御思ひ女でこそあれ重る恨。常武一藤本を始として。歌の餘類一々に。討留いておかふか
と。怒りを含む柳の眉。かかは照葉のうすもみぢ。露や泪や。のら〜と。一世の別れは親子の名残手負は今の
の聲を上。有がたや添あや。此上あがら照文さま。とが子の身の上、頼み上ります。ノ、浅毛野。必とみに冥
途から。本望どげるを待ます。いひ置くと。是ばかり。いづれもさらば。〜の息の下。劍をぬけばあへなく
も。花の香残るうばざくら。無常の。風に散にけり。わつとばかりに浅毛野か。空しき骸に取付て。泣音血を吐く
はと、さす。心を察し平。泪ならがの稱念念佛。彌陀の御國へ。導の光に影みへて。無明の闇も。照文
が。諫めつけます門出の。是非も。なく〜たち出る身をしる雨やふりそでの。袂。つゆけさ明ばの、空も横
雲引わかれ。こゝろ〜よ。出て行。

第九回 庚申山

七十九
春みし。花の都の雲かすみ。立や日數も。移りきて。早夏。すぐる秋のそら。雲のけしきもすさまじき。下野國
安蘇郡。庚申山と聞へしは。近國無双の高山にて。空より落る瀧津浪。巖よひせふ。水の音。さく人肝を寒がらせ
。生重ありし古木の杉日かげもらねばふもとさへ。晝猶くらさこの下やみ。いと物凄と難所なり。爰は犬川龍藏
の。信乃が行衛を導んと。此山道に踏進ひそこもしらす日をくらし。人家や有と行先の。火かげ目當に立さど

まり。なふく此内へ物申さん。山路に迷ひし旅の者。一夜の宿を御無心と。音なふ聲に岩屋より。主と思しく歩み出。いと安き事ながら。八里と遠き山中なれば。とめ申べき便なし。此坂道を左へどり。一里ばかり下り給へり。麓村とて人と里ある。夫へ行て泊り給へ。此邊は妖怪有て。人を此こく敷しらす。更ぬ先に一と足も早く下り給へかしと。念頃に語るにぞ。額藏の打らひ。これまで普く。深山魔所を股にかけしが。終に妖怪に逢ぬが恨み。幸ひ此山に妖怪かあらば。猶山深く分入て。切て捨るも咄しのたねと。行んとするを呼とめ。ア、コレくたどへ。武術にたけ給ふとも。飛行自在の妖怪なれば。太刀にてはかなひがたし。幸これに弓矢あり。これを以て稍に忍び。頼て妖怪の来るを待ち。眼を一矢に射貫給へ。言つ、弓矢さし出せば。額藏とつて一禮し。コ、有難き御芳。非斯情あるそこもとは。いかなる人と尋れば。主は吐息し打しはれ。ア、恥かしや。今は何をかつ、むべき。われ、賊の世にあき者。泪の種の物語。一と通り聞てたべ。某元、赤岩一角とて。武術の指南もせし者なるが。藝にはこりて人も通ぬ。此庚申山へ分入しに。俄に山鳴震動して。妖怪山嶺現れ出。我をめがけ飛か、るを。抜合して二打三打た、かふ内。吹來る魔風に働さ得ず。終に空しく成たれど。最期の一念、宙宇にさまよひ。無念の月日を送りしぞや。然るに山猫。我衣服大小まで剃どり。某が姿と變じ家に歸るを。知者なく。妻も程なく世を去て。舟虫といふ女を本妻に引上り。仲角太郎女房も。離れさせ。兩人とみに皆せん巧み。玉がへしの里へ尋行。角太郎と心をあひせ。何卒敵を討てたべ。此短刀の家。此彌助の我白骨。此二品を我子に渡し。無念の最期を告てたべ。又國一角を顯はすに。角太郎が血汐を。此白骨にそ、がせ給へ。早妖怪の出來るじふん。かまへて油断し給ふな。さらばといふよとみへけるが。ばつと立たる陰火と俱に。かき消。ごとく成にけり。額藏二品手に取上。さては赤岩一角が亡。我に仇討を頼まんため。假に姿を顯のせしよ。よし。その妖怪

とやら。山猫とやら。一と矢の下に射落しくれんと。一と人。黙き見廻すはどりに。生茂りたる古木の松。これ幸とよぢのぼり。弓矢をはげ息をつめ。窺ひ待こそ不敵なる。斯て次第に。更渡る。嶺の風の吹き。落て。木々の。梢はどろくく。谷の。霧にひき合。さる物すこ折こそあれ。岩の。岫道ふみ分させ。馬にのり來る赤岩一角。左右に眷族したがへて。のふく。と手づなをひかへ。ア、いかよ者共。我れ一角は化すまし。人間の。嬉樂を極る樂しさ。追つ。付世界を魔道となし。汝等にも人間の。眼あささせんが。何と味いか。ア、ハ、ハ、あらむしろし樂しやと。悦ふ。油断額藏が。切て放す。鎗箭に。左の眼の。ふかに射られ。さやつと一聲。眞逆さま。落ると見へしが。舞さがる。雲につ、まれ三人とも。形のみへす成にける。犬川梢を飛で。あり。覺の。矢ささ。體に手答へ。左の眼を。射抜しに。姿を消せし。いふといやつ。此上は。亡靈が。頼みにまかせ玉がへしの。庵室へ。尋行。角太郎に。對面し。所存を。語り山猫の。正躰。し退治せんと。たやまぬ。勇士の。力あし。ふもとを。さしてぞ。

其 一 玉返し庵室

いそぎ行く。山影門に入ておせせも出ず。月光地に。しいて。拂とも又生ず。庭の。葎も。露深き。其の。水の音を。らで。問人もなき。柴の。戸や。結ぶかひなき。草の。庵。こ、に。籠つ。住人の。犬村角太郎。正禮。主君の。勘氣。うけしより。父母にさへ。捨られて。二世の。妻にも。引別れ。世を。あぢさなく。思ひ。捨。うしや。有。髪。の。僧。の。行。殊。勝。にも。又。哀。れ。也。黒。主。が。歌。の。姿。や。深。山。木。に。咲。た。櫻。の。返。り。花。心。有。げ。に。折。を。へ。て。持。も。ど。りの。兵。六。が。門。口。より。か。ん。ば。り。聲。角。太。郎。様。か。は。る。事。は。ご。さ。り。ま。せ。ぬ。か。と。い。ひ。つ。は。つ。れば。ア、兵六の。此。頃。は。久。し。ふ。で。さ。る。折。ふ。し。問。て。下。さ。る。時。も。行。す。間。は。物。も。は。は。れ。ず。ふ。し。つ。け。を。氣。に。も。さ。へ。す。よ。ふ。所。尋。て。下。さ。つ。た。と。い。ふ。に。兵。六。荷。を。お。ろ。し。ア、扱。マ、い。お。前。の。ま。た。お。若。い。に。お。い。と。し。や。一。角。様。や。ア、ま、母。の。に。惜。れ。此。庵。に。坊。主。ぐ。ら。し。し。か。も。無。の。行。と

やうに、世が世ならぬ岩の若旦那と。人に人もつかふ身が。さぞ御不自由にござりませう。夫も付ていぢらし
 いの娘の雛衣、千葉の御家へ感奉公。おんてかなお前とあじみ。女房になるはわいつが仕合。殊に懐胎のと。
 ぞふぞ早う初孫の顔見よと。樂しんたかひもない。アノ鬼は、の船出どのが。女夫中を引分けて。こちへもどし。
 まだその上に小言の八百。可愛や娘はお前の事を戀てがれ。明てもくれても泣てはつかり。あげくの果は首
 く、るはのイヤ身を投るのと。ひよつと又ひよんを事仕出しのせぬかと。おれが案しいかばかり。推量してと
 跡言さし。こぼす泪の露しぐれ。縁の袖やしげるらん。思ひは同じ角太郎。暫し詞もなかりしが。泪隠して。ッ、
 その悔みは理りさりながら。何事も定まる因縁。今更あげくの愚痴のいたり。雛衣にもよふ言聞し。暗内の子を
 闇から闇へ。迷はさぬやう教訓のれ。はや勤行の時來れり。いざや勤にか、らんと。經机引すれば。兵六も泪
 を拭ひ。イヤいかさま悟つて見ればそんな物。早ふいで雛衣に。短氣出さぬやういひ聞ませふ。イヤはんよと
 んと忘れた。今川で折てきた此櫻。時あらぬ返り咲き。春ささよりも珍らしい。佛さまへ手回て下されと。差出せ
 ば押いたさ。是は何よりヨイ山土座。よしやたぶさにけがるとも。三世の佛の手回草と。言つ、花瓶へ投られ
 の。手品にふりぞまざりける。兵六の立上り。ヤ思はせ長咄し。ドイヤおいとまを申そふと。いひ之になひとつか
 へと。我家へこそ歸りける。跡打見やり角太郎。心ばそくも柴の戸に。鏝かけて壁に直り。くゆらす香の煙
 さへもつる、心取直す。りんはならせと一心よ。維摩を學ぶ無言の行。勤にか、る折こそあれ。尖たけ心も額
 藏が。さがしわたりし庵室は。爰ぞまさしく犬村が。住家と察し戸を叩き。犬村角太郎殿のあんじつは是成や
 。犬川頼藏と申す。直談に申入度。しさいわつて参りたり。御對面下されよと。呼ぶも答ぬ無言の行。門より頼藏
 さしのぞき。扱は勤の。幼と。心を察しかたへなる積毅のかけに身を忍ひ。心長くぞ待るたり。秋の日の空の

花魁八蒼總

暗てもはれやらぬ。泪の雨に袖ひぢて。涙しはる、雛衣が。思ひは重き身のうさを。心ひとつにあげさる。親
 の家を忍ひ出。よふく庵へたどり來て。柴の扉に聲をよせ。角太郎様ちよつと爰を明てたべ。飽むわかれ
 るせぬ中を。姑御の嗣欲な。無實の罪を言かけて。さられた私が身の悲しさ。思ふ夫に引わかれ。何とながらへ
 られふぞ。いつそ此身を水の泡と。思ひ切ての死期。此世の名残によろく。お顔が見たさよ抜て來た。
 明てくと叩き。縁にひしと取付て。こへをはかりに敷きし。傍で。見るめも哀也。角太郎は妻の歎き。不便
 と思へ勤行の。佛の誓やふらしと。泪を咽にせきとめて。一心不亂他念なき。しらへなければと泣き。エ
 、余りじや嗣欲じや。たどへ無言の行にせよ。二世とかはした女房が。今はの際にたゞ一言。詞かはして下さ
 んして。まんざら罰もあたるまひ。心強やとかきく。又さめく。歎きしが。漸に泪を押へ。木練也歎
 くまひ。逆もせはれぬ此身の因果。死て未來の契りを待ます。し、この跡で一べんの。回向をたのむ角太郎様。
 名残をしやさらばやと。口にいつへ心よは。もしやと迷ふ後髪。ひかる、りんを。鈴の音も。拳ふるうて亂る
 、思ひ。喉しばつたるせつあさを。いふにいはれぬ無言の行。妻は今更せん方も。あくく。立や秋霧の。消て行
 身と打しはれ。川邊をさしてたどり行。しゅう聞る額藏の。木かけを立出打見やり今の女が詞のはし。身を
 投るは必定。イヤとめんとかけ行を。ヤア犬川氏。犬村角太郎勤行たい今おいつたり。先刻よりの無禮を赦
 し。イヤ〜是へお通りと。呼入られて是非なくも。然らば御免と内に入。角太郎に打向ひ。いまだ初對面とは
 申ながら。ちと仔細りつて此いはりへ。尋來りし様子に追つて。先さし留つて御内證の。身を殺んどの今の一言。
 どぐめんと思ふ某を。呼留られし心はいかに。ホ、其御不審は御尤。われく夫婦。身に過ちのあけれども。繼母
 の穢にて女房をさり。此身迎もかん當の日かけ住。世をわぢさなく思ひすて。維摩を學ぶ無言の行。女が心は

不便ながらの振りをやぶるの佛へ恐れ。生るも死るも皆いんゑん。更にどんぢやくは仕らぬ。併貴殿には何ゆへに。此庵室へは來られしぞ。サレバサちと密々申談する仔細有て奉りしが。貴殿父の一角殿に今朝より對面有しか。イヤかん當りけし其日より。此草庵にこもりぬれば。かつて父への對面いたさず。もとより近頃老にひがみ。昔にかはる父の難面さ。とにも角にも生甲斐なき。此身の不運さ。推量あれと計にて。世を恨たる。悔み言。類藏も察しやり。俱に泪を催せしが。ホ、その悔道理至極。これこれより御親父に對面し。不興を申なだめてのち。このの機密かたり申さんと。座を立上るをおしとめ。ア、イヤ御深切の忝なけれ。只今も申ぞとく。昔よかはる父がかたくな。繼母船出門弟も。能をねたむ小人ばかり。出て御邊の命あやうし。君子はあやふさに近よらずとやら。同じく御無川。成程その其御教訓尤ながら。一角殿に對面の上。試し見るべき仔細もあり。たゞへ奸計を構ゆるとも。これ又機を見て變に應じ。劍の中をも無事に歸らん。ヤコレ氣遣ひ有るも類藏が。勇氣の詞に角太郎。然らば隨分ぬからぬ様。合点く。と古草鞋。目もくれ前や入相の。かねて聞たる一角か。善惡邪正糾さんと。赤岩「さしてぞ急ぎ行。跡打見やり暗やらぬ。胸に思ひの有明行燈。つけ木にうつす燈火も。すさまのかせにまた、さて。いとゞさびしき庵の外。櫛出し帽子前帯の折。目高なる屋敷風。ふけても。秋の奥うらひ。赤岩一角が妻船虫。乗物つらし門のくち。頼みませぬ。赤岩の奥さま。御入なりと。下部が案内。台点ゆかねと角太郎。いんぎんに出向。コレハ。母人様にはよふこそ御入來。イヤ先われへと請すれば。いつに替りてにこくと。さげんよげに座は直り。角太郎久しう逢ませぬ。替らぬ跡で。アアめでたい。物堅い一角迄の。不義して戻つた不所存と。離衣を離縁させ。そなたの勘當。中に立たわしが氣のどくさ。色々なだめて。とふやら斯やら此頃は。一角殿の心も和らぎ。勘當のわび聞入て。先離衣を呼戻して。角太郎が方へやり。

日を見て夫婦とも内へ引とらん。聞て積もさがつた嬉しさ。夫でけふ兵六殿の方へいたよア聞てたも。すつてのと嫁の離衣が。大川村へ身をなげふとするを見付。あまの命を取とめて。何かの標子を言聞し。すんぐに廻つて來ました。ホニ私が心づかひ。推量して下されと。母の慈愛に頭をさげ。コハ有難き母人の御情。勘當御免下されしと。何よりもつて身の大慶。しかし離衣が事。ちと存する仔細もござれば。今暫くといふを押し。オオそふでは有ふけれ。一角殿の差圖をもどくは不孝。殊に身持のア嫁女。身をなげふと迄仕やつたも。心はそなたよ添たい余り。何かは川へさらりと流し。改めて母が仲人。イヤ私に任せておきやと。いひつ、表に打向ひ。イヤ離衣こちへはいりや。オオ早ふくと。呼聲に。アアと答へて乗物の。戸を引明て立出る。身は重けれど足元も。手もかろくと。か、へ帯。むすむ。直せし妹肴中。いまさらはづか敷居さへ。高ふ思へと嬉しさに。いそぐとして内より。何と挨拶い、むしろ。塵をひねつて差うつむく。船虫は打は、あみ。ホ、あの子と。した事が初心らしい。何をもちく。角太郎も物いふてやりや。親子夫婦水いらす。コレ私の粹じやわいのふ。ホ、しかし久しう一ッにぬねば。あらたまるも道理。イヤコレ三助。そのつ、み持ておじやと。いふに下部が心得て。差出すろしき解はどき。小筒くみ重取出し。やめめぐらしの此内。酒の用意も有まいと。持て來た此小筒。にしめり私が手料理。サア離衣から吞でさしやと。二度縁を結こんぶ。あいかひいはふ車海老。初の子いもが干のはび。仲人役をしいたけや。仕方て濟す。三々九獻。サ、目出たふ祝言すみました。近所へ遠慮のいらぬ放れ家。色直しの勝手次第。仲人のよいかげんに。いんを主よも悦ばさふ。離衣さばや。そんならも御歸り遊ばすか。何からなにまでいかい御世話。ホ、アアア嬉しなふなかはわいの。ホ、イヤナニ角太郎。またあす逢ませぬ。是は早々の御歸り。何とぞ父へも万事よろしく。ア、そこに如才ない。随分女中よう仕や。ド

くお暇甲さふぎ。心を跡に船虫は。駕にゆられて立歸る。あどに二人はさしひかひ。角太地の物をぬいひ。お何か思案に打かたむく。夫の顔を打なかめ。イヤ申角太郎様。最前までいしぬる氣で。嗣欲な姑御と。有よふは恨んでゐました。親の御蔭で二度の縁。むすぶの神のひかへ。綱互の心打とけて。つもる咄しめせふものと。楽しんで来た女房に。詞かはさぬと欲り。日蔭の里に。咲く花の色香に染るうつり氣か。聞へませぬとばかりにて。こぼす泪は秋雨の。晴れ間は。さらになかりけり。角太郎も心休を。察しながら詞をあらため。ヤア親のかんごう開しより。悟りの窓に眼をさらし。勤行他事なき某に。かくし妻なんぞ、何のたわ言。義理の母をうたがふにはあらねども。日比つれなき船虫の。手のうらかへすけふの時宜。ににかにかん當の詫をなし。おしつけわざの。盃も。一畚ん胸中よめがたしと。言つ、立って佛前に。手回し一枝手にとつて。此花を見よ。今秋の末となつて。とさを忘れし櫻花。いろかも薄さかへり咲の。たまされて咲ひろさ同然。まつその如くその方も。女心の淺はかよ。とさならずかへりし。何とも分らぬ母の仲人、やはり親元兵六が方へ歸り。とせつ來つて咲く花の。春をまつがその身のためと。花のたどへの色も香も。深き詞に離衣が。取ていらへもなみだぐみ。花打まもりぬたりしが。折しも表さわがしく。戸を打た、さ下部が聲。申く若旦那。親だんな様にはかの御病氣。駕で迎ふて戻れど。船虫さまのいらだち。ちやつとおのりなされませと。いふに驚き。何親人への。病とを何よりも氣づかりし。イヤニ女房。しばらく留主して相待よ。變わらば跡よりしらせん。心もせけばといふ中も。早ふくく角太郎。心ならずも乗うつる。その間違しと下部をも道を早めていそぎ行。夜も早。ふけて深々と。遠寺のかねの物すごく。離衣の只うつとりと。しばし詞もなかりしが。以前の一枝手に取上げ。折かく此家へかへら咲の。花によそへし夫の詞。心の解ても今更に。と。さんの内へも遊れず。ハテとふがなと打傾き。思案の内

花魁茗八總

花魁茗八總

にはらくと。おち散る花よさつと目を付。ハテ心得ぬ。風も吹ぬに此花の。死らす散たも氣か、りと。怪しみながら振返る。後の襟引。明て。すつと出たる船虫が。すがたに拘り。剛の誰ぞいのふ。イヤ誰でもない船虫じやわいのふ。エ、あなたはマアいつの間に。チ、おどろき。尤。表ぐちからしのんで来たは。角太郎が戻らぬ先。ちつとそなたにむしんが有て。何と聞てたもるか。ラ、ノ母さまの改まつた御詞。御蔭で死るいのちをながら。二度夫にそふ事も。みんなお前のお蔭ゆへ。せめてもの御恩はうじ。身になふた事あらば。どのやふな頼みでも。聞てたもるか。アイ、チ、あのまお孝行な事いのふ。ホ、イヤノわが夫。お聞あそばしたか。チ、聞たくと。赤岩一角。一問より立き出れば。船虫は門の戸も。かけがね掛て座にかへる。離衣ふしぎと手をつかへ。コンハク。身御様。御病氣と聞き。いかぐと察じておりましたに。御機嫌のよい其お顔。とふした事と尋れば。一角詞あらためて。イヤノッよめ女。いまその方がゆつた通り。たとへいがある頼みでも。聞入てくれるじやまで。チ、もつたいあいつ何のいつわりを申ませう。シテそのお頼とへ。ラ、頼みといふは別義ならず。先夜遊藝のかへるさ。はからず左の目に筋疵をかうふり。何はどの事あらんと。その儘にうちすてしに。しきりにいたみ堪がたく。醫師を招き見せし處。此ま、おかばいのちあやふし。急ぎ孕み子の生肝を取。また、びよ合し用ひよ。即座に平愈すべしとの詞。去よよつて近頃無理なる所望なれども。其方の胎内なる孕み子が貰ひたいと。聞て拘り。エ、そんならアノお頼みと。此おあかの。ハ、ハ、はつと計に悲さ剛さ。身をださしめてみるひある。船虫は聲ふりたて。死る命を助けられた恩が。へし。たとへどのやうの頼みでも。聞ませうといふたじやないか。サア外の事ならどのやうのお頼みでも。何のいやと申ませう。腹のかり物主の席。是ばかりわたしがま、にもありませんぬ。夫にもしひ聞して。言つ、立を引戻し。イヤノッやありませぬ。剪の薪。おやのくすりにあるは孝行ヲヒ

「よい子じや。得心して應じや。夫じやといふてこれがまわ。何と得心しられんぞ。とふぞおじひもコレ申。おゆるしなされて下さりませ。イヤならぬ。おがいたうさいやうよ。ツイ一おもひに斷つてやる。ちつこの間の幸抱じや。賢い子じや。ホ、ホ、ホ、とろく」と料理にからみど。いひつ、上着おしぬいで。兼て用達の玉だすき。こらへかねて遊行を引戻して聲あらしげ。イヤ親の薬にまつて死ぬりや。あのれも餓鬼もどるふは波のぬ。小言はかすどくたばれど。白眼まなこ。夜亦魔王。身もふるはれて難儀が。イヤ、まつて下さりませ。よくく、深いゑんあればこそ。折角おなかにやどつた此子。おまへがたのためにも初孫。目の目も見えず。聞からやみ。迷と思もや。ソレ、悲しい。神佛のお力で。首尾よふ座て我夫よ。はめられうと今までも。樂んでぬた物を。何に藥になればとて。殺さふとは情ない。お願欲でござんすわいな。ヨ、ヨ、ヨ、川男御様。堪忍して下されませ。お惜おじひと手を合せ。あなたを拜み。おたを拜み。泪のかぎり泣つくし。とふと。伏てぞ敷さける。強氣の一角空嘯さ。、森しいよまひ言。時刻うつるとせりければ。鬼につれそふ鬼神の船虫。観念せよと突かくる。のふ悲しやと逃出す。肩先くづと一刀。あつとばかりにかつりと伏。なをも付込する。とさ刃先のがれがたなく見へにけり。エ、聞譯ない人ぞなし。此やうに敷ても。とふでも殺す心じやのみ。此角太郎様は何してぞ。我夫のみとさけべども。こたへる物のあらし吹く。軒端の松の音計り。コッヤヤイ氣もせやくあやい。角太郎の駕にのせ。庚申山の谷底へ。捨されたれば今頃の。猪狼のゑじさ。逢たか冥途でゆるりとあへと。言つ、またも一刀。のた打まゐる黒かみを。片手からまさ一角が。膝に引付動かせず。早くくく船虫が。ありあしひらさ氷の刃。腹に突立一糸ぐり。さつとさ出る血汐と。も。飛出る玉に一角は。むないたうたれ。ンとばかりその儘。そこに仆れ。伏す。ヨ、ハ、ハ、ハ、いかにと船虫も。惘れ。果たる表。口。かけ戻つたる角太郎。戸を打叩き醒せはしく。難儀明よ

花魁 八 蒼 總

花魁 八 蒼 總 七百

戻りしと。呼はるこゑに又胸り。手早く行燈の火を吹き消し。奥をさしてぞにげ入たり。門にのぞめせはしなく。打叩けども音めせず。がてんゆかきと戸を蹴破り。はいれば内はまつくらがり。女房六く、難儀と。呼りながら困憊神のそば。何木よとむす行燈の火影。見れば女房の身。紅ひ。シヤヤ何者の仕業にて。むごたらしい此深手と。見返るかたへに父一角。仆伏たるその有さま。これのと計二度胸り。立ち寄れば落ちる玉。手に取上てきつと詠め。ム、コッヤコレ。先達て女房がのみ下せし秘藏の玉。何にもせよ仔細有んと。たへ入。妻を介抱し。有あふ水を吹かけて。コッヤ女房。難儀やいと。呼生られ。いさ吹返し。目をひらさ。ヤアわが夫かと計にて。又も絶へ入深手の弱り。コッヤ女房。苦しくともこたへて。仔細をかたれ。やうすの何と。夫の詞。難儀苦しき聲音にて。ア、角太郎様。遅かつた。く、わいな。アお前の留主に舅御夫婦。おもひがけあふお出わり。私がおなかの子を所望。歎きわぶれと聞入す。お二人してこのやうにと。いふもせつあ息づかひ。ム、スリヤ親八夫婦がしんざとや。ハ、ア、ア、ア、ろへず親人の急病といつはり。我を出しぬき跡へ廻り。女房を叱咤し。孕み子を取しとや。されども父は此有さま。また腹中に入し名玉の出しも不思議。合点ゆかずといふか。表の方に遊有て。ホ、不審尤。その仔細を某が。夫へ參つて言聞せんと。しづく入来る犬川領藏。ゆふく然と座に付ば。角太郎すりよつて。コ、ハ、おもひよらぬ犬川氏。わが不審を晴さんとは。いかある仔細と聞もあへず。ホ、がてんゆかぬは斷り。誠御邊が父といふは。すなわち是にと以前の彌縫。短刀もろ共。經机の真中におし直し。此二品はからず我手に入たる其一條。つぶさに聞けん座に直り。某おもふ子細あつて。武藏の國へ。ろざし。はからず山路に踏迷ひ。そこをもしらす登る處に。あやしの老人。われをまねき。尤それがし。赤岩一角。われ訪つて此山へ深八し。妖怪のため無念の最期。今一角と名乗もの。我を替せし變化の國者。追付こ、へ来るべし。何卒此弓箭を

もつて。我うちらみをばらさせよ。又此鬪は我自骨。短刀もろとも。玉返しの角太郎に渡しくれよと。云すて姿
のかけらふの。早日はくれてもの。道は名にのみ庚申山。月また。山ぬ山の端より駒に。またがり出来る老
人。眼の光すさましく。一癖有べき顔。魂をされども人にとならず。左右にしたがふ兩人の。さながら鬼畜のその
形相。見るに身の毛もたつか可。よつひさ共放つ箭に。左の眼のふかに射られ。馬よりとつと落こちの。山々
谷々鳴動し。舞さがりたる黒雲に。すがたを隠し其まよ。かき消さく逃矢たり。去によつて。先刻赤岩へお
もひき。隅一角に對面せしに。案のごとく片目に矢疵。なをもやうすを伺ふ。門弟とも云行し。だまし討に
せんどの工み。シヤものくしと一々に。刃むかふやつ原切。つづくし。一角を尋れども。風をくらふて行方しれ
ず。残念ながら立歸り。やうすを聞は今此しき。また隅一角が闊絶せしは。その藍玉の奇形ならんと。語るを聞
て角太郎。扱は誠の父上は。變化のために無念の御最期。とはしらすしてこれ迄も。仇に月日を送りしだん。
不孝の罪のおそろしや。眞平御免下されかしと。今更くやみの詭計。さう云へこれある一角が。妖怪變化とい
ふ事の。たしかな證據あるやいかに。ホッ。いふよやよふ化あらはすは御遊の血泣。ア。白骨にそ、がれよと。
聞より臂をつんざさて。流る。血泣。御遊にそ、げば。不思議やもへ立降火のひかり。仆れ伏たる一角が。むづく
と起る變化の悪相。いかりの片目を。くわつと光らし。ア。ラ口惜やな。名玉の奇形にて。見顯されしか残念正
極。あら腹立やと飛か、るを。心得かはして切。つくる。通刀自止の妖怪と。血氣にのやる若者。互におとら
ぬその有さま。まばし時をぞ。うつけしが。角太郎が手練の切。先き。さしもの妖怪をしらひかね。切込まれてた
ぢくく。たぢろく處をつけ込で。難なくおさへて。とやめの。刀。額縁聲かけ手柄く。ハア。只惜ひべきは
貞女の最期と。悔めば夫も聲くもらし。ホ。出かした雛衣。おとこが命拾しゆへ。父の敵の妖怪を。見顯せしは

天時貞節。此上は船虫を尋出し。おこが恨を晴し得させん。心残さず臨終せよと。勸むる聲に雛衣は。今日の
息をのり詰て。嬉しうござんす。懐妊と思ひしも。其玉を吞し故。疑ひ暗て成佛しすお前は長生遊ばして。
未來の事を待まする。名残をしやと這よつて。夫の顔を打守り。尽ぬ輪廻のはらく。涙。勇氣にのやる兩人も。
不だどみやる目のうちに。湧出る涙血泣のたき。瀧落て谷川の。のみちを流す如く也。か、る歎きの折こそあれ
船出一間を顯はれ出。夫との敵と突かくる。懐刃かはして振打に。丁ど切たる刃のさへ。あつといふ間も荒氣の
犬村。た、み掛たる太刀先に。朱に成つて死したるの。心地よく社見にけり。頼彌勇の聲高く。ホ。出かされたり
犬村氏。貞心深。雛衣が。胎内より歸りし名玉。げに玉がへしの里の名に。あふも不思議の名。紅目稱。これ先達
て里見の忠臣。大崎照文も出合。子細を聞は仁義禮智孝悌忠信。八ッの玉を所持する者。里見の家。に因縁あり。
先かふく。この物語り。御遊が所持の其玉。禮の字のある上は。紛ふ方なき犬士の一人。我も我の字の玉を持
ては。言ねど互に是れ兄弟。御遊は今より山の内のやかたへ参り。里見殿に奉公せられよ。我は是より武藏へ越
。犬士の一人犬塚信乃が。行術を尋ね。諸共よ。山の内家へ馳参じ。その時再會なすべしと。聞て犬村歎を忘れ。
ハ、ハ、有難。貴殿の情。父の敵の變化を討。此身の孝行たつたる上。義成公の臣下とあり。犬士の兄弟一
致して。道賊高吉討亡し。里見の御家再興せんと。勇立。たる二人の犬士。手あひの妻はがつくりと。生れぬ。さ
さの古郷へ。今ぞ。はかなく歸り咲。ちりの世いとふ其主の。再び元の身にかへす。花ハ櫻木武士の。矢たけ心の
たつか可。引明がたの雲すさま。誤ふや鶴の聲々に。彌陀の六ちを。立別れ。東路。さして「急ぎ行。

宮柱。ふとしく立る。神垣や。行徳村の氏神と。人もたふとむ祇園の社。勘進相撲興行と盛ぐるにかく建札の。鳥

の足もと人のあし。立つとひくる人群集にきはひ類なかりけり。人たへうか、ひ血氣の武士。相圖を見へて呼子の笛。宮の内よりいたこの金太。見八さま。シイ聲が高い。シテ申付た信乃が隠れ家聞出せしか。さればくお前の頼みの通り。犬を入てかき付せたりや。小文吾が内にかくまふて居る浪人もの。儘に犬塚信乃と推量はしても。顔みしらねば。うかつよも踏込れませぬ。テ、其義は氣遣ひいたすな。信乃が人相書すなりちこれにと渡せば取て。成程く。さへあれば大丈夫。房八に談合して。遣付首左右しらしませう。テ、出かいたく。しかし手剛犬塚信乃。必らずぬかる。お氣づかひなされませる此金太が腕まかけて。テ、働さ次第で徳美をくれん。エ、添い給すがた儘預ました。テ、萬事ぬかりのないやうに。吉左右を相待ある。さらばく。と兩人は。別れてこそは立かへる。早相撲場はどさの聲。さよめく。門より太鼓急いやくと押あふて。山來る見物口々に。ナント。小文吾のつよい事。アノ山林を何の苦もなく押出した力。イヤ。けふと。いものどどりぐに。ほめそやして行跡へ。のつし。と小文吾が。跡に續て山伏年玉。あふき片手にあふきたて。ヤ。開取出来た。御蔭で我等大分立。祝ひ事に。いはいしやう。大義ながらいつもの飲や。イヤ。イヤ。まだ用あり。イヤ。先へ。よ、そんなら御馳走して待てある。早ふとされと勇みたち。いそぐとして立かへる。か。る所へいつさせ。娘を思ふ文吾兵衛。心も足も地につかず。鳥井まぢかくさしか、れば。小文吾の見るより。テ、親父様か。シ、悴そこにあるか。思ひの外早う果たな。トキニ今妙真殿がわけていはる。に。小文吾をなだめ。けふの相撲に勝負のつかぬやう。頼んでくれ。もし房八が負になると。可愛やお縫と縁がされる。涙をこぼしての頼み。何と聞捨にならふ房八が負ると。大八といふ子迄ある中を。退の法。といふやうにならふかと思へ。おれも氣がたまらぬ。したが今聞はも勝負が付て。さかみが勝たせむ事がない。此上はわがみに頼がある。何と聞てくれるか。コレハ

したり現在親の頼み。聞かいで何としませうぞいの。テ、それ聞ておち付たど。鼻紙出し手ばしかく。こよりひねつて小文吾が。脇差の鑢しつかとく。イヤ。ナニ。頼みといふは此鑢とめ。括た小よりは細けれ。恩義は重に納めて。成はさくたど。相撲取真加につさ。摩利支天に願殺する。法もあれ。封印の此小より。いかにも切らぬやうにしませう。出かした。よふいふてくれた。夫でこそ古主へ忠義。親孝行。うれしやく。妙真殿にいふて安堵さそ。我身も用事が済んだ。早う戻りや。イヤ。合点でござんす。お前は。一と足も早ふいんで。御病人に氣を付て下され。テ、合点と文吾兵衛。心殘して立かへる。小文吾の脇差の。封印ながめて。親といふ者の。いひあも。もしおれが短氣を出さふか。いませめの此小より。妹と房八が。縁をつなぐ。恩愛のさづな。親父さま。必らず案じて下さりますな。ヤ。ちよつと山伏の所へ顔出しまて。早ふいのみと立上る後から。コレヤ小文吾。ちよつと待てもらひ。いふに何氣も振返。テ、房八。けふは大儀。ナニ。わがみに咄す事もあり。幸の道進。いぬなら一所に。いふか。イヤ。ありやまだいなぬ。イヤ。ナニ。小文吾。かふいや相撲の負腹のやうなれ。それとこれとは別の沙汰。一寸下たに。てもらふかい。コレ。又改つた。下たに。たが何ぞ用か。イヤ。別の事でもない。葉り崎での出入のため引。女房の兄じやに依て。したいがいしられる。人中。で。而恥かいた此房八。腰入て立引せふと。おもひ。人の散のを待て。サ。それから仕かけるか。おれからしかけふか。サ。ハ。いふじやい。ハ。ハ。房八たしなみや。く。で。しれた若いもの。いさ。とふに疵も直つたりや。おふ。いじやないか。互は親の有跡だ。これ式の事に。息筋張合でもない。いじやあいか。夫とも出が得心せにや。手を下て。観る程。よ。モン。了簡して。たも。おびるかし。いたこの金太。息をつめて。ぞ。観ひぬる。房八は猶付。コレヤ

いる内。誰が来て必らず聲を立てしやりますか。いひつゝ障子引立て。あるきを先に文五兵衛。庄屋をさして出て行。跡見おくつて成孝は。しばし思案にくれけるが。やふくくに頭を上げ。名主からの呼ぶかひの十に九ッぬが身の上。今人に難儀をかけんより。死んど覺悟は極めながら。古主の血筋と親子の深切。いま更死にしられぬ義理。とにも斯も因果な身の上。淺ましきよとばかりにて。我身をくやみ世を恨み。不覺の泪にくれ居たる。斯とはしらす犬田小文吾。けふの遺恨のはれやらぬ。胸にみちたる無念さを。こらへしのんで立歸り。門の戸明て。親父さま。只今歸りましたと。いふ聲聞て病人は。障子引あけ。小文吾殿今御歸りか。文五兵衛殿の庄屋殿から呼に來て。たつた今出られしと。いふに小文吾眉に皺。ニ庄屋のからは何の用。見れば女子共も居す。大切な御病人。一人置て用心のわるい。ヤ夫は格別。ちと氣分はよふごさりますか。ハ親子とも御深切。とかく痛の烈しさに。起臥さへんに任せずと。いふ顔あがめて。道理。さぞ苦しうござりましよ。併氣道なさります。頓て本腹させまして落付せませう程に。必案ずと。粥でも無理に喰て腹を丈夫にさしやります。風が當るは身の毒と。蒲團打させいたる處へ。何か表に人と音足おと。ちやつと障子をさす間もなく。瑞幸はじめ子分の若者。肩振ちらし門口より。親分内に居やんすかと。いふも口々どつちよ聲。世間しらすと見まけり。エ、大さを聲する奴らありや聲じやないぞ。耳の聞よふが腰の抜たこなん。向ひ弟子師匠の縁を切て貰ふと思ふて。栗石や牛金つれて來たのじや。ソレ。辛四郎のいふ通り。皆際もらひ來たんじや。際もらはふわい。イヤおれから頼んで弟子にしたでいなし。隙がはしくば勝手次第。メカ打細ふてそふいふには。何ぞやうすが。ななくちや川はぬ。ッ、しれた事。けふ宮の前で房八に踏たり蹴たりしられても。手ざしよふせぬ大腰扱と。行徳中の笑ひもの。そんな師匠にか。つて居て。おいら迄が恥のかきわれじや。

よつてこつちから。隙やりに來たのじや。けふから房八が子分。これから道中で逢ふとま。大風が吹して。ふまひぞや。成は子細あつて。房八に踏れた。それがわいらの顔よか。る事なら。望の通り師匠でない弟子でない。イヤそれ聞て堪が明た。ヤ。若者。弟子子でないといや。弟子をあげりや。今の仕事にか。らふか。尋者の犬塚信乃。詮議するのじやそこ退と。むしやふりかゝるを片はしより。首筋纏んで打付く。二階をかこみて。二王立。扱はらぬらも房八は頼まれたのじやな。犬とやら猫とやら。しらぬと。おれが内へ泥脚切込たら。片端から踏殺すぞ。イヤしらぬと。三。かくまはぬが誠なら。一間の内を吟味せよと。しやうこりもなく欠上るを。小腰纏んで金剛力。骨も碎けと投付られ。始めの義勢とこへやら。動をもせずして返歸。小文吾は門の戸を。しめんと庭へ折からに。ばか。ける念玉が。螺貝片手に。小文吾。よふ愚僧を待ばけにさんしたのふ。我らは精進酒はいけず。しやふとなしに飯をした。か面倒ながら。泊てもらひましたよ。ア、安し事じやが。今夜は祭休で。女子ども。居す。余所で泊てもらわんせと。いふをおさへて。イヤ。泊り付た裏の小座敷。勝手よふしつて。腹は大きしつるころり。イヤ其ころりて思ひ出した。今夜店て買ふた此蓑。ころりとは安し物。ちつと疵はあれ。せんごからさがして。さかし當つた。誰ぞはしがる物にみせたら。一廉の金。寐るまでの慰さみに裏でゆつくりと吹ませよ。おれ寐やらふと立上り。主の胸にさし合の笛をたづむ。念玉は。小座敷さしてぞ入にける。跡見送つて小文吾は。心どきつく。初夜の鐘。千々の思ひを忘れ草。のひ煙草を。咽にむせ。案じに胸も休まらず。差うつむいて居たりしが。や。あつて顔を上げ。折も折とて小面倒な。山火。斷つて無理頼み。その上ふ事にこそ。おれ。徳笛をさがしあつたとは。おれを探る下。心ではなまいか。ハ。

花魁茗八總

ふかかるとつ置つ。思案街の道筋を。怨をつらして。妙真が。わづかに照らす小提灯。むねは子故の闇の夜を。歩み寄たる。門の口。戸をほとくと叩き。文音兵衛さまお宿よかど。音のふ聲に小文吾は。夫とどきとどきとどき。どばけ。どなたでござる。親父は留主じや。用があれは翌とどきとどき。いつと替りし詞つき。耳にみかけず妙真は。そふいふ聲の小文吾どのか。赦さつまやれと戸を叩き。はいればこなたも註方なく。ふせうぐに。取つくろひ。たれかとおもや妙真さま。親父は今内にもませぬ。文音兵衛様がお留主なら。こな様にもつと渡すものがござんす。不肖ながら請取て下さんせ。うけとれとはソリヤなにを。アイよめのお縫を。エ、ソリヤ何で。合点のゆかぬは尤くはしい咄しは跡の事。イヤコレお縫。ア内へはいりや。早ふく。アイ。あいと返事はなからぬ。あしの片羽の愛思ひ。まはれ出たる母親の。肌に入し稚子を抱手も力なく。打まはれてぞ。座より直る。妙真の表に向ひ。怨の衆大義。ささいんを下されや。ハイくさやうならお先へと。挨拶そこく。打進て。もと來し道へ立歸る。跡はまらけしと家内。互に詞なかりしが。イヤニ妙真さま。此妹を受取とどきとどきやるは。ハ、ソリヤ房八のけふのすもふの負はら。妹を去つて戻したのじやな。イヤすもふの事云出さず。まはり崎の出入とやら。女房さつて立引せにや。男が立ぬと。モ一てつ短慮。まかつても諒めても。聞入ねば。ア何角あしに連て來ました。文音兵衛様にも諒いふて。まはらく預かつて下さんせ。又よび戻すのわしが胸にござんすと。いへばお縫も泪ながら。今か、さんのおつまやる通り。ひよんな喧嘩のめめ事。子まであしたる夫婦中。わかぬ離別をする事は。いかに宿世のあんんぞと。跡は得いはずむせかへれば。心根不便と思へ共。わがと文音は愛笑ひ。ハ、ハ、ハ、ソリヤ房八も。もつと小智慧のある者かと思ひの外。さ、いな事に。子返る女房を去つて立引せるとは。イヤモ未熟な了簡が。夫は格別。此いもとの事は。親父とお前が相談づく。もどられたら親

花魁茗八總

父にあふて。直にお戻しなされませ。ソ、そふ言をやらすは老なれど。親子は一體。こなさんにわたせば。文音兵衛様よわたすも同。イヤ預る事はいやでござんす。去あらさると房八が。自筆で書た三くだり半。のぞみならばと懐中より。取出しわたすをひらき見て。悔りせしがさあらぬ体。コリヤコレ人相がさ。この繪すかたよ一首の歌をつらね。これをお縫が去狀と。ア山川の。流れに沈むたちからを。身を捨てこそ浮む瀬ありと。書たは則房八が直筆。とりも直さずお縫が去狀。イヤ此さうり狀は念が入り。すきて罰取にくい。やつり御定りの三下り半。それが書てもらひたい。イヤとばけまい小文吾の。八木の館を騒がした。おたづねもの、犬塚信乃。かくまふた者は一家一門同罪と。高吉様から廻つた紙符。おぬいに付て戻したは。いふにいのれぬ房八が。イヤ夫でもやつはり請取ぬか。それは。但し犬塚信乃をかくまふたの。小文吾親子でござりますと。八木の館へ訴人せふか。ア。ア。ア。何とでござんす小文吾の。のつひささせぬ釘かすがひ。さしもの小文吾あぐみ果。暫し。厭して詞なく。まやう開る二階より思ひす。見あろす犬塚信乃。見上る兩人たち切る障子。ふさがる胸も一時に熱湯をのむ心地せり。まばらく有て小文吾は。やうく思案をさはめ。成はどさうり狀儘に請取ましたと。いふにお縫の猶悲しく。夫でいふた、び房八殿に。ア合せ物の放れ物。おれも小文吾が妹じやないか。未練者めと。呵られて。かへす詞もなくばかり。妙真もあみだをかくし。夫で気がまつり。長居はむやく歸りませう。そんならも御歸りか。随分おまめで。ア、そなたも無事で。孫に風を引かぬやう。アイこれまでいよふ可愛がつて下さんした。お禮は未來で。イヤ未來まで忘れはいたしませぬ。エ、コレ何にもしふてたもるな。聞く程くるしい此胸。イヤサあかの他人にいふ事はない。ハ、ハ、とそら笑ひ。口よりつばに心は。泣に。いぬ身のうしろ影。見あくる嫁は絶かねて。見つと泣音をどきどきする兄。母はあもて。戸を引たて。二足三足立とまり。灯

引明立出れば。こなたも涙おしかくし。チ、兄さんおまへはまだおよりませぬか。妹わがみもまた寐すか。ア何や角や思ひ廻せば。寐られませぬわいなア。チ、道理くよくよ思ふに尤じやが。何事も定と。ふつ、りと思ひ切りや。ヤそれをそふと。おりやちつとわがみに無心がある。何と聞てはたまるまいか。チ、兄様の他人がましい。妹の私にに遠慮身にかゝる事ならば。何ありと聞ませぬ。チ、過分く。頼みといふは外でもない。わがみとアノ大八との命がはしい。エ、チ、驚きは尤。なまを隠そふおれがかくまふた。犬塚信乃といふお人は。親父様が犬恩の古主。破傷風にて御命あやふし。それを救ふは家の秘薬に。男女の生血を調合して用ゆれば。即座に治る不思議の妙薬。親父様は敵の手を捕へられ。のつ引ならぬ手詰の難儀。古主と親の命を救ふと思ひ。聞入てたも。妹。時刻うつらば悔でかへらぬ。覺期のよいかと抜放す。刃の下を飛退て。アアく待て下さんせい。あ。夫とにさられ生がひあひ。私が命が役に立なら。なるほどお手にかゝりませぬ。さうながら。此子までも殺さふと。あんまりひどい嗣欲を。大八ばかりは助けてたべ。これ手を合しておがみますと。口説なげ、ば兄はなは。不便と思へと聲あらしげ。ヤア今となつて未練のはへ煩。叶ぬとと振上る。刀の下をにげ廻り。待てくといふ聲に。虫がしらすか泣出す稚子。兄も心は亂れやき。逆てもにがさぬ命の脊戸口。いつの間にか房八が妻子をうしろよ二王立。見るより小文吾つめよつて。ヤアうぬは房八。さつた女房なせかばふ。イヤ他人の女かばひはせぬ。縫が去荷の此一品。サア請取と投出す片袖。手に取て見て胸りコリヤコリいつぞや入江よて。おれが手に入信乃が片袖。ム、スリヤ其どきの曲者は。いふにやあよぶ此房八。其時聞た信乃が素性。ア状がへりにわたした繪すがた。ドレ此上は信乃が病家。おくへ踏込召とらん。かけ行帯際引戻し。ヤとこへく。入事をしたつたのそちが不運。親の異見の封印も。一家の終る断切時節。覺期ひろげと切付る。シヤアよこ才すると抜合

し。はつしくと切むすふ。お縫のはあく。あふなさこはさ。是のふ待てと身をすて。留ても。いつかなひるまぬ強氣の兩人。ヤア邪魔ひろぐと房八が。蹴飛ばすはづみに稚子が。ひはらを蹴られ即死の躰。はつとお縫が氣は狂亂。コレ大八か死ましたと。取付妻を引返る。はづみにすつかり一刀。思はせ切込手のくるひ。是はと驚く房八が。すき間を得たりと肩先より。胸板かけて切込小文吾。急所のいた手にとつかと座し。又取直すをおしどいめ。ヤア待兄貴。たゞ一言いふ事あり。ヤア人外に聞事なし。觀念せよと振上る。臂しりしつかと氣丈の手負。くるしき息をほつとつき。コレ小文吾との。夫婦がいのち捨しうへ。犬塚様の御病氣は本服せふがやと。いふに不審と手をとぐめ。合点ゆかざる其一言。夫婦が命捨しとは。わざとこあたの手を掛り。夫婦の血泣と身替りの。コレ此首がえんせたき。世女房といひ合し。まづ此通りはかりしと。聞て小文吾二度胸り。一間の内よ。犬塚が。病苦を忍び。聞居たる。こなたの間に念玉が。笛のしらべも。はそくと。いと哀を。そへにける。房八涙おし拭ひ。思ひまはせば廻すはと。子分のやつらが悪告より。こなたを一圖恨んだは。一生のわが誤り。いつぞや入江の吉原で。たち聞したる犬塚様の素性。我父の伊の丹藏直秀様の御家來。犬塚様の母御手京様の古主の御息女。その御子息の信乃さまに。面影似たるの幸屈竟。もしも手詰に成あらば。御身がけりと心の覺期。夫故血泣の小袖を。とらんとせしは。まさかのとき此首にそへ證據にせんため。然るに古主は破傷風。男女の生血と、のはねば。秘薬あり共その功なし。なにとぞ御用に立んもの。わざと角刀を負をどり。無理法外な打擲も。こなたをいからせお身がけりに。討れんため此服。されども親の異見の鑿。さらじと。手向ひなければ拍子ぬけ。内へかへりて我母に。まつかうくといふたれば。出かした房八よふいふた。古主といひ舅のなんぎ。御身替に死んでくれと。泪ながらの母の詞。立聞して女房も。おしも一所命を捨。お主の役に立た

いと。女に似合ぬけあげの詞。金太が我より與へたる。繪姿に書た歌は。夫婦の者が身を捨て。浮む忠義のなごら
 へ歌と。かゝるに扱りと小文吾が。いままで胸にうたがひの。氷も解る泪雨。あぬいも苦しき目をひらき。申
 さま。命をくれよと有しとき。遊まひつたは犬八を。どふぞ助けてやりたい計。未練と笑ふて下さんすな。犬は
 さまでに思ひ子を。怪我あやまちと。言ながら。思ひもよらぬ此最期。可愛いとをしましたと。あへあさ骸とい
 ださしめ。とつとなげ。は房八も。我子の死がは。打守り。坊主よ堪忍してくれ。コリヤ。と、とか、
 とは忠義のため。死だ跡では兄貴を頼み。そだて。貴をと思ふたに。ひよんなそさうをしてのけた。不似の最
 期と女夫して。撫さすりたる悔み泣き。しをりの外に洩さく母。こらへかねて一時に。わつと計に泣出す。こゑ
 聞付て小文吾が。明る戸遅しと轉び入。正体あみだの聲をあげ。前後不覺になさきけ。二人ともよふ死で
 たもつたのふ。コレ。小文吾殿。最前にとやかくと。氣よさはる事いふたのも。古主の御難義すくはんた
 め。あもふて出ても何の。とが子や嫁をころしにおこし。とふ。マア内へいなれふぞ。忠義ゆへとは言ながら。
 天にも地もかけがへない。たつた獨りの初孫まで。月日もかへず一時に。死る。何の報ひぞや。三千世界を尋
 ねても。こんな因果な身が有ふか。としも一緒に死たいと。歎きの數々かぞへたて。なげ。ば。ともは房八夫婦
 痛手の上の髪思ひ。大聲あげて叫びあさ。鉄石心の小文吾も。一間の信乃もこたへかね。五臟をしぼる泪雨。富
 士の高ねの。雪どけに。水かき増るごとく也。や。わつて小文吾の。泪をばらひ手負に向ひ。いつ迄いふてもか
 へらぬくり言。男女の血はそろふ上は。いで妙薬の調合せんと。有合螺貝かつ取て。二人の血沙交ため。懐
 懐中したる秘薬を打込。なげさ伏たる犬塚に。吞せはアツト五臟の惱亂。たちまち治する秘薬の力。一座のめん
 く。嬉しさのあみだもやふすばかり也。信乃はすつくと立上り。マ。ラ。ふしきや。今この秘薬をのむや否。忽ち

命瘡のいたみ治せし。房八夫婦が忠死のいさほし。いつの世もかは報すべき。夫に付てめいたはしきは。此犬
 八。わが感得の守りの名玉。いたがさは方が一。よみかへる事もあらん。イテ。心みんと玉取出し。死たる小兒
 がむなさきを。一心こらしなを。おろせば。息吹かへしむつくとあさ。握り詰たる片手の拳。ひらけば輝く一ツの
 名玉。見るより妙真たちよつて。ヤ。わがみは片手がひらいたか。コ。ば。い。さ。ま。おれはこんなよい物ひらふた。
 コ。ン。見て下されとさし出す名玉。以前に増る詞付。これのと驚く人々より。手負の夫婦はくるしき忘れ。ハ。ア。有
 かたや。忝や。よみがへりしのみならず。開きし拳に持たるは。ヤ。ハ。コ。ン。御覽なされ。正しく仁の字と。いふに
 小文吾犬塚も。手に取。上。て。押。いた。さ。始のなげき引かへて。よろこび勇むぞ道理なる。いつの間にかついた
 この金太。物かげよりあどり出。ヤ。ア。附。た。く。身替の似た山首。見入。の。へ。注。進。と。かけ出す。帯際犬八が。引。摺。ん
 で。く。つ。と。さ。し。上。は。づ。み。を。打。て。投。付。ら。れ。石。に。打。れ。て。七。轉。八。倒。こ。く。う。を。摺。んで。死。ん。で。け。り。房八今端の聲を
 上。ア。う。れ。し。や。本。望。や。犬塚様のおかけにて。父にも増る今の大力。悦べ女房。ア。嬉。う。ご。ざ。ん。す。よ。ふ。強。ふ。な。り。や
 つたのふと。夫婦が中に抱きよせ。すぎこし方を思ひ出し。名残なみだの。果しあさ。折しも一間に聲高く。ヤ。ア
 く。八。犬。士。の。め。ん。く。里見の冠者義成。對めんせんと呼ひつて。以前の旅人はなくしく。始の姿引かへて衣
 紋さらめく長上下。念玉坊の袈裟ころも。跡に引そひ立出れば。コ。ハ。く。い。か。に。と。人。々。は。う。や。ま。ひ。か。し。づ。き。奉。る
 〇。ホ。か。た。く。の。不。祥。尤。わ。れ。旅。人。と。す。が。た。を。や。つ。し。東。國。を。徘徊するも。八犬士の行衛たつねんため。又願徳と
 名乗し。天崎照文。念玉といひし。金鞠入道。大法師。房八小文吾。角力を望しは。守りの玉を改んため。然
 れども房八は玉を持す。返つて一子犬八の。仁の玉を所持するから。今日より名を改め犬江新兵衛仁と名乗
 らせ。譜代の臣下とあすべしと。仰にはつと悦み手負。おかた泪にくれにくれにけり。義成かさねて。先刻來り

花魁茗八總

ワ、サ乳のかはりじや取ておきやれ。ハ、サ乳れしや。添や。夢ではないか有難や。早ふ夫に手渡しと。行を引留。イ
マソリヤならぬ。其金の文に添へ小見に持せ先へ歸せ。紙も筆も是に有と。矢立はな紙さし出せば。ハ、そんなら
まだ外に用がござんすか。ハ、サその金はその方が命の代金。エ、そんなら私が命を。ハ、ウなん義とある故
用立も。命の無心得心なくばその金子を戻すか。サア夫ハ。命をくれるか。サア。何と。のつ引させぬ理に
賣られ。暫しなみだよくくれるが。今更金をもどして。夫とのあんぎも救はれませ。と。いふ物の力次郎。わしが
死だら嚙やさぞ。尋さがして泣である。この何とせんごふせふと。命一ツを二道に。定めかねたる泪の雨。はれ
間のさらよなかりしが。ア、我ながら未練也。義理ゆゑ捨る此命。をしむの比興と泪を押へ。紙押ひろげ矢立の
筆。我子に名残をしままじ。歎くまじと。諦めるはと胸せまり。あつる泪の玉章を。漸にかき納め。仇なるを
にし結ひ文。金の包みにく、り添。コシカ太郎。そあたのこれを持って先へいにと。さんと渡してため。必ば、襟
に見せまいぞやと。内懐におし入て。帯仕直せばくはんせあく。そんならとしの先へいぬはとに。早ふもどつて
下されや。サ、日の暮ぬうち早ふいにや。ハ必くとは付て。怪我してたもんな。さらばやと。見送る母を見か
へりて。後の歎きとまらぬ手が。名残をしげに泣くも。心の跡にかへりける。コシカ一度顔をどかけ行を。ハ、
へ留むる錫杖に。思ひすわつと聲立てきへ入ばかりなき沈む。いつ迄いふてもかへらぬくり言。時刻がうつる
と手を取て。心強くも辻堂へ。引立く。入よと見へしがばつさり太刀音。そのま、ひつそと音もなし。暫らく
有て修行者の。包み引さげあゆみ出。この女が咄しを聞ば。一ツやのお大の娘單衣とやらん。妙術の爲とハ言な
がら。おすかの金も不便のさいとせめての事に首ばかり。ゆかりの者も罪せん。ハ、幸此片袖と。包みし袖に
矢立の筆。手早に書付さし置て。笈を背中に修行者は。左わらぬ跡に立歸る。跡へとばく旅人が。腰も梓の弓

花魁茗八總

張の杖を。力に歩み來て。ふつと目のつく以前の包。何やら愛よと手に取て。ナニく一ツ家のお大が娘。俗名ひ
とよとは。ハ、お家騒動のとき。別れた娘も名はひと夜。ハ、合点の行ぬと。言つ、はどく包のうす。ヨウコリヤこ
れ娘の一夜が首。ハ、何故に此ありと。胸もどきく。氣はうろく。ハ、ソレく一ツ家のお大とあるからは。是
へたよりて一酔義。そふじやくと。氣の半。又もや袖にしつかりと首をつ、んで立上る。をりしも來か、る
十作が。口綱とつて戻り馬。コシカ馬士との。此邊に一ツ家のお大といふ人はござるか。問ばふしぎと。打打
がめ。いかに大といふ宿はなれがなもや。ハ、仔細有てあるハ沙汰のある宿。何なら外で泊らつしやれ。ハ、イ
ヤく泊るばかりでない。ちつと尋たい事も有。何とその馬に乗せて往て下さるまいか。ハ、テ戻り馬なら乗て
なふが。同じ事ならよしにせいで。ハ、サ乗しやれ。ハ、夫ハ添。そんならと。おど頼みますと。いふに心得十作
が。ハ、て乗て手に見たす。包を妻の首と。しらぬが佛の堂の前。つなきし馬を引。立て。ひとツ家。さして
一追て行

其 一 一ツ屋

八重葎。軒端に通ふ松風と。鏡の水の音さゆる。滋御寺の。鐘のこゑ。行衛果なき武藏野に。一ツ屋のお大とて。
行來ふ人に宿をかし。浮世を渡る老女あり。まだ初秋の寝る蚊を。ふすべ。立たるお手拭。ひたいに懸ひ織の涙。
池に椽がはかけ作り。釣釣うろうろに書文字の。すみくろめたる萱ぶさる。内わた、かよ見へにけり。何處も同じ
かりの宿。大塚信乃ハ村雨の。刀の有尋ねぬび。爰によるべの水仕わざ。名さへ彌助とかりそめに。しなれぬ
業も世につれて。水たごにあひ立歸れば。主の老女はたけり聲。ハ、彌助。一荷の水汲の。ハ、ま、で何して
いた。ハ、聲の十作が弟じやと。いふて。適てもどつたは今年の二月。月三兩つ、の飯料でおいたに。今にびた

平中入れず。それ故下男にばいさげて遣ふ。金の利合ばかり。けれど何をさしてもぞべら〜と。ちつと氣をさかしたがいよいよのふと。かみ付られて成程〜。何事も不誹法な私。遣付兒十作と談合し。飯代の算用いたしませふ。夫迄のいかやうよなど。お遣をされて下さりませと。半分いのさす。又口先でぬつ〜と。その水も風呂へ入て焚つけ。米もかし味噌もすり。棚もどまのりの飯でしら〜。ちやつ〜としておきや。ア、人をつかへば苦をつか〜と。世話やの〜。南無あみだ佛〜と。小言まじりの稱名のまどに鬼の念佛あり。口わんざんは常の氣質と。耳にもかけず水たご荷ひ。湯殿を差て行くと〜。ひよかすか入。来る庄屋のねこ平。辰己あがりのとんさよ聲。婆様内に居やんすかいの。サ、あらい事じや〜。さよふとい事しや。チ、たれぞとおもへばねこ平との。跡先もいはず。何の事じやぞいのふ。さればいの八木の館から火急のお尋もの。代官縮ばさ平様から。下された人相書。コレ見やつしやれ。犬山道御といふ浪人も。年格好から着もの迄。背けてある此繪姿。似よりの者かあらば早速に連れて出い。誠の科人は極まつたら。一かどの褒美との事じや。こ、宿屋商賣。入こむ客に氣を付て。此繪すがたに似た者があらば。おれが内までまらさつしやれ。褒美の金は二ツ山じやと。おたせば老女手にとつて。ス、ス、此配符に似た者を。とらへて出せば。サ褒美の金は望み次第じや。〜。成はぶ。そして此犬山といふ浪人の。何故におたづね着。その譯は聞つしやれずか。サ、ハイ、下野八木の館へ。その浪人が忍ひ込。定政といふ大將を。討て立退たとの事。それゆへさびしい御詮義。モ心あたりが有らば。早うかき出して。おれが内までまらさつしやれ。婆様さらはと立上り。鳴居にけつまつさあいたして。ちんばちが〜。まりされ草履。足に引かけ。〜と。あつてちらして立歸る。跡に老女繪姿があめ。何か心にうなづいて。巻あさめて。持佛の下。取かへす内納戸より。彌助は茶だいたづさへ出。申かみ襟茶の出花がとまました。〜

ッお上りなされませと。いふに老女は手にとつて茶をのみながら門うちあがめ。このマ、娘や孫はおそい事。おれがちよつとみてくるはぶに。もし泊り人が來たら。風呂へ入。膳も出しや。じやが着かたし盗まれても飯代の中へ盛込ぞや。マ、世話やの〜。南無あみだ佛〜と。念仏かみませ下駄ばさよ。足も心も。達者は。外面を。〜として出て行。跡に一人はつまりと。預る留主を成孝が。手をこまぬいて一人言。水の流と人の行衛。定めなき世と言ながら。紛失した村雨丸。何卒せんぎせんもの。尋ねまよふその内よ。めぐり逢ふた額藏との。我を弟といひ立。かくまふ深。それに引かへ老女が強欲。もしや尋る村雨を。買とりし事もやと。窺ひみれと今にまれず。ハテどふがと打かたむき。思案にくれし折こそあれ。母が教を子心よ。大事と守り力次郎。見すばらしげに立歸れば。彌助の見るより。チ、ばんちか。戻りのおそきに婆様のいんを尋ねに行つまつた。そうしてか、さまのここに。イ、ヤ、か、さんは。あそからいぬといはつしやつた。ばんひとり先へもどつた。コレおぢ様。と、さまは内にかや。イヤ〜と、さまもまだ戻らず。此マ、單衣との。何して居らる、事。可愛そふに。年もゆかぬ子をひとり戻して。マ、〜ねむたいかしてモウら〜と。〜か、さまの戻られるまで。おぢが寐さしてやりましよと。横にださとりいふり付。納戸の内へぞ入にける。早くれか、る秋の日の。空吹風も悲しげよ。軒におとする門のくち。闇浮に迷ふ魂魄の子ゆへの闇よひかれよる。姿もちすぢの母の宿。ありしをながらのひとよが姿。まは〜として入相の。鐘も無常の夕がらす。友よひかはす聲〜も。いと哀れをそへにけり。單衣は柄打ながめ。マ、心なき鳥つばさも。夫をまたひ子を呼て。ねぐらにかへるも。羨しい。おれは浮世の義理ゆへに。たつた一人のいとし子を。見すて。死出の浮旅路。さぞやねさめらう〜と。かへらぬ母を戀ふたひ。稚心に待であろ。せめてま一度を〜乳して。寐せしとふても情なし。一世をかざる親の心。約束事と

あきらめて。おどおしう成人し。とひ吊ひをまてたもや。かわいの者やとばかりにて。そばに。居る子にいふと。とく。六みだの隈りかきくとき。袖かみまめる血の泪。色や紅葉は染ぬらん。納戸口より立出る。彌助は何の氣もつかず。チ、一重さん戻つてか。いんまばんちが戻り。と、さまやか、さま呼ぶくれと。やんちやいひく。返入。とふやらかふやら兼付しました。ガ合点のゆかねは。よたけもない子の。懐に。大分の金包。マヤ用心の懸い事。お前が戻つてなら。渡さふと思ひ取て置た。サ、たしかに渡しますと。金包を差出せば。單衣は見るも今更に。涙のつ、み手に取て、いかい御世話でござんした。それに付ても辭さんの。明てもくれても飯代の。金の催促さくつらき。聞へぬものど心で。定めて恨んで居さんまよと。思へば胸も張さける。私か心のせつなきを。推量してとばかりにて。跡は泪にくれ居たる。彌助は聞に氣のどくさ。マ、わつけもない。何のお前やかみさまを恨みませふ。飯代の算用せぬ。皆こつちがわるいから。追付金の才覚して。辨州さへまたら。かみさまのさげんもさほる事。マヤそれ迄は利足がりの下男。かふして居ては眞加ない。ドレク飯のこしらへせんと。口にはいへど何とやら。合点のゆかね單衣がそぶり。心變して見かへりく。納戸の。内へぞ入にける。單衣はあどにうつとりと。日影まつ間の朝がはの。花の姿も打まはれ。佛燈開き御明を。燈す硫黄もさへて行、わが身の後の世を頼む。佛の教へひしくと。浮身よめぐる因果經。歸命頂禮まやか如來。善惡くらくの理りを。問に答への御示し。現在う。世の行さま。皆これ過去の報ひ也。十作の道すがら。妻の最期の物がたり。聞て不審もはれぬ夜に。旅人のせて戻り馬。門邊に懸き老人を。抱さかろじて聲ひそめ。爰が尋ねさつしやる一ツ家。道々の咄しでは。合点のゆかね事だらけ。うかつに。這入れぬ。マヤ内のやうすを。立よる戸のすき妻の聲。マコリヤ單衣が聲。コ、御老人。女房は内に居ます。大方此首の人達と。いふにこなたも指のぞき。見れば相讚に余ねんな

く。五逆十惡つくりては。無間地獄にあつる也。カンニわりや娘。マそんならこれの他人の首か。さはいへみす。く。死の死顔。もし内あは化生の者で。有まいかと。又さしのぞきて。イヤコ、馬士どの。マ、マ、見やつまやれ。御明の火に影のうつらぬは。正しく幽霊と。いふを打消。ハ、やくたいもあ。やつはり是の人ちがひと。いひつ、又もさしのぞき。よくく見れば燈火に。かげのさ、ぬの。マヤそんならあれの幽霊か。ハ、扱は子に引されて迷ふてきたか。たゞ眞實に信すべしと。唱ふる聲もなつかしく。這入て見たさ途たさも。もま消て。ハと氣道。無量の思ひぞやるせなき。十作も心ならず。何にもせよ心得ぬ。マ、ありさま。とくと質否を糺すまで。ハ。此まは部屋に隠れて居て。相圖する迄必出まいぞ。チ、合点。こなたも此首の。必ずいふまいぞ。ソリヤのみ込んで居やんすと。柴小屋押明おぼせて。馬を木蔭へ引こみおき。門の戸明て何氣なふ。づつと這入れば女房は。机おしやり。チ、こちらの人もとらまやんしたか。お前に見せて悦ばそふと。さつきにから待ってゐたぞ。いふ顔かたち。常よかはらぬその有さま。但しは今の老人が狐狸。では有まいかと。心どささまき落付ね。色目も見せずさあらぬ顔。ハ、悦ばさふとはソリヤ。何を。マヤこれを見て下さんせと。指出す包手も取て。マコリヤ大ま。二十兩の金。とどふしてそなたが。さればイヤ。其金に付て。マヤ。せつなひ悲しい。イヤ。委しいやうすの跡の事。今更いふも恥しながら。はんに眞實お前をば。さらく嫌ふじやあけれぬ。先のつれ合尺八どのに。操を立て二度の花。咲すまいとの心のちかひ。それに引かへか、さまの。お前の其さりやうを見込。聲にそれとの執我意を。いなめば不孝と義理詰に。せまつて二度の夫むすび。祝言の夜の床の上。心のたけを打明たりや。マ、出かしたよふいふた。氣遣すな。貞女のおれが立さすぞ。表向は女房。ハ、誰は妹分と。聞たどさの其嬉しさ。枕かはさぬ女房子を。かげになり日向あり。可愛がつて下さんす。其こなさんの弟御が。飯代の金たていとの。母の催促。マ

間の内。さふとひきまて地震のごとく。建具は一ゆりゆりく。音に驚き稚子が。飛おき様がりより。足ふみはづしまつ逆さま。池へどんぶり落入たり。見るに軍衣の身をあせり。走りよらんも身は叶はず。叫ばんにも聲出ず。途かた泪に伏沈めば。道の老女憫れ果て。只忙然たる計也。こらへ兼て安平は。垣引破りかけ入て。老女が前に膝突かけ。ヤイ獄卒の魔王め。雲からアノ垣の影で。立聞すれば。理も悲も分ぬ強欲非道。あまつさへ頼もしい髯殿を欺しごろし。可愛そふに此世にあい。娘の異見さへ聞ぬ。例の天魔が見入れたかやい。その根性じやによつて。たつた一人の孫までがアノ最期。悪の報をまらつたかど。疊た、いて腹立涙。おとねは始終ふしん顔。コノ安平殿。こなたの御主人諸とみに。討死と思ひの外。世にながらへるの。コノ合点がゆくまゝ。親旦那の死出の御供と思ひしが。命ながらへ道節さまの。先途を見よとの御遺言故をしからぬ身をのがれ。諸國を尋ねるその内よ。けふ淺草を馬をかり。道にて名乗は娘の髯の。此家へ来て娘が事。實告を糺さんその内に。アノ柴小家に身をまのび。様子に残らず聞たはやいと。いふにあとねは猶ふしん。最前からの詞のはし。此世にない娘とはッリヤ何事。チ、まだく口でいふにあよばぬ。コノ是を見おれと。以前の包み差出せば。結目とて二度悔り。アアコリヤ。娘の首ハタ心得ぬ。げんざい我手を括つておいた。アノ娘と。後をみればコノいかに。姿のさらけにあら繼に。く、り付たる文一通。合点ゆかすとおしひらさ。何々文して申上る。我事御もとさまの御えんもじのは。身にまみぐと有がたく。何卒金の才覚なし。参らせんと。袖をまを致し候ところ。今日はからず金のつるに有つさ。命をうりて二十両金を調へあくり。アアくそんなら最前十作から請取た金の。娘が命を買た金をあつたか。アアいつとばかりは假の仰天。安平状をいどり。よ、又二ツには私。命を捨候へば。母の邪見の心もおれ。善心に立かへられ候やと。これのみ頼に相果申候。只心にかゝるは力次郎。まだくはんせあさ身の母に別

花 魁 蒼 八 總

れ。嗚かし夜の寐覺にも。我をたづね泣いたひ候はんと。是のみ黄泉のさけりに成る。死る命のさらく惜からず候へとも。子に迷ひ親の習ひと思召。いまはの心御非量給はるべく候。チ、道理じやく尤じやわいやい。エ、心便は御元さま一人にて候間。悪人ながら母の事。又力次郎が事。御見捨なくくれぐ頼上る。十作どのへ。單衣よりと。讀もみならずむせかへり。チ、可愛やくくを。まぬる今の際までも。親を思ひ子を思ふ。その一念が此世に残り。迷ふて来たか可愛や。いぢらしやと。人目も恥ずかさくとき。正躰もあく歎しが。漸に涙をおさへ。ア、我ながら未練なり。髯への義理と孝行に。命を捨しは健氣もの。さはいへ單衣が命を買取手にかけては何者成ぞ。チ、その仔細は某がいひ聞さんと納戸より。立出る犬山道節。見るに不審の老女より。安平もいぶかしながら。仔細あらんとためらへば。道節真中におし直り。始終のやうすはわれにて聞。その方達のあげき尤く。しらぬ事とは言ながら。單衣を手にかけてし其仔細。あらかじめ語て聞せん我ある人に隠形ふしぎの術を授り。出沒自在心のま。只なさけあさの此術。女の乳汁とその女の生首を。贅としてまつらざれば。件の妙術行ひがたし。いかゞのせんとおもふ矢先。けふ淺草の辻堂にて袖乞する女非人。命を賣ても金を望むよし。チ是幸と命を買取。いかなる者の娘と問ば。一ツ屋の大がむすめ單衣と名乗。首さし延し健氣の最期。乳母が娘と夢にもしらは。我手には掛まじきに。現在乳兄弟ともしらす。切害せしは我誤り。コリヤ。こらへてくれよ兩人と。語るに扱はと安平夫婦。顔見合して詞をく。差うつむいて居たりしが。おとねは有合懐劍おつとり。腹にがのと突立たり。これはと驚く安平道節。手負のくるしき聲を上。ア、さわかまゝく。これまでも多くの人を殺して。金をとり。剩へ娘の命まで。金で買せし一通り。さんげのための物がたり。二人とも聞いてたべ。かぞへて見れば五年以前。小身者の安平どのを。人がましく思召れ。大切な御金藏の。錢あづかりとあさ

花 魁 蒼 八 總

れし御恩。家の樂れと悦ぶ内。何者ともしらず。二万兩の軍用金奪取て行衛しれず。ハ、しなしたり南無三寶。とやせんかくやと思へども。詮方なんぎの身の過り。何卒その盜賊を尋ね出し。いひつけの種よせんものと。思ふに甲斐も。あら悲しや。不意の軍に御家は没落。くちをしや道策謀も。定政が爲にあらぬ御最期。夫親するはなれ。さまよふ内よむおのれやれ。一万兩の金をと、のへ。和子の行衛を尋さがし。吊ひ軍の軍用にせんもの。思ひ詰たる此一ツ家。ハ、一間には大石を釣。枕の下には石をしき。多くの旅人に宿をかし。寐息をかんがへ十作を。殺せしごとく。燈籠の釣綱切て放す時。みじんになつて即座の最期。死骸は庭の池の底。しづめにかけては敷しらす。悪業もろとも積る金は。凡九千九百八十兩。いま二十兩あるならは。一万兩にあらん物と。思ふ矢さきに十作から。まんまど手に入二十兩。嬉しや今社願成就と。よろこんだは肉身の。娘が命のかかり。も。しらぬ凡夫の。淺ましや。元より此身は阿鼻地獄。あつるも忠義ゆへならは。いつかあゝと。ぬ身の最期。その我身よりいし子や。大事の孫まで情ない。此世からなる血の池の。地獄の苦患を見せふとは。今日の今までしらなんだ。可愛の孫やいとをし。我子の最期と首しよせ。抱さしめたる詫なみだ。安平も目をすりわかめ。そふ言事とは。強欲の非道のと。さげしんだのが恥しい。老年よつた身は残り。生先のある孫や娘。たのもしし聲のさへ。日もかはらずに死るとは。世界の因果が一時に。廻つて來たかせひもなや。魂首よ有なら。爺かと言ひふてくれ。詞かひして呉よとて。老の悔みのくり言を。かぞへたて。なげ、ば手負もろとも。一度にめつと聲立て。前後不覺に取亂す。大勇不敵の道節も。拳を握り齒を咬まめ。泣じとすれば雨眼に。たばしる涙はら。歎き果なき武藏野よ。夕立そ、ぐ。呻ひしる。す、さ涙こそごとく也。始終木蔭よ立。聞信乃。勢ひ込んで顯りれ。ハ、比與未練に十作を。謀り討せし犬山道節。觀念せよと詰れば。一間の内に聲

花 魁 八 總

高く。ハ、成孝騒がれな。犬川額藏これにありと。呼はる聲と諸とめに。障子を丁ど蹴りなせば。内にすつくと十作が。ハ、余の盤石ぐつとさし上。白眼つめたるまなこの光り。聖地神の出現も斯やとばかり見へにける。コハ、いかにと驚く人々。道節いかりの聲あら、か。ハ、死損ひのうす出め。息の根止てくれんぞ。はつしと打たる手裡劍を。石にてからりと拂ひ退。了爾有るな犬山氏。御邊も犬士の一人たる。印を見せんと投打士。道節かた手にしつかと聞とめ。ハ、此玉を犬士の印といふ。仔細はいかよと尋ねれば。ハ、ふしん丸。いつぞや丸塚山にて。御邊の肩口を切しとさ。とび出ておが手に入し。其玉。その砌り我玉。守袋に入し。御邊の太刀にからみとられ。行衛をさす今月こよひ。面會せしその時に。仔細をつげんと思へども。心の邪正試せし上と。期を延して只今かへすと。聞て道節膝をうち。ハ、其時迄右の肩に癒ありしが。その後、あどなくありしを。日頃不審に思ひしに。さては此玉の出し故あらん。此上の御邊の守り。誰とられよとさし出せば。額藏取てかした。ハ、有がたし。ハ、おが玉我にかへりし上。一犬士に尋ね。悦ばし。又あれなるは犬士の一人。彌助と。世を忍ぶ假の名。まことハ犬塚信乃成孝と。いふ道に節詞を改ため。扱は妹。濱路がいひなづけの。犬塚信乃とは。其殿よな。初對面。引出物に。村雨丸を返進せんと。笈の中より錦の袋。取出して與ふれば。犬塚はつとあしした。ハ、有がたし。いま社手よ入村雨丸。以後は眞性の兄弟と。言よ勇みの三犬士。よろこび色又顯はれたり。手負の老女は目をひらき。ハ、勇ましい勇士のかたぐ。それともしらす是までの。無禮の罪の赦してたべ。只淺ましき。姥か身一ツ。忠義の爲と。言ながら。これまで多くの人を殺し。作りし罪の數々を。是見給へとかたへある。盤剣上つかみ出す。金の包の限りなき。苦勞をさぞと人々は。各袖をぬらしける。老女くるしき息をつぎ。此身の罪障滅に。淺師寺の寺中にて。石の枕と末世まで。一ツの古跡を残し

花 魁 八 總

花魁 茗 八 總

、ころり高いびき。コリヤ、辨達。おきんかい。エ、あのればかりくらみて。コリヤモウ往生まおつたか。腹いせにのこから。はな紙折て角帽子。ハ、よい佛じやと打笑ひ。二人の勝手へはしり入。辨達はねぐるひま。轉びまいつて高座の下。這入折しも門前より。家來引進捕手の小かしら。案内もあく打進る。出合頭に南徳。あなたのとれから。身共は坂田の金平太といふ者。聞ば此寺に淺毛野といふ女をかくまふよし。証識の爲にむかふたり。寺内のやつばら一々呼出せ。顔あらためんとさめつければ。ヤ、御守なされしばらくと。殿打かけて庄や松兵衛。門より這入る片手に杖女として寺内におくからは。ぐるになつて念佛誦する手もゆる事。コリヤ、ヤイ伴僧。此寺の人別は。庄屋の某よつくしる。早く皆々呼出せと。二人がひからす。登りまなと。南徳の納戸口。ちよかよくと呼聲に。おつと答へて出て来る。わんは坊主はなべつたり。こいつでないを突飛す。次はなつ所の道つんが。あくびまじりのよだれくり。南徳よチリヤ、モウをばりにゆきたいと。しつこさ頭にあま鯛の。南風くらふた如く也。のろまのいぬかと呼聲に。伴僧あんじやとはしとくを。出て来る小僧はぐはんせなし。顔の白瓜ねとばけまを。其外あまた幾つふしの。坊主獲らず呼出し見せても。似ぬこそ道理。土氣はなれぬ願ひも。打つれてこそ走り入金平太のむくりをにやし。氣ささいなこの高座と。かけたる打敷引まればふつと目覺す辨達がすがた見るより金平太。のふ悲しや幽霊じやと。家來もとるに隠れの膝もわなく。响るひ。譯のしらねと辨達が。おどしてくれんと手をびりく。ハ、ちやちやめしや水のみたや。とこの寺でも尻すはらず。宙宇にふらりの此幽霊。まよふて來ました。あつかんのちろりに引され來たわいのふ。此恨みの貴さまたち。地獄へつれゆき赤鬼の。酒の肴にしてくれんと。はつとついたる背息は。ならつげくさくを見ひける。金平太は身をちぎめ。ア、申く幽霊様。とふぞ了箇のそばして。お消さされて下さりませ。イヤ、ならぬ消て

花魁 茗 八 總

はしくばれ次第。持合せを獲らず出せ。憑ひと一々取殺し。酒の地獄へはめてくれふか。ア、申く。詮義の役目つとめるも。命あつての上の事。則そふが辨達代の残り。ア、て三百ござります。とふぞこれでおさへなされて下さりませ。イヤ、二百や三百の錢なら。おれが方でもやる。幽霊も三百はり込で。はたかで道中といふ事もある。主も家來もはだかになれ。エ、それのあまりお胸欲。とふぞおゆるし下されませ。イヤ、ならぬおそい。一々取殺さふか。ア、これは又ささげない。いかなるおんまが見いれしぞと。みなく。顔を見合して。せひなく帯をさきはさき。しやくり上たる响るひ。冥途の旅の追廻り。極道能なしの主従が。財布のからのすかふり。やりぬる錢はせひもなし。淺毛野たれかせん義せん。さぞ。ひだるかる家來も。風を引など先に立。やしさをしとぞ。歸りける

其一 高屋堤

花魁 茗 八 總

冬ざれば。風の音。高屋川。場のかげに非人ども。却ても世にのあられふる。巻さ。しのぎと面々が。古木竹切どりあつめ。衛士にはあらぬ焼火のかげ。消るはをしき命かや。家來に先を拂はせて。千葉の執權馬加大記。けふ物まふでの駕乗物。行列美々しく出來れば。ソ、ヤ、お通りじやと非人ども。俄に火をけし道端に。隨まつてぞ平伏す。駕たてさせて馬加大記。寛々と立出。ヤ、おどるも。身は此所に用事あり。その方どもはかしこの松原へ行。身がよびだす迄相待よと。追立やり。非人どもに打叫ひ。汝等に頼みあり。後美の過分遣のさふが。何と頼まれくれまいか。イヤ、御褒美さへ下されふならば。どんなお頼みでも。ホ、ハ、過分。外の義でもない。追付此所へ來る旅の者。打殺して捨るならば。望次第にはうびくれんと。聞て非人の笑坪に入り。旅人の一人や二人は。ソ、イヤ、た、んで見せませふ。ア、出かす。隨分とるにゆだんなく。首尾よく仕謀せ死骸は川へ。コリヤからと。言付

花魁

非人共が無法の狼藉。やむ事を得ず切て捨たり。シテ御自分の御姓名のな。イヤ某は馬加大記と申者。此邊の非人
ども。旅りに旅人を刺さる事上聞に達し。召捕んため向ひし處。幸ひその元の働にて。悪黨ども相果。イヤモ祝
着至極。禮謝のため且。勇士と交りの盃も申請たし。何卒暫時身が屋敷へ。御入來めらば大慶たるべしと相述
る。小文吾詞をあらためて。御芳志の段添し。まかし朋友の行衛を尋んため急ぎの道中。ちと心せきに候へば。
残念ながら御意にまたがひがたしと。いふを常武おしかへし。いそぎの旅と有を。と。むるは心なけれど。最早
黄昏。今よひ一夜の拙者が宅へ。せひども御入下さらば。武士の面目此上なしと。余義ある詞は犬田小文吾。ま
からは是より同道申さん。ヤそれは何より大慶と。互に折それ常武が。心の底はまら砂の。道踏て石濱の城内。
さしてぞ。

其二

常武館

花魁

歸ける二十かへりの花を合や若縁。猶方歳の春の空。祝儀詣の聲々も。一際目たつ高擧作り。馬加大記常武が。住
家の結構。おそりにみかく鏡戸も。あせいか、やく大廣間。髭の塵とる渡邊綱平。いかつがましく入來れば。奥
より出る馬加大記。一子倉彌五從へて。もみけの席におし直り。チ、綱平待かねしと。いふにいつと頭を下げ。ま
づ以て今日は。若旦那の御家督さだめの儀式。目出度ぞんじ奉ると。あもねる詞に打ちあづき。チ、サ我執權の
役付せしより。近國の歌を取りしぎしは。此常武が武勇による處。三跡目たるせがれ倉彌五。今日家督に定め。
落葉丸をゆづり與へたれば。今日よりは我も同然。随分忠義を勵めよと。言つける折こそあれ取次の侍罷出。金
鞠刑部様御入來也とまらすれば。ナニ吉公御人とや。コリヤ綱平。式堂造い。迎よ。早くくと追立やり。席
を儲て親と子が。待間はどなくはんくと。早入來る刑部高吉。あるじに目禮しとねの上。ひんすと座したる

花魁

尊大がは。常武は頭を下。高義公は遠路の御入來。大慶至極と相述る。高吉はくく打照。先送て使者をさ
し越。味方を招し處。早速の承引過分。御遊を味方は招しは。頼胤を押片づけさせんため。仕あふせるよ於
の千葉の所領半をささ。石濱の城主とすすべし。いそぎ手段をめぐらされよと。武威にはこりし一言。常武
もにつこと笑ひ。何さま又密々に。申請する仔細も有。イヤ先奥へ。ソッ綱平。御案内仕れ。ハッ答へて先に立。
案内に連て高吉の。常武親子を伴ひて。奥の間。さして入にける。西伯が七年の。園里のどら入れ身にぞしる。
犬田小文吾佛頼は。常武が詞に引れ。離れ座敷に閉込られ。昨日と暮しけふと暮。早半月の逗留に。心あらねと
詮方も。あ。さむもの。冬牡丹。花の詠めに折々の心のうさを晴しける。袂押明。膳部の侍。目八分に拂へしで。
主人常武口上りの。長々の御逗留御退屈察し入。ゆるく御面談申べき所。折悪く公用打撃さす暇なく。今日
は心祝の儀も候へば。後刻本宅へ前招し。つる御咄申あげん。先々能酒魚めし上られ下さるべしと。言つ。
膳部銚子盃。小文吾が前にさしかけ。これのく日毎の取持御苦勞千方。いまだ物はしうも候はねば。其儘に
さし置。馬加氏へ然るべく。傳言願入申と。挨拶すれば。心得。袂引立入にける。小文吾の跡見送り。銚子追取
牡丹花にそ。きかくれば見る内に。さしも盛りし紅白も。色を變じてかれしむ。ハ、扱こそく。此頃より送
る食物。咽を通れば腹痛堪がたけれ。守の玉を口に含めば。即座は痛を忘る。事。合点ゆかすと思ひしに今牡
丹の枯しはむをもつて考ふれば。正しく薄酒。ハ、扱はわれを人しれず。害せん。日毎の酒食に珍毒を入たる
ならん。されども毒をまぬがれし。名玉の奇。ハ、扱はだんならざる工みやと。舌を巻たる。後の方。窺ひよつ
たる忍びの曲者。兩人一同に振連て。切て掛るを身をかりし。扱手も見せず右。左。ひらめく刃にばつと。一
血煙立たる時しむあれ。這間を松がへ忍びが筒先。火ふた切間もあら男の。唯笛丁と飛來る手割。あつと一

慥とふと落。そのまゝ、庭に倒れ伏す。小文吾すかさず立よつて。こやつは常武が腹心。卜部季六と。言つ、替
 扱とつて。ハテ心得ず。これはコレ見覺ゆる淺毛野がかんざし。これ迄度々此處へ忍ひ來り。われも戀慕の有さ
 まなれど。元より女に迷はぬ某。つれなくも取合ざりしが。此かんざしにて季六を打留し。女に似合ぬ。適手
 の内。たゞしは余人の助けかど。とけぬ不審に打傾き思ひ入たるばかり也。深山路の。梢の猿それらで。戀ゆ
 へしのふ淺毛野が。人めを包む手拭。顔を隠して松が枝を。身もかろくぐとつたひあり。庭へひらりと飛石づ
 たひ。夫と見るより聲をかけ。誰じや〜。チ、淺けのか。マイ小文吾さん。お身に怪我はなかりしかと。言つ、傍
 へより添ば。〜、スリヤ今此かんざしで。マイお前をねらふ忍びの曲者。討留た私が心中。ほんよどふしたるにし
 やら。此おやしきへ招かれて。ふつと見初たその時から。いとしらしめてきつとして。あんな殿御と一夜でも。
 枕かはさば本望と。人目の翳をいく度か。しのぶのみだれかきりあき。心尽すは誰ゆへぞ。是はどしたふ私が願
 ひ。心強やと。取付て。思ひのたけをゆふせん。色にそ染る。風情也。小文吾は聲あら。げ。ヤ、常武か下知をう
 け。色をもつて氣をゆるさせ。われを害せんとはあざとい巧み。早立されよと。夫の詞淺けのつれ〜打ながめ。
 エ、疑ひふかい其お詞。常武に頼まれたり聞へませぬ。眞實おまへの男氣に。まよふ私か身の因果最前も倉彌五
 が。常武にす、ひるは。お前を討んとの相談を。立聞して氣遣ひさ。もしやと思ふ折からに。飛道具でねらふ曲
 者。私がかんざしで討とめたり。常武。頼まれぬ心底。是程思ふようたがひの。心とけぬの願欲な。氣強わいな
 とばかりにて。恨なみだよくれければ。小文吾も面を和らげ。〜、其詞に違ひなくば。城内出入の鑑札を取來り。
 某へ。渡されよ。さらば爰を立退て其上にて夫婦のかたらひ。成程心得ました油斷を見渡し鑑札を。盗み出して
 お渡し申す。〜、それでこそ我への心中。まかし邪智深き常武。見とめられては其身の大事。ソリヤ台点で

花 魁 荅 八 總

さんする。お前もすい分用心して。待てゐて下さんせ。人のこぬまにみふさらばと。小づま引上ひらりと飛あり
 誰かはそれと見越の松。よち登つたる身がるの取なり。元來しかたへ忍び行。跡見送りて小文吾も。いでや用
 意とひとりごと。一間の内へぞ入にける

其 三 吹分花の餘給

見渡せば柳櫻をこさませて。錦をかざる花車。注言走り見物左衛門と申者でござる。今日の東山の花を見よふと
 存る。先そろ〜と参らふ。イヤ誠に。國々に花の名所も多くござれば都のながめにはおよぶ事ござらぬ。イヤ
 ヤ何かと〜内はや東山とござる。ア〜〜向ふに見ゆるり白拍子。けふの趣向の舞の曲。われらも社人に一
 踊り。まじりそれ送る此ふ〜。待合そふ。春とに。戀しとまたふ舞の。梅の名にあふまよはひの。そ
 の御ひいきを松竹の。幾千代ねがふ鶴龜や。ふりかたけたたる櫻花。いとしと長ふ振そでの。娘やとみな人さんが
 淺い心ととふがうそか。君が。枕に。問まやんせ。ほんにいらへも空吹風に。みだれし儘の玉くしげ。はらげ髪
 して逢夜もあり。移り香袖に。エ。エ。圓の露。おもしろや。せめて人めの。鬨だになくば。心の内の隠しおみ。書
 てやりたや。明の鐘。引手あまたの。こちや身じや逆も。すねる女のつら憎や。こちらむかんせ。〜、氣の強い。花
 にもれ入。その風情。はかせを立て。ひらり〜と飛廻り。花の香またふてふ〜の。花にあらそふ。つが
 ひ〜の有ばこそ。思へばこがればふり〜と。ふはと脱たる花の袖。よしの初瀬の花ざかり。ちり〜る〜
 。如月彌生のはなきかり。散か、る花のすがたの。まほらしや。〜、イヤモンとふみいはれぬ。御されうと
 ひ風俗と〜ひ。春のやあざに梅花のかほり。イヤとふも〜。南無三めれた。〜、此舞たんのめれたに付。思ひ
 出すは娘が事。今年十二はしかるかるふ。はやり風〜。〜、引おせせ。〜、十三のやうに。しや〜

花 魁 荅 八 總

れてた、よふを。真向とかがみ討。すきをぬらふて臼井の定九郎。こまたよりの坂田の金平。双方ひとしく切込木刀。踊り越て臼井が細くび。切ておとせば退出す。走りか、つてはつきりと。あぶせる一木刀二階より。おつるの真逆さか田の最期。その外近習外縁の武士。あたるを幸ひ切盡し。血けぶり立たる側さはめざましく。祖見へにけれ。折しも駈くる犬田小文吾。ホ、天暗く。犬坂氏我に懸幕と見せたるの。心をひく手立なる事。未六を討し手練にて。扱は男子と察たり。その上銀平が守りの内よ。御邊より送りし一逆。智の字の玉を所持あるよし計されたれば。疑ひもなき犬士の一人。イサ此上の高吉が。すかふべ切て里見の再興。實尤と犬坂の。小文吾もろとも力足。ふみ立く。はしり行。客殿には金鞠高吉。天命のがれぬ酒宴のゆだん。離子役者と身をやつせし。道徳見八信乃前藏。或ひの新兵衛徳太郎。八方を追取ま。高吉いかりの髪逆立。扱は御舞の役者といひしは。歌の間者で有しよなど。いはせもはてす犬山道節。ホ、汝が此城中へ来ると。單衣が靈魂の告にて。決りしる。千葉殿も願ひすがたをかへて入込しぬれくは。里見の忠臣八犬士。もはやのがれぬ尋常に。切腹せよと呼はる時しも。常武親子が首引き。犬坂犬田もろとも。宙をとんでかけ来り。逆賊高吉體にさけ。馬加親子手の者まで犬坂毛野が討取たり。首さしのべて観念せよと。いふに刑部は無念の齒がみ。我千葉山の内を攻亡し。關八羽に羽をのさんと思ひしに。逃て此城中へ来りし逆のつき。もふ是までと押肌ぬぎ。刀を腹につき立たり。奥殿より千葉頼胤。里見義成立出給ひ。逆賊高吉亡し上は。再ひみこる里見の榮へ。八犬士の恩賞は。入國の上その沙汰せん。父義實が仇がへしは。斯の通りと援手も見せせ。首の前にぞ落にける。千葉の介蔵に入。岡家の寶納まる上。八犬士そろひしは。里見の家榮へる前表。目出たく歸國あるべしと。仁者の詞によし成公。犬士のめんく。悦びの眉をひらくや東雲の。空にのぼれる朝日かけ。ゆたかにてらす君が世を。

いく千世かけて祝ひけり。

里見八犬傳終

明治廿六年二月十三日印刷
明治廿六年二月二十日出版

定價金八錢

故人

山田 紫山 子

大阪市東區安土町四丁目卅八番屋敷

鈴木 常松

大阪市東區安土町四丁目卅八番邸

積善 館

福岡縣博多市中嶋町

積善 館支店

東京市日本橋區橫山町二丁目

出雲寺書店

大阪市南區末吉橋通四丁目四十三番屋敷

山口 恒七



版權登錄





205155-000-8

特10-218

里見八犬伝

山田 案山子/校

M26

EDV-0168

